

腐敗及び化膿の原因

微菌の身體内に侵入する門戸

借らざれば到底見る事能はざるものあり是に二種あり身體に侵入して病を惹起する所のものを病原菌と云ひ身體に害をかさざるものを非病原菌と云ふ其病原菌が一度身體に侵入し繁殖するときは其部を腐敗せしめ且一種の毒素を發生して遂に死を招くに至る彼の皮膚に受けたる切創挫創等の化膿に陥るが如き或は虎列拉、腸窒扶斯、實扶的里亞の如き其他總ての傳染病は皆此の微菌の身體内に繁殖するによりて生ずるものなり而して身體の血液筋肉結締織等は最も微菌の繁殖に適當なる營養物あるが故に人體内に侵入したる微菌は速かに繁殖すべし

微菌の身體内に侵入するは皮膚の小創呼吸器飲食物等によるものにして身體健康なるか或は皮膚に創面なきときは容易に

○消毒トハ如何ナルモノ且ツ之ニ用ユル藥品ノ主ナル名稱ヲ記セヨ

防腐法と制腐法との區別

○産婆ニ消毒法ノ必要ナル理由ハ如何ナル

侵入するものにあらず之れに反して若し皮膚粘膜等に小創を受くるか或は身體虛弱なるときは微菌は吾人の周圍に普く存在するが故に直に侵入して其害を逞しくすべし而して此の如き微菌を殺し其毒を消滅せしむるを一般に消毒と稱へ其方法を消毒法と云ひ其の中微菌の有無に關せず消毒法を行ひ腐敗を未發に防くを防腐法と云ひ既に微菌の蕃殖し腐敗しつゝあるもの、微菌を殺して腐敗を止むるを制腐法と稱へ是等の目的に用ひらるゝ藥品を消毒薬又は防腐薬と云ふ
婦人妊娠するときは其生殖器は一般に血液に富み柔軟となり加ふるに分娩によりて生殖器は多くの小創を生ずるが故に産婆の手指器械等に附着する微菌は直に生殖器に轉移し此處に蕃殖して産褥熱の如き最も恐るべき病を發し遂に生命を失ふ

○産婆ニ消毒法ノ必要ナル理由ヲ擧ゲ

消毒法の種類

に至るべし故に産婆は常に手指器械等に附着せる微菌並に陰部に觸接する布片の微菌を殺し尙微菌の附着せざる様言はゞ無毒的に處置せざるべからず之れ産婆に消毒學の甚だ必要ある所以なり
微菌は攝氏百度以上の熱に遇しむれば多くは死滅するものにして之を熱氣消毒と云ひ又濃厚なる石炭酸水昇汞水リゾール水の如き消毒薬に遇ふも死滅すべく之れを藥物消毒と云ふ産婆は消毒する物品の性質により便宜取捨して此れを應用せざるべからず

第三十二節 産婆の手指並に外陰部及び膈の消毒

○産婆手指ノ消毒法ヲ詳記セ

○産婆ノ心得ベキ消毒法如何

○内診時ニ於ケル産婆ノ清潔消毒法

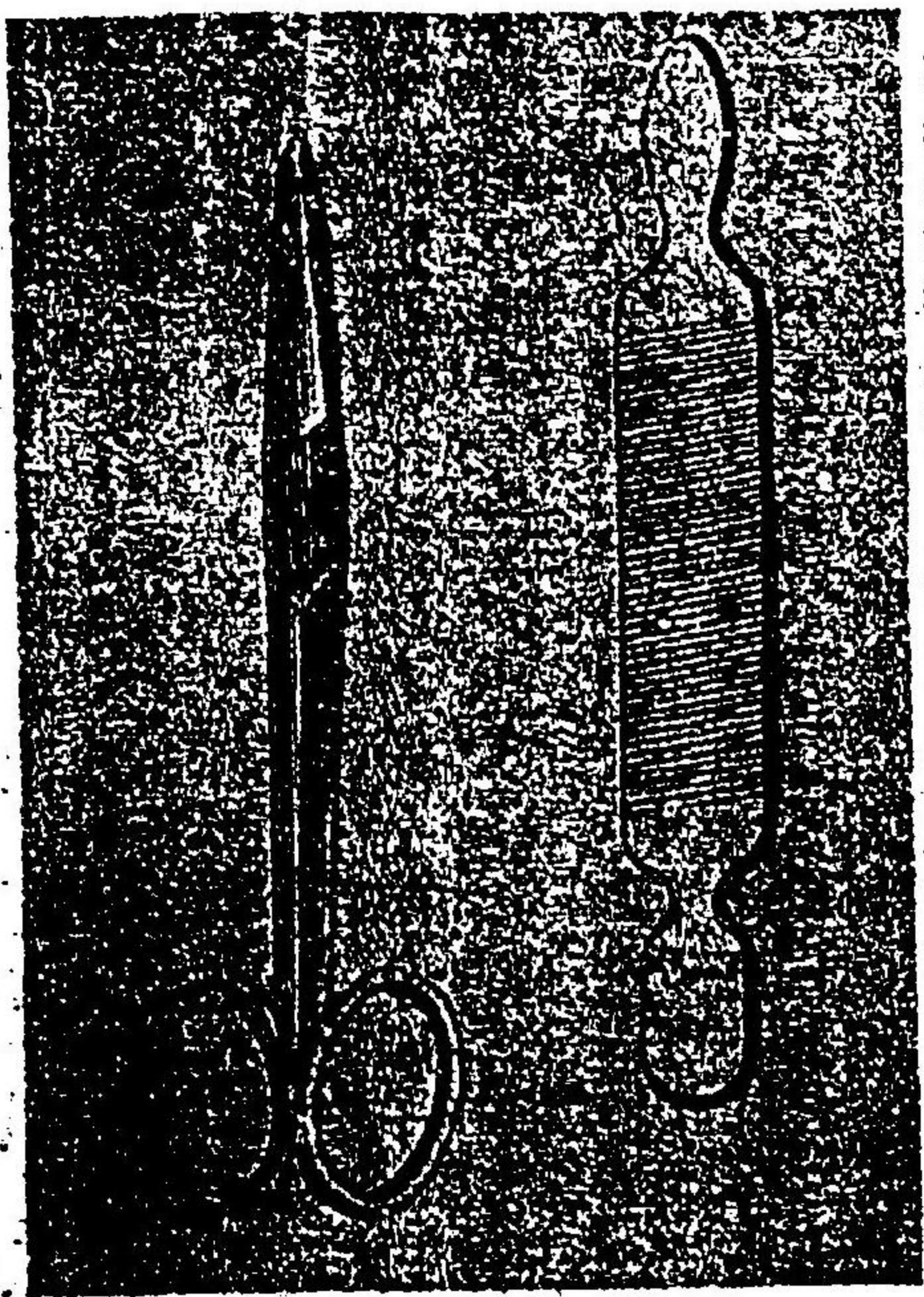
一旦消毒したる手指も消毒せざる他物にふれば更に消毒せざるべからず

衣服の袖を肘部まで捲き上げ剪刀を以て爪を短く切り其尖端は爪鉋を以て圓滑ならしめ爪垢を去り然る後手を濕して漸く耐へ得る位の温湯中に肘部に至るまで濕し(攝氏五十度)加里石鹼又は通常の手洗ひ石鹼を塗り刷子を以て少くとも十分時間指先より肘部に至るまで擦り殊に指間爪縁を丁寧に擦り温湯中にてよく洗ひ然る後三十倍の石炭酸水又は五百倍乃至千倍の昇汞水中にて少くも五分時間刷子を以て擦りて洗ふべし斯の如くして消毒したる手指は其消毒薬に濕して搾りたる消毒綿紗を以て拭ひ其以後決して他物に觸れざる様注意し次で外陰部及び膈の消毒に移る但し石炭酸水昇汞水等の代りに百倍のリゾール水を用ふるときは甚だ便利かり何こなればリゾール水の内に於て消毒したる手指は甚だ滑らかなるを以て内

○内診時ニ於ケル産婆
自己ノ消毒法

○圖及ビ外陰部ノ消毒
法ヲ詳記セヨ

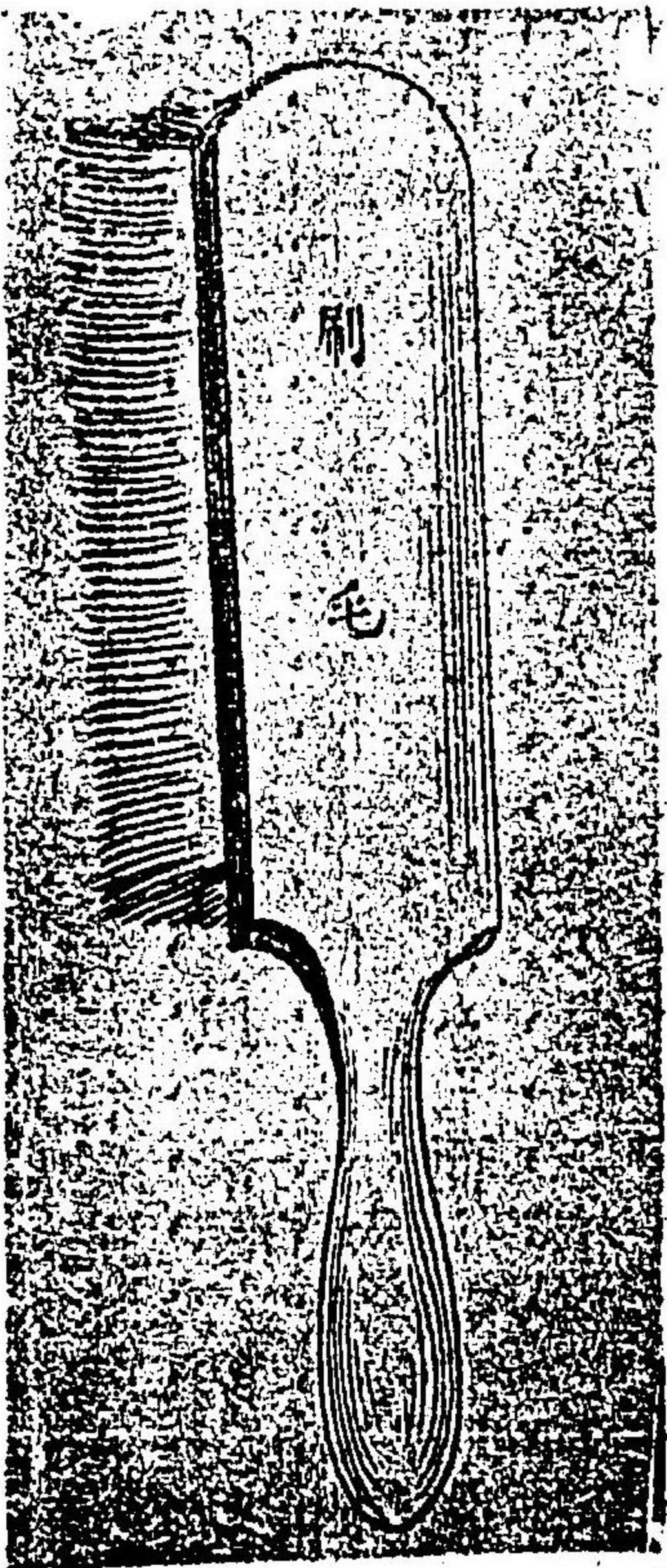
(甲) 圖七十五第



診等に際して油を塗るの必要なく石炭酸に比して價の廉あるのみならず少量にて消毒の效をなすことにより産婆は實地に應用して大に便利を感ずべし、外陰部及び膣を消毒せんには先づ陰毛長ければ此れを短く切り微温の五十倍石炭酸水若しくは百倍リゾール水を灌ぎながら殺菌ガ―ゼを以て叮嚀に陰部鼠蹊部會陰部大腿の内面に至るまで洗ひ次で右手の示指を膣内に

手指の消毒に要する器具を示す(爪鉗)(剪刀)

(乙) 圖七十五第



同

し微温三十倍の石炭酸水を干乃至二千五灌ぎて好く洗ふべし外陰部及び膣の消毒終らば更に手指を前述の如く消毒し終つて内診等を行ふべし而して消毒の際は素より腕輪指輪の如きものは悉く取り去り手指に上皮剝離(サカムケ)等の小創あらば二十倍沃度仿謨格魯胃謨を塗布して創面を固封すべし

挿入し之れに沿てイ
ルリガ
ートル
の嘴管
を挿入

第三十三節 器械之消毒

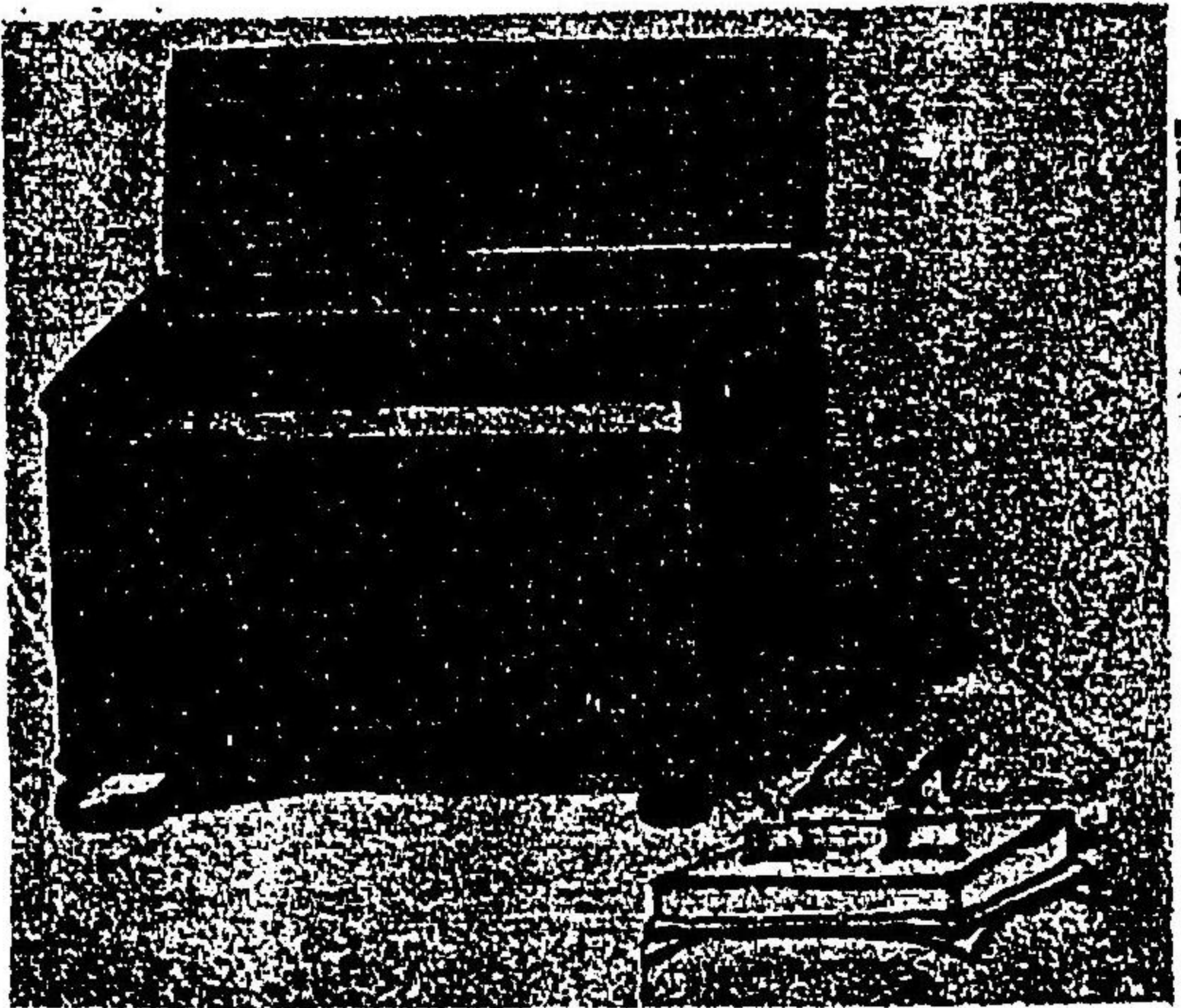
○産婆ノ日常用ニル器械ハ如何ニシテ消毒スルヤ

○産婆ノ用ニベキ器械及ビ藥品ヲ記セ

産婆の使用する器械の内イルリガートルの嘴管及カテータ、
 ル、臍帶剪刀、臍帶結紮絲、刷毛、爪鑷、鉗子等、硝子製、
 金屬製の器具等は消毒釜の中に投じ百倍の炭酸曹達水中にて
 十分時間以上攝氏百度以上の温熱に於て煮沸して用ふべしこ
 雖ども消毒釜の持合せあきき竝に往診先き等にては先づ
 石鹼ミ刷毛を以て能く擦り温湯を以て清潔に洗ひ熱湯を充分
 に灌ぎ三十倍石炭酸水又は五十倍リゾール水の中に凡そ三十
 分時間濕し然る後使用するも妨げあし而して角製籠甲製ゴム
 製器械等煮沸消毒を行ふべき其の品質を損ずるの恐れあるも
 のは石鹼刷毛を用ひ清水にて洗ひ三十倍石炭酸水或は五十倍

ワセリンは油の一種

第五十八圖



器械消毒釜を示す

に必ず嚴重なる消毒を行ふべし

のりゾール水の中に凡そ三
 十分時間以上濕したる後使
 用すべし總て器械は使用前
 一回消毒を行ひ使用後更に
 消毒を行ひ叮嚀に之を拭ひ
 全く水分を去り金屬性のも
 のは少量のワセリンを塗り
 て保存するを宜しとす而し
 て産褥熱又は傳染の恐れあ
 る病人に用ひたる器械は常

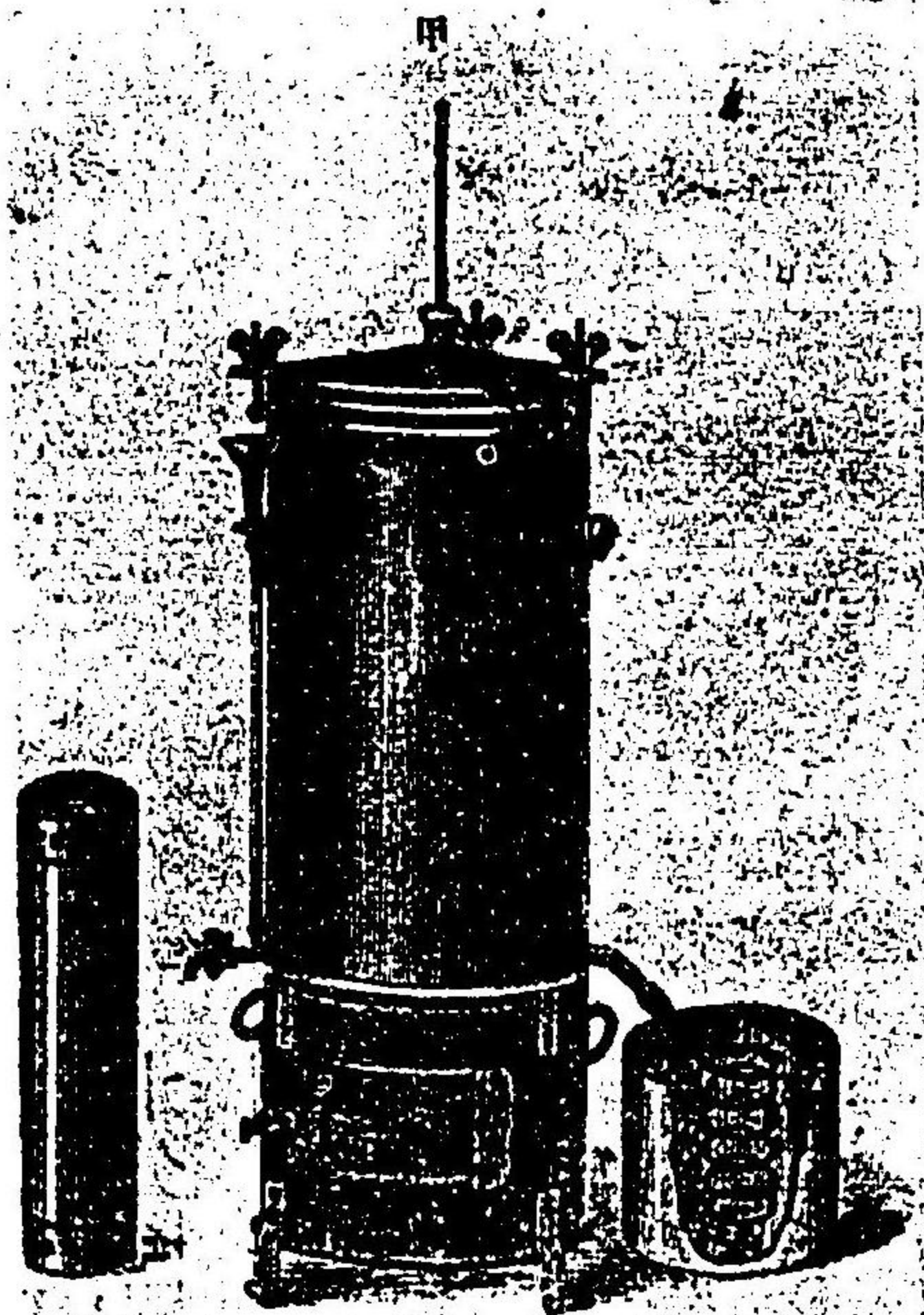
第三十四節 繡帶材料之消毒

○産婆ノ用ユル繡帶材
料ハ如何且其消毒法
ヲ記セヨ

繡帶材料とは綿紗、綿花、腹帶、丁字帶、壓抵布、其他の布片を云ふもにして是れ等直接或は間接生殖器に觸るゝ物は總て

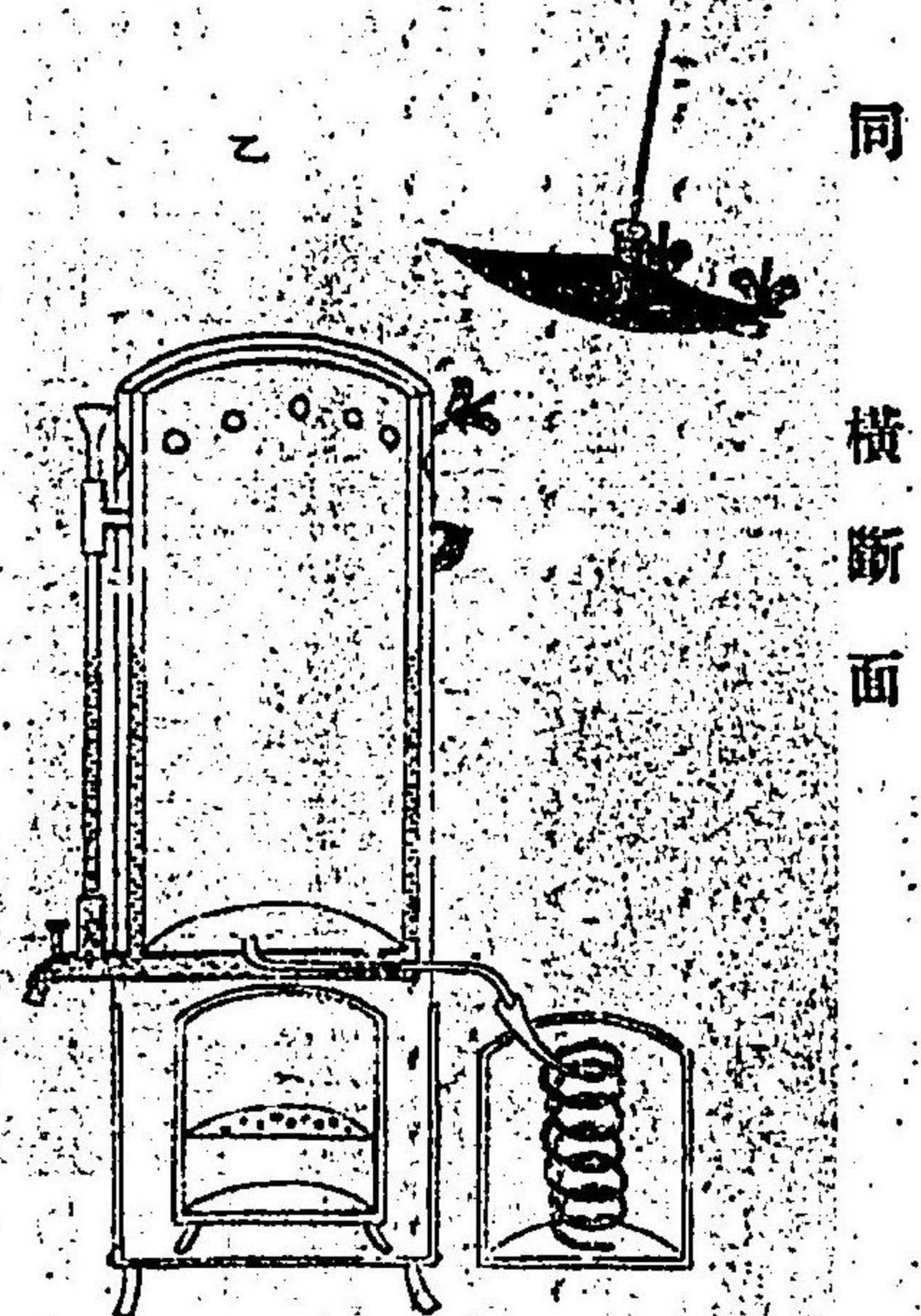
繡帶材料並に衣服等の消毒釜を示す

(甲) 圖 九 十 五 第



蒸氣消毒釜を用ゐて攝氏百度以上の蒸氣を流通せしむる事一時間にして乾燥せしめ然る後之れを入れたる器を密閉し置き不潔

(乙) 圖 九 十 五 第



同 横断面

し塵埃なき所に於て乾かし之を密閉せる器中に貯へ置き用ひ臨みて之れを開くべし總て消毒釜は其價廉ならざるを以て産婆各人之れを裝置する事容易ならず故に數人連合して之れを求むるか或は藥舖、器械舖等と特約して消毒を行はしむるこ

物の觸接を防ぎ用に臨みて開き用ふべし若し之れを行ふ事能はざるこきは通常の釜の中にて一時間以上煮沸

きは大なる便利ならん然れ共通常販賣する硼酸綿花、撒里失兒酸綿花、昇汞綿花及び綿紗等は全く使用して用ふべきものにあらず製造後時日を経る間には或は不潔のものに觸接し多くの微菌を含有し之れが爲に測らざる害を蒙る事あり而して敷布襪裸の如きも出來得べくんば前述の如く消毒を怠すべし古來分娩に際し殊更に不潔の襪襦を集めて之れを用る甚しきに至りては古俵の上をこにて産を怠すものありて實に危険至極あれば産婆は全力を盡して之れが改良に勉めざるべからず將來に於て聖人君子にもあるべき大切ある小兒を産むに不潔の襪襦を用ひ死せる者の葬式に莫大の金子を投ずるか如きは最も誤れるもの云はざるべからず若し萬止むを得ず襪襦を用ふる場合には必ず前以て煮沸消毒又は蒸氣消毒を行はざる

べからず

第三十五節 産婆衣服の消毒並に身體の清潔

體の清潔

産婆は常に手指を傷けざる様注意し且つ身體の汚染せざる様心掛け常に消毒したる看護服と同一なる手術衣を着するを良しす而して若し産褥熱其他傳染の恐れある病人に接したるときは直に全身浴を行ひ以て身體を清潔にし手指は殊に嚴重なる消毒を行ひ然る後衣服も消毒したるものと交換せざるべからず加之傳染病者に接したる際用ひたる衣服等は凡て煮沸消毒又は蒸氣消毒を行ひ若し能はざるときは熱湯を充分に注ぎ石鹼を用ひて能く洗ひたる後數日間日光に曝さるべからず

産婆の手指に創傷ある時は完全なる消毒を行ふ事はざるのみならず自から傳染毒を受くるのおそれあり

産婆の手指を大切にし身體衣服を清潔にするは決して装飾にあらや職務に忠實なるものなり

○助産婦ノ使用スベキ
防菌薬ノ種類及ビ用
量如何

○産婆ニ必要ナル薬品
ノ名稱及ビ用法ヲ記
セ

石炭酸は臭ひ高き
無色の結晶なり

○助産婦ノ使用スベキ
消毒薬ノ名稱分量及
ビ「プロセント」ノ意
義如何

プロセント記號%
とは百分中に幾何
と云ふ意味にして
例之ば一%石炭酸
水千瓦と云へば九
十九瓦の水の中に
一瓦の石炭酸をどか
したるものなり尙
ほ詳細は後編看護
法の條下を参照す
べし

第三十六節 産婆に必要な薬品の 名稱取扱法及使用法

(一)石炭酸 最も多く用ふる所の消毒薬にして器具消毒の目
的には二十倍乃至三十倍の水溶液にして用ひ、腔内其他の洗
滌用には五十倍乃至百倍の水溶液にして用ふ、但し石炭酸水
を永く持續して用ふるときは其刺戟の爲め局部發赤し或は
發疹することあり、然るときは其使用を止めざるべからず
石炭酸水は先づ純結晶石炭酸十分に蒸餾水一分を加へて溶
解石炭酸あるものを造り貯へ置き用に臨みて之を稀釋する
を良しす、即ち一定量の温水中に製せんことを欲する「プロセン
ト」%に相當する丈け溶解石炭酸を加へ能く之を攪拌する

昇汞は無色の光り
ある小なる結晶な
り

○昇汞、リゾール、石炭
酸ノ各溶解量及ビ各
品ノ特性ヲ記セ

か或は能く振盪して全く石炭酸の小球を認めざるに至りて
使用すべし、若し石炭酸の混和不完全なるときは溶解せざる
石炭酸小球は灌注部に觸れ此部を腐蝕し甚しき害を及すも
のこす、而して薬舖に於て販賣する純結晶石炭酸一磅入一瓶
中には四百五十五瓦を容るゝが故に是れに四十五瓦の蒸餾水
を注入して日光に暖むるか或は其瓶を温湯中に浸して少し
く暖むるときは結晶せる石炭酸は容易に溶解するものこす
(二)昇汞 是れ又多く用ゆる消毒薬にして五百倍乃至千倍の
水溶液にして専ら手指の消毒に用ひ、其他硝子器、ゴム製器具
の消毒に用ふ、但し金屬製の器具は昇汞に逢ふときは腐蝕せ
らるゝを以て使用すべからず、且昇汞は石炭酸リゾールに比
すれば消毒の效顯著なる丈け、其れ丈け劇薬にして組織内に

吸収せらるゝときは全身の中毒を起すが故に妊婦の膈内は勿論分娩時産褥時等の如く生殖器に創傷の存する場合には必ず用ゆべからず

昇汞水を製するには先づ昇汞一瓦食鹽一瓦を蒸餾水二十五に溶解し溶解昇汞あるものを製し置き用に臨みて稀釋するを良しす但し昇汞水は無色無臭の液にして殊に毒藥なるが故に通常「フクシン」を稱する色素少量を加へて着色し他の液に誤らざる様にす

(二)リゾール、五十倍乃至百倍の温湯液を以て手指外陰部及び器械の消毒に用ひ百倍の温湯液を以て陰部の洗滌に用ふ

リゾールは温湯に溶解し易きを以て一定量の温湯に製せん

リゾールは淡褐色
粘稠の臭氣高さ液
體なり

硼酸は石炭酸昇汞
リゾールの如く防
腐の力強からず
硼酸は白色光りあ
る小なる結晶なり

こ思ふプロセントに相當する丈け「リゾール」を注入し能く攪和して使用すべし若し混和不充分なるときは溶解せざる「リゾール」球は灌注部に觸れ其部を腐蝕し甚だしき害をなすものこす

以上の石炭酸昇汞リゾールの濃厚液は何れも人體の皮膚に觸れて局部を腐蝕するの性あるを以て其取扱に注意せざるべからず

(四)硼酸、三十倍乃至五十倍の温湯溶液を以て洗滌藥に用ふ又粉末をこしたるものは臍帯の斷端及び腋窩鼠蹊部等の糜爛面に撒布す其他眼及び身體諸部の罨法に用ゆ
硼酸水を製せんには硼酸末に熱湯を加へて溶解し之れを冷却し適當の温度に至て使用すべし

沃度仿謨は光ある黄色の粉末にして一種の臭氣あり

デルマトールは黄色無臭の粉末なり

酸化亜鉛は白色の粉末なり

(五)沃度仿謨、多く用ゆる所の防腐薬にして粉末のまゝ、臍帯の斷端及び外陰部腔等の創傷に撒布し之れを含ませしめたる沃度仿謨綿紗も亦粉末と同じく陰部の創傷臍帯等に貼布す本品は薬舖に於て購入するを得べし常に日光を遮り貯ふべし但し時として沃度仿謨は皮膚を刺戟し發赤癢痒を感じ發疹を來すことあり然るときは此の使用を廢し他のものを以て代用せざるべからず

(六)デルマトール、多く用ふる收斂薬にして小兒の腋窩鼠蹊部等の糜爛面に撒布す又臍帯の斷端に撒布するときは早く乾燥せしむるの效あり

(七)酸化亜鉛(一名亞鉛華) 等分の澱粉に混和し小兒身體の糜爛面に用ゐて大に效あるものとす

古魯胃謨は能く燃焼するの性あれば火を近くべからず阿列布油は黄色の油なり

偏利設林は無色粘稠の甘き液体なり

藥用石鹼末は黄白色の粉末なり

(八)古魯胃謨、其儘若しくは沃度仿謨を加へて二十倍沃度仿謨古魯胃謨とあして手指の小創を固封するに用ふ

(九)阿列布油、手指器械の表面を滑澤ならしむる爲めに用ふるものにして阿列布油三五瓦に石炭酸一瓦を加へて混和し内診等の際手指の尖端に塗り或は浣腸器の尖端尿道カテーターの外面等に塗布す

(十)偏里設林、浣腸料として等分の水を加へて攪和し小兒には五瓦乃至十五瓦大人には二十瓦乃至三十瓦を偏里設林浣腸器を以て使用す

(十一)藥用石鹼、大人の浣腸料として實用するものにして其八瓦乃至十五瓦(二匁乃至三匁)を凡そ三百瓦(凡一合五勺)の温湯に溶解しイルリカートをを用ひて浣腸す

硝酸銀水は無色の液なるも日光に透すへば忽ち黒色に變ず

ホフマン氏液も能く燃焼す火を近くべからずホフマン氏液は無色透明芳香を放つ

(十二)硝酸銀水、一プロセント(一%)硝酸銀水を初生兒の點眼薬として用の硝酸銀水は日光を遮ぎり常に黒色の瓶中に貯ふべし

(十三)ホフマン氏液、母體及び小兒の興奮薬として十滴乃至二十滴を、小兒には一乃至四滴を少量の水に加へて飲み、むるか又は浣腸すべし

第五章 正規妊娠及び其取扱法

本章に於ては妊娠の成立より其持續を説き次に母體內に成育する胎兒の状態妊娠中母體に現るゝ變化に及ぼし妊娠せる婦人の診察法並に其取扱法を論述すべし

妊娠の定義

妊娠とは婦人の胎内に胎兒を生育するの時期にして受胎より初まり發育したる胎兒の母體を去るとき即ち分娩に至るまでを云ふ

○受胎トハ如何且ツ其受胎ノ場所ヲ記セヨ

○妊娠ノ原因及ビ其期限ハ如何

第三十七節 妊娠の成立及び持續

受胎とは交接によりて女子の生殖器内に射入されたる男子の精蟲と卵巢より來る卵との會合を云ふ其會合する所は通常輸卵管殊に其外方の部分にして子宮腔腹腔卵巢に於ても受胎するこゝにありとも稀なり而して受胎は何れの場所に於てするも卵は子宮内に來りて發育するものにして月經前に射入されたる精蟲は月經時に卵巢より出づる卵に會合するまで生活し得べく又月經時に排出されたる卵は月經後射入する精蟲と會合

妊娠の持続

するまで生活し得べし故に月経前後を餘り遠からざる交接は最も多く妊娠するものとす
 妊娠は概ね二百八十日即ち四十週間持続するものにして太陽曆によれば各月の日数によりて差異あるが故に九ヶ月、四日乃至七日に相當す之れ最終月經の第一日より計算して分娩に至るまでの日数を平均したるものにして各人多少の差異あるは勿論の事なり而して胎兒は此間に於て充分發育し母體內を出で生活し得るに至るものとす
 便利上妊娠持続日數二百八十日を十妊娠月に分つ即ち一妊娠月は二十八日(四週日)に相當し彼の民間に用ふる太陰曆(舊曆)の一ヶ月を以て妊娠一ヶ月とあし其十ヶ月を以て妊娠の持続となすは誤れるものにして太陰曆の十ヶ月は二百九十五

妊娠月

妊娠月を區別したる理由

日なれば妊娠の平均日數より多き事十五日なり而して上述の如く妊娠月を區別したるは妊娠の徴候を順序よく見渡すに便利なるが故なり

第三十八節 正規妊娠

正規妊娠の定義

正規妊娠とは受胎したる卵が子宮内に於て一定の時日即ち二百八十日間に完全の發育を遂げ其間に於て母兒兩體共に少いの障碍なきものを云ふ

第三十九節 子宮内に宿る胎兒の數

子宮内に宿り同時に發育する處の胎兒の數は通常一個なるも時としては二個或は三個甚だ稀れには其れ以上に達する事あり

雙胎(双胎)は亦た
仔胎とも云ふ
近年福島縣に五兒
を分娩したるもの
あり

月經時に於ける子
宮粘膜の變化

脱落膜

脱落膜各部の區別

○妊娠子宮内粘膜ノ變
狀ヲ記セ

り其一個なるときは單胎たんたい云ひ二個以上を複胎ふくたい云ふ若し複胎にして二個なるときは雙胎さうたい云ひ三個なるときは品胎ひんたい四個なるときは要胎やうたい云ふ五個六個のものは甚だ稀れなり

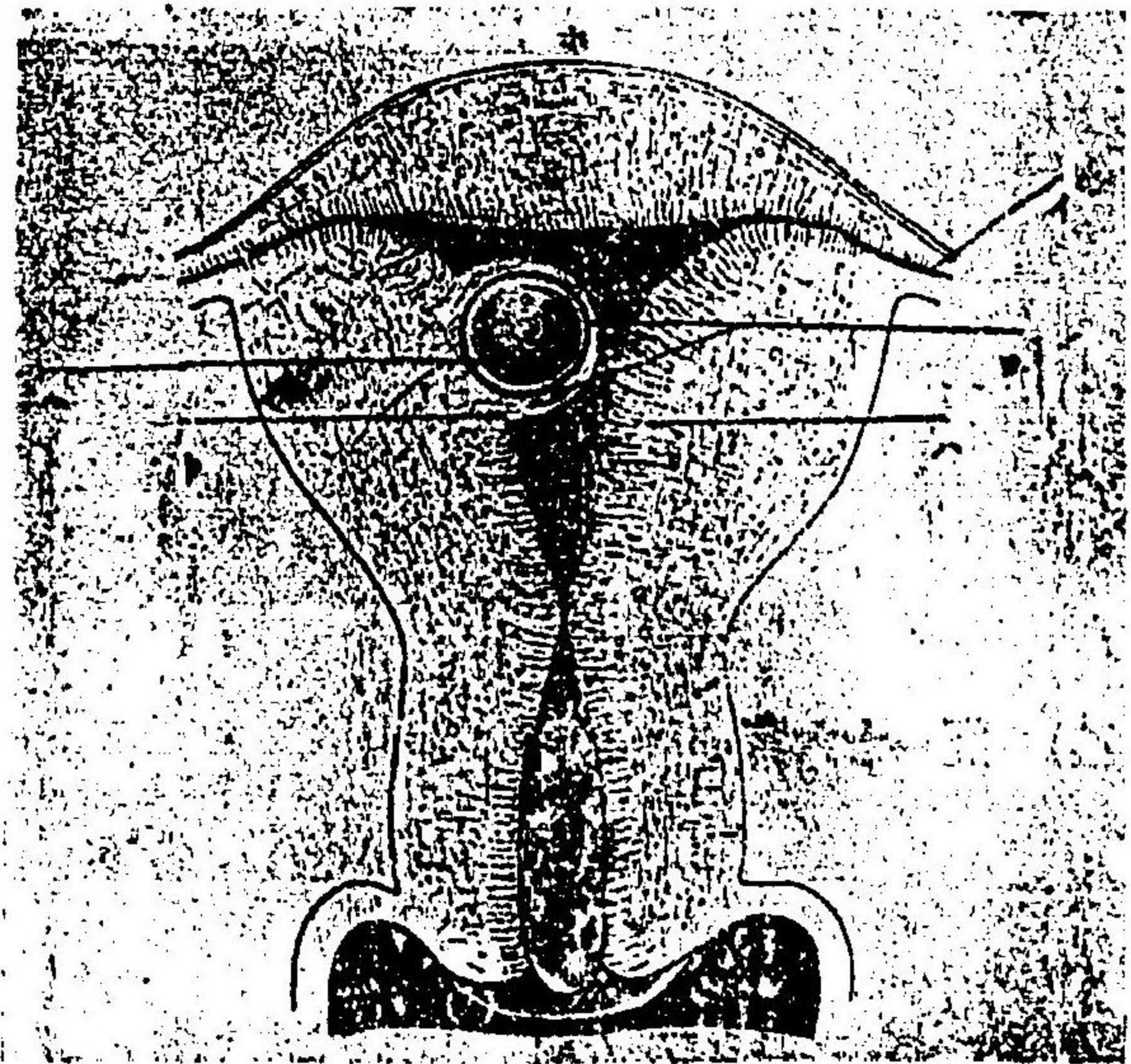
第四十節 妊娠中卵の變化

月經の都度子宮粘膜は肥厚し血液に富み鬆粗しょうことなり出血止めば再び舊の状態に復す此に反して受胎せる卵若し子宮内に來りて鬆粗なる粘膜に固着するや全子宮粘膜は益々肥厚し此れを脱落膜だつらくまくと名づけ篩ふるいに似たるを以て一つに篩膜ふるいまくの名あり而て卵の附着せる部の粘膜は最も盛んに肥厚し之を床狀脱落膜しょうじやうだつらくまくと云ひ其の周圍の粘膜は又た卵の周圍に向つて發育し遂に全く卵を被包するに至り爲めに脱落膜は一部翻轉ほんてんせるが如く見ゆ

卵膜

妊娠中卵の變化

第十六圖



受胎したる卵の子宮粘膜に固着したるを縦断せるを示す

て三層の卵膜。羊水及び胎兒を區別し得るに至るべし即ち外

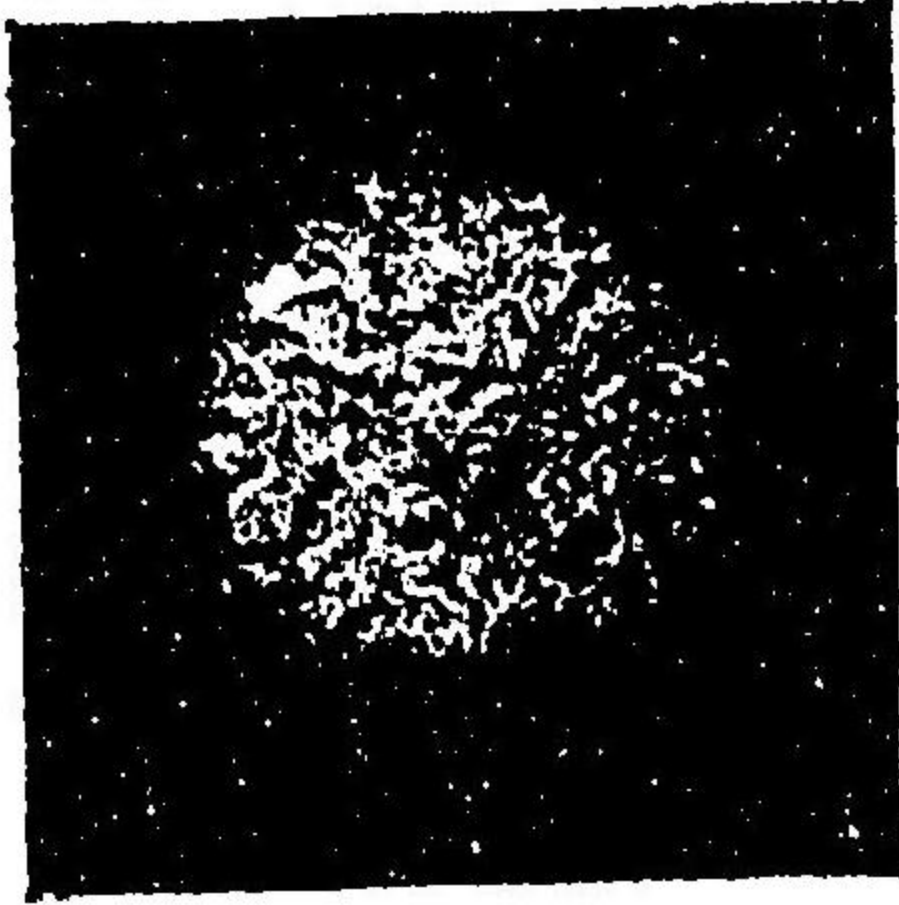
此れを翻轉脱落膜ほんてんだつらくまくと名づく而して子宮の全内面を覆ひ卵の表面を覆はざる部を眞脱落膜しんだつらくまくと稱す卵の發育進めば翻轉脱落膜は終に眞脱落膜と相癒着するに至り卵は此時に當り

絨毛膜は一名脈絡膜とも稱す

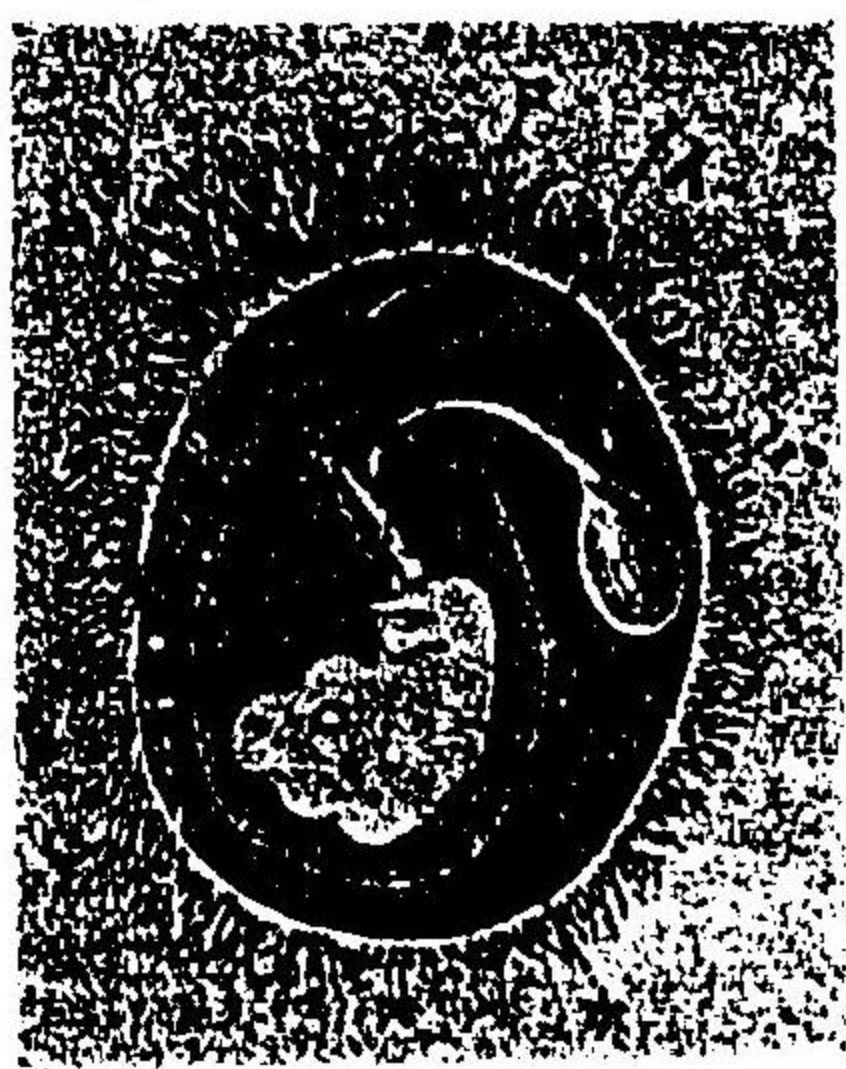
層は脱落膜にして中層は絨毛膜と稱し無數の微細なる絨毛を

妊娠したる卵の外表を示す

(甲) 圖一十六第



(乙) 圖一十六第



受胎後六週間を経たる卵を切開して其内容を示す(自然大)

イ絨毛膜
ロ臍帯なるべき部
ハ尿管
ニ羊膜
ホ羊水

胎盤
臍帯
卵内に胎兒及び胎盤を完成する時は成熟卵といふ

生じ恰も栗の毬の如く其一部は床狀脱落膜中に進入し之れより卵の營養を受くるものなり内層は羊膜と云ひ羊水を以て満され胎兒は羊水中に浮遊すべし
妊娠二ヶ月より絨毛膜の絨毛は漸次消失して滑澤となり唯床狀脱落膜に向へる部分のみは反つて盛んに發育して其中に進入し其部の脱落膜も又盛んに増殖し二者合して妊娠四ヶ月に至れば胎盤あるものを完成す此時に於ては胎兒の腹部より胎盤に連る所の臍帯と稱する一條の紐ありて分娩の時に至るまで存在し三ヶの血管を有す内二ヶは胎兒の心臓より血液を絨毛膜絨毛に導き子宮壁に送り尙他の一ヶの血管は營養物に富める血液を胎兒に送る爾後胎兒は全妊娠中斯の如き方法によりて營養せられ發育するものとす故に卵は此時より後分娩に

至るまで卵膜、胎盤、臍帶、羊水、及び胎兒、の五部よりあり月を追ふて發育増大するものあり

第四十一節 卵膜

卵膜は薄き一枚の膜の如きも注意して剝離する時は三層となすを得べし

○卵珠ノ諸膜ヲ記セヨ

卵膜は卵の外被にして口を有せざる三層の囊を成し外層は二枚の(眞及翻轉脱落膜)脱落膜にして妊娠五六ヶ月に至れば全く癒着し區別すべからざるに至り分娩の際一部は絨毛膜に附着して排出せらる中層は絨毛膜又は脈絡膜とも云ひ妊娠の初期にありては無数の絨毛を有するも成熟して分娩せるものにはありては滑澤にして表面所々に脱絡膜の小片を附着するのみ内層は羊膜にして又水膜とも云ひ極めて薄く且つ滑澤透明の

臍帶鞘

假羊水

破水とは俗に物産の時の水下りなり

胎盤の成立

○胎盤ニ就テ記セヨ

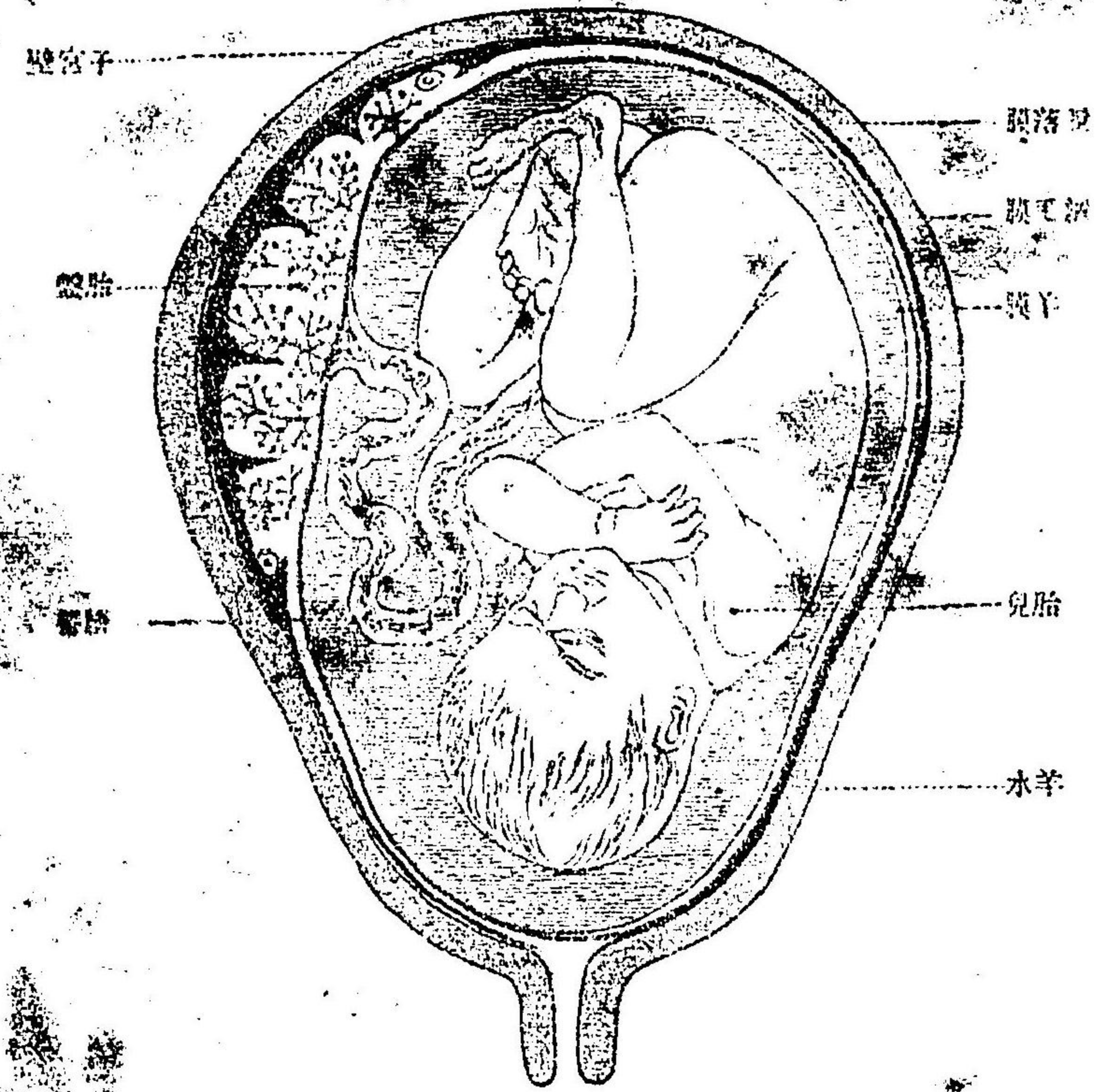
○胎盤ノ構造ハ如何

膜にして絨毛膜の内面より胎盤の胎兒面を覆ひ臍帶の附着部にありては臍帶に移行し臍帶鞘とある而して以上中内二層間には時として膠様物質又た時としては水様液を貯ふる事ありて絨毛膜と脱落膜との間にも亦た水様液を貯ふる事あり是れを假羊水と云ひ間々妊娠中或は分娩の極初期に於て漏出し破水と誤らるゝ事あり

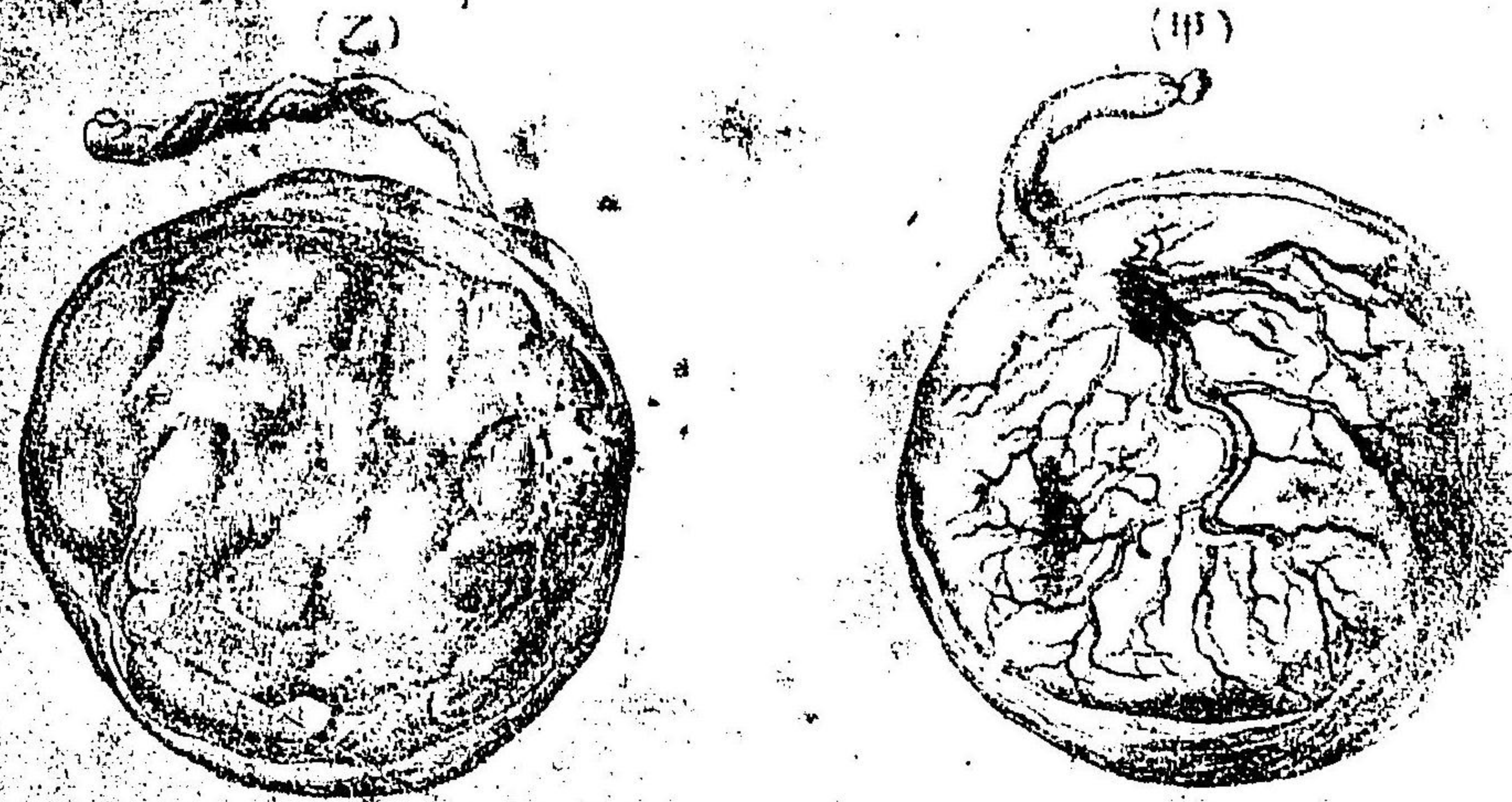
第四十二節 胎盤

胎盤は扁平にして圓形若しくは卵圓形を成し暗赤色を呈し其質鬆粗にして海綿の如く床狀脱落膜及び之れに附着せる絨毛膜の絨毛との増殖によりて生ずるものにして妊娠の末期(成

圖二十六第
す示をのるたし斷縦を宮子るす有を體妊の後成完盤胎



圖三十六第



胎盤

○胎盤ハ妊娠ノ幾月ニ
發生スルヤ其發生點
及ビ全形ヲナスハ幾
月ナルヤ

胎盤の子宮面は一
見「ついで」の如く
胎兒面は一見逆の
葉の如し

胎盤の效用
○胎盤ハ如何ナル働き
ヲナスヤ
○胎兒ニ及ボス胎盤ノ
作用ハ如何
○胎盤ハ母體ト胎兒ニ
如何ナル關係アルヤ
○胎盤ニ臍帶ノ作用
ハ如何ナルヤ
○胎盤及ビ臍帶ノ構造
ヲ記セ

熟卵) にありては直徑十五乃至二十仙迷(凡そ五六寸)重さ平
均五百瓦(凡そ百二十匁)厚さは中央に於て二乃至三仙迷(凡
そ七八分乃至一寸)あれども邊緣に至るに従つて漸次非薄こ
ある而して胎盤の外面即ち子宮壁に附着する面は粗糙にして
多くの深き溝を有し大小不同の小部分に分たる是れを胎盤葉
ニ云ふ之に反して内面即ち胎兒に向ふ面は滑澤ある羊膜を被
り臍帶の附着部より周縁に向ひ多くの血管分岐し羊膜上より
透見し得べし
胎盤は胎兒の發育營養に最も緊要なる器官にして妊娠の初め
にありては絨毛膜の絨毛は子宮粘膜炎中に深く進入して母體よ
り營養物を取り之れを卵内に輸送すこ雖も胎盤の完成せらる
るかや胎兒は之に由つてのみ母體より其營養物を取り老廢物を

圖 二 十 六 第

す示をのもるたし斷縦を宮子るす有を體妊の後成完盤胎

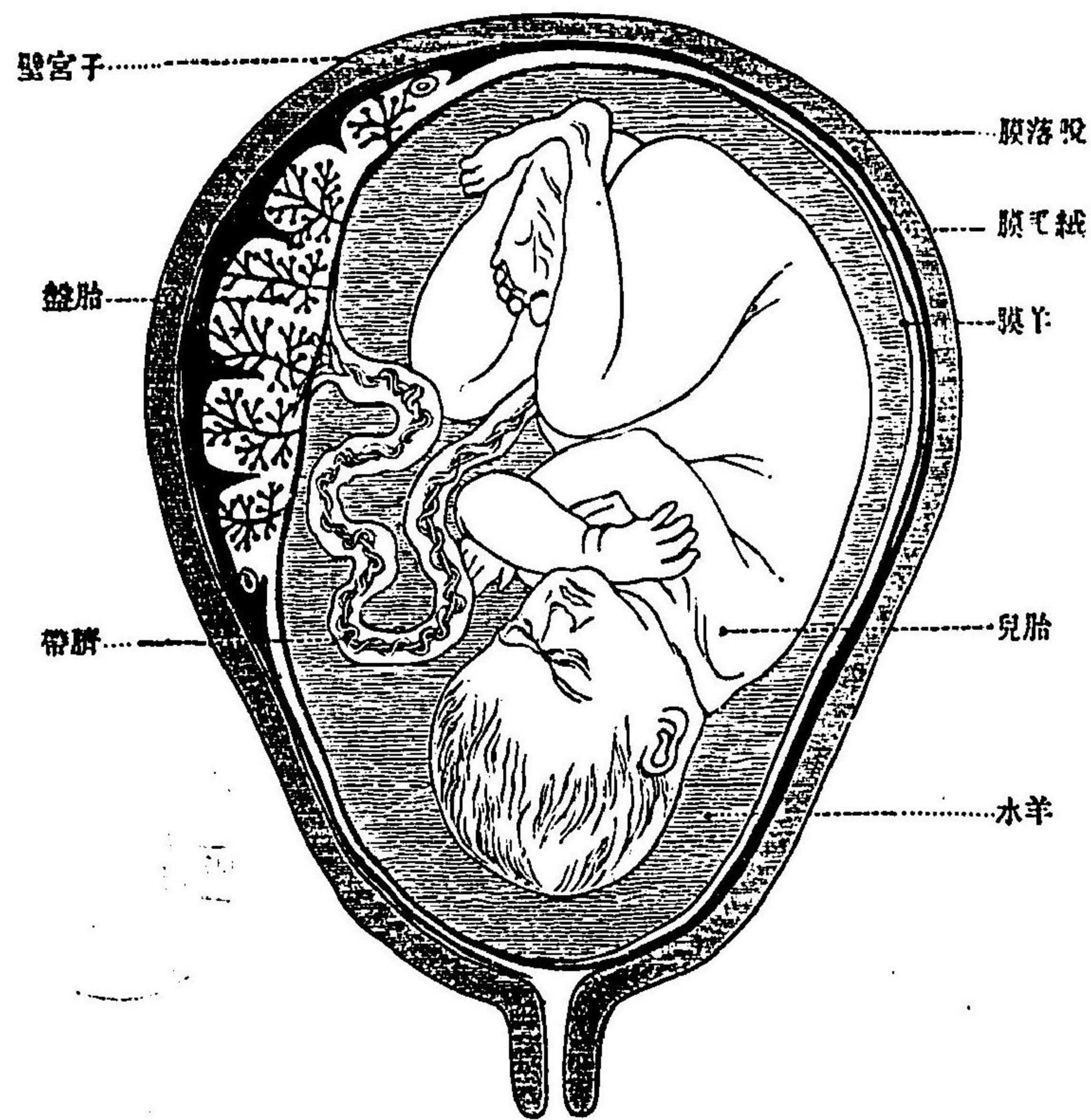
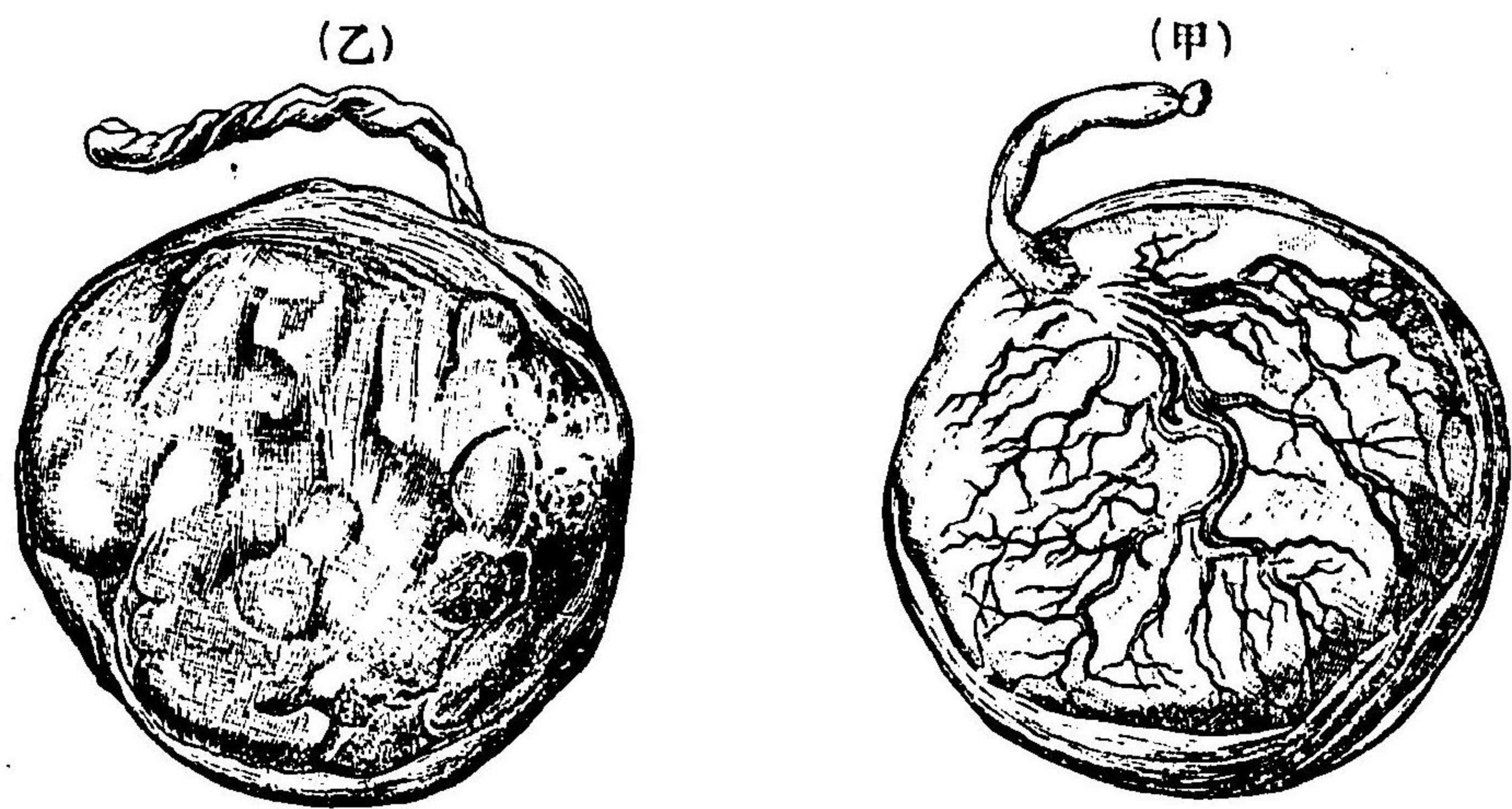


圖 三 十 六 第



胎盤及臍帶を示す

胎盤

一九二

○胎盤(胎盤ノ後月
及ビ全形ヲナスハ後
月ナリヤ

胎盤の子宮面は一
見の如く見進の
葉の如し

胎盤の效用

- 胎盤ハ如何ナル
ナリヤ
- 胎盤ニ及ボス胎盤ノ
作用ハ如何ナルヤ
- 胎盤ハ如何ナル
ハ如何ナルニ
胎盤ノ作用
- 胎盤及ビ
胎盤ノ構造

熱卵)にありては直徑十五乃至二十仙迷(凡て五六寸)重さ平
均五百瓦(凡そ百二十夕)厚さは中央に於て二乃至三仙迷(凡
そ七八分乃至一寸)かれども邊緣に至るに従つて漸次非薄と
なる而して胎盤の外面即ち子宮壁に附着する面は粗糲にして
多くの深き溝を有し大小不同の小部分に分たる是れを胎盤葉
と云ふ之に反して内面即ち胎兒に向ふ面は滑澤なる羊膜を被
り臍帶の附着部より周縁に向ひ多くの血管分岐し羊膜上より
透見し得べし

胎盤は胎兒の發育營養に最も緊要なる器官にして妊娠の初め
にありては絨毛膜の絨毛は子宮粘膜炎中に深く進入して母體よ
り營養物を取り之れを卵内に輸送すこ雖も胎盤の完成せらる
るか胎兒は之に由つてのみ母體より其營養物を取り老廢物を

胎兒の胎盤に於けるは大人の呼吸器及び營養器に於けるが如し

胎盤の附着點胎盤若し子宮口に近く附着する時は前置胎盤といふ

母體に向つて排泄す即ち一旦胎兒の身體を循環せる暗赤色の靜脈血は二條の臍動脈によりて胎盤に至り該動脈は更に毛細管に分れて母の血管中に進入す茲に於て母體血液は胎兒に屬する血管を包み其血管壁を透して酸素を胎兒の血中に給與し傍ら胎兒血中の老敗物即ち炭酸を母の血液中に攝取す之れによりて胎兒の靜脈血は變じて鮮紅色の動脈血となり毛細管は漸次之れを集合して遂に一の臍靜脈によりて胎兒に送るものなり故に胎盤は胎兒にありては恰も大人の呼吸器及び消化器と同一の作用をなすものにして胎兒の發育生活上甚だ緊要なるものなり

胎盤は多くは子宮の前後壁に附着す雖も時として子宮底若しくは内子宮口に近く附着する事あり

第四十三節 臍帶

○臍帶ノ形狀長サハ如何
○臍帶トハ如何
○胎兒臍帶ノ構造及ビ效用

臍帶の長さ

圖四十六第



り長きは三四尺に至るべし。雖通常胎兒の身長より少しく長

臍帶は胎兒の臍部より胎盤の胎兒面に達する小指大の紐にして、全部捻振して恰も絢へる繩の如く其捻振は甚だ種々にして或は弱く或は強く多くは左方に捻轉す(胎兒の方より見て)又

た長さも甚だ種々にして短きは二三寸よ

臍帶の眞結節を示す

臍帶の附着部

(甲) 圖五十六第



臍帶中の動靜脈及假結節を示す

(乙) 圖五十六第



るこきは之を臍帶の卵膜附着と云ふ

し即ち一尺六寸(即ち五十仙迷)位なり又臍帶の胎盤に於ける附着部は通常其中央あるも時こしては側方若しくは其邊緣に附着する事あり又た時こしては卵膜に終る事あり然

管 臍帶を通過する血
 ○胎兒臍靜脈へ臍ロー
 起り何レニ連接スル
 又大人ニ在テハ何
 稱スルモノニ變ズル
 (一端は胎盤の毛細血
 管に連なり他端は胎
 兒の腹内に入り一部
 は分れて肝の門脈に
 一部はアランチ氏
 臍靜脈を経て下大靜
 脈に連なり分枝後
 四肢帯となる)

○臍帶動脈及び靜脈

臍動靜脈の作用

臍帶は二條の臍動脈、一條の臍靜脈を有し此の三個の血管はワルトン氏酸肉と稱する膠樣物質を以て包まれ其物質の多少によりて臍帶の肥瘦を來すべし而して全臍帶の外表は臍帶鞘と名づくる柔軟滑澤の被膜を被る此の物は羊膜の一系列にして臍部にありては胎兒の皮膚に連り胎盤部にありては羊膜に移行す臍帶は時として結ばれて結節をなす事あり然るときは之を眞結節と云ひ一局所に於て血管の迂曲するか或は膠樣物質の堆積するに由て結節状をなす事あり之を假結節と云、臍帶動脈管は胎兒下腹の動脈管より起り臍を経て胎盤に達し即ち一旦胎兒の身體を循りたる暗赤色の靜脈血を胎盤に送り老敗物質即ち炭酸其他の不用物を母體血管に向ふて排出するの用をなすものにして此れが爲に胎兒の子宮内に生存する間は

臍帶の搏動の數は胎兒の心音に同じ

臍動脈は搏動するも靜脈は搏動せず

○後産トハ如何

娩隨

常に搏動を現すものなり又臍帶靜脈管は胎盤の毛細管漸次集合して一管とされるものにして臍帶を通過して胎兒腹内の大靜脈に達し胎盤に於て新鮮とありたる動脈血を胎兒に輸送するの用をなすものにして搏動することなし故に若し眞結節若しくは臍帶の壓迫等によりて血液の循環障害を來すときは胎兒は忽ち死亡するものにして恰も吾人の口及び鼻を閉ざして呼吸を止めたるが如し
 以上の卵膜胎盤臍帶は共に胎兒分娩後に於て排出さるゝを以て之を總稱して後産又は娩隨と云ふ

第四十四節 羊 水

羊水一名胎水は羊膜内に充滿する液體にして妊娠の初めは水

一リートルは千
ラムなり

○羊水ノ效用其分量
同フ

○羊水ノ性状及ビ效用
ハ如何

○羊水ノ効用五あり

○羊水ハ妊娠中及ビ分
娩ニ際シ如何ナル效
アルヤ

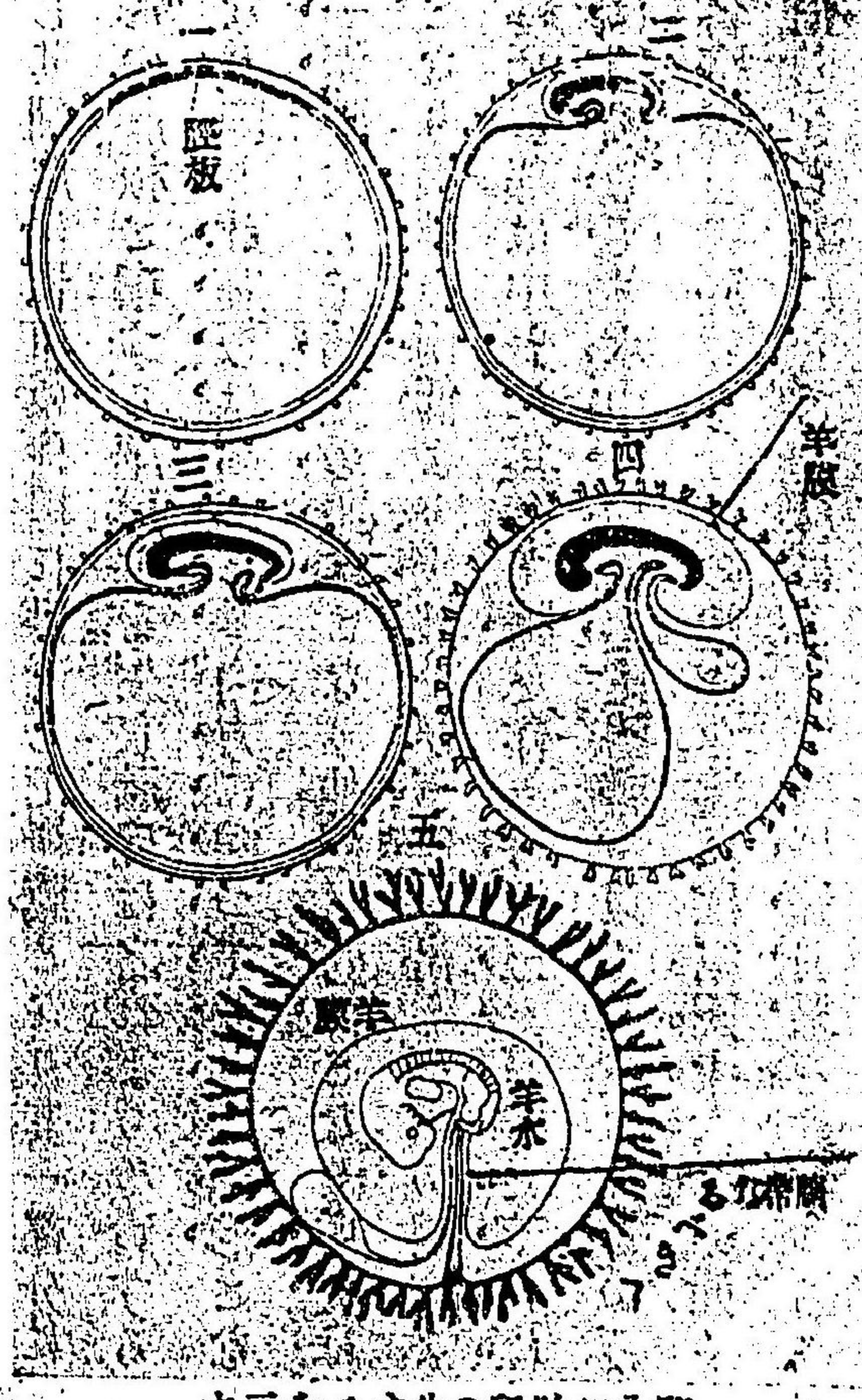
の如く透明なるも妊娠後半期即ち五ヶ月後に至れば僅かに濁
濁し胎児の皮垢及び毳毛の剥落せるものを含有し其全量は平
均一リートル(凡五合)位なるも時こして非常に増多すること
あり(然るとききは之を羊水過多症と云ふ)羊水は分娩時に於て
は時こして胎児糞便の混合によりて暗緑色に變ずることあり
然るとききは胎児危険の徴候なり

羊水は(一)妊娠中外部より胎児に向つての衝突を防ぎ且つ胎
児胎盤臍帶等に受くる壓迫を防ぎ(二)胎児の運動を容易なら
しめ其際母體に感ずる疼痛なからしめ(三)胎児各部分の癒着
を防ぎ(四)分娩時卵膜を緊張せしめ子宮口を漸次に開大せし
め(五)其漏出により産道を滑澤ならしめ及び自然的に産道を
洗滌し清潔ならしむるの效あり

第四十五節 胎 兒

受胎したる卵の子宮粘膜に包まるゝや卵内直に多くの細胞を

第 六 十 六 圖



内卵に胎兒の生るを指示す

胎兒は卵内に生じたる胚板より生ず

胎兒は妊娠三ヶ月より遊離して羊水中に浮遊す

生じ其細胞は皆卵の外圍に附着して卵膜となり其一部分に橢圓形の胚板と稱する肥厚部を生じ胎兒は之れより生育するものなり即ち此胚板は周圍より内方に向つて曲り圓筒形となり其一端膨大して胎兒の頭部となり他端は臀部となり中央は軀幹となり軀幹の兩側より上肢及び下肢を出し胚板の周圍より翻轉せる部は中央に集りて臍を作り妊娠三ヶ月後に至れば胎兒は遊離して羊水中に浮遊し唯臍帶を以て胎盤に連るのみ今其各妊娠月に於ける發育の状態を述べ第四十六節の如く順序正しきものにして之れによりて其妊娠月數を鑑定することを得べし

妊娠の経過

第四十六節 妊娠各月に於ける胎兒

○妊娠各月ニ於ケル卵子ノ變化如何

妊娠一ヶ月の卵

の發育狀態 (妊娠中胎兒各月の徵候)

妊娠一ヶ月、即ち四週の終りに至れば卵は殆ど鳩卵大となり胎芽(此時期にてはまだ胎兒と云はず)の長さは凡そ一仙迷にして大に彎曲し四肢未だ生ぜず人間たるの構造を認むる事能はず

○妊娠二ヶ月及ビ五ヶ月ノ胎兒身長ハ如何

妊娠二ヶ月の胎兒

妊娠二ヶ月、即ち八週の終りに至れば卵は小鶏卵大にして胎芽の長さ凡そ四仙迷十五(凡そ二匁五分)の重さを有し四肢を生じ以前の如く羊膜に密着せずして臍帶延長す而して明かに他の動物の胎兒と區別するを得此時期より後は最早胎芽と云はずして胎兒と云ふ

妊娠各月に於ける胎兒の發育狀態

○妊娠三ヶ月の胎児
○妊娠第十二週ニ於ケル胎児ノ形状
○妊娠第三ヶ月ニ於ケル胎児ノ發育ハ如何

第六十九圖



六週半の胎児

第六十八圖



卅四日の胎児

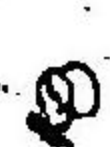


三十日の胎児

第六十七圖



廿一日の胎芽



十二日の胎芽

(各自然大)

故に男女の區別を爲す事難し

妊娠四ヶ月の胎児

妊娠四ヶ月、即ち十六週の終りに至れば胎児の長さ凡そ十

妊娠三ヶ月、即ち十二週の

終りに至れば卵は驚卵大にし

て胎児の長さ凡そ九仙迷に達

し二十五瓦乃至五十五瓦(凡そ

十匁)の重さを有し眼、耳、

鼻、口、を具へ四肢は著しく

發育し指趾を區別し得べし然

れ共尙ほ陰核は陰莖と同長に

して男児にありては陰囊は未

だ女兒の陰裂の如く開けるが

○十六週及び二十八週ニ於ケル胎児ノ發育ハ如何

第七十一圖



三ヶ月の胎児

第七十圖



二ヶ月の胎児

(各自然大)

りては陰囊既に閉鎖せるを以て男女の區別判然し胎盤は完成す

妊娠五ヶ月の胎児

妊娠五ヶ月、即ち二十週の終りに至れば胎児の長さ凡そ二

妊娠各月に於ける胎児の發育状態

四ヶ月の胎児

(自然大)



第二十七圖

十五仙迷にして二百瓦乃至三百瓦(凡そ五十匁乃至七十五匁)の重さを有し、毳毛の發生を初め皮膚は白色粘稠の胎脂を分泌し、羊水は著しく増加し胎児は既に運動を初め妊婦は之れを自覺するに至る。此時に於て胎児の心音を妊婦の腹壁上より聴取し得べし而して妊娠五ヶ月の末を妊娠の中期と稱し之より以前を妊娠の前半期以後を後半期と稱す。

妊娠六ヶ月の胎児

妊娠六ヶ月、即ち二十四週の終りに至れば胎児の長さ凡そ三十仙迷にして五百瓦乃至七百瓦(凡百二十五匁乃至百七十五匁)の重さを有し、毳毛繁茂し皮下脂肪の發生を始じむるも皮膚は尚ほ皺襞を有し此期に於て分娩したる胎児は四肢を動かさず僅かに吸氣をなす。雖間もなく死に至る。

妊娠七ヶ月の胎児

妊娠七ヶ月、即ち二十八週の終りに至れば胎児の長さ凡そ

十五仙迷にして千五乃至千二百五(凡二百六十乃至三百二十)
 十)の重さを有し皮膚は赤色にして毳毛及び胎脂に富み皮下脂肪の發生不充分にして皮膚に尙ほ皺襞あるも以前よりは圓みを帯び胎児にありては陰囊尙ほ空虚なり眼瞼は全く分離す此期に於て産出したる胎児は能く四肢を動し幽微の聲を發して泣くも雖も尙ほ充分なる保護を與へざれば數時間或は數日にて死す而て妊娠七ヶ月以前に産出したる胎児を流産兒と云ひ此時以後妊娠三十八週即ち九ヶ月半に至る間に於て産出したる胎児を早産兒と云ふ

妊娠八ヶ月、即ち三十二週の終りに至れば胎児の長さ凡四十仙迷にして千五百五(凡三百九十)の重さを有し皮膚尙ほ皺襞を有す此の期に於て産出したる胎児は適當の看護により

妊娠八ヶ月の胎児
 ○妊娠八ヶ月ノ徴候及
 ビ成熟兒トノ區別

妊娠九ヶ月の胎児

て成長し得べし。雖も尙ほ身體虛弱にして死亡するもの多し
 妊娠九ヶ月、即ち三十六週の終りに至れば胎児の長さ凡四十仙迷にして二千五(凡五百二十)の重さを有し皮膚の毳毛は以前より少なく此に反して頭髮は長くして着色し皮下脂肪組織の發生著しきを以て身體肥へ皺襞消失して顔貌愛すべく男児にありては兩側の睪丸は陰囊中に下降し此期に於て産出したる胎児は通常成長し得るものとす

妊娠十ヶ月の胎児

妊娠十ヶ月、即ち四十週の終りに至れば妊娠は其終りに達し胎児は全く成熟し身長は凡そ五十仙迷(凡そ一尺六寸)にして二千八百五乃至三千五(凡そ七百四十乃至七百九十)の重さを有し全身肥満し所謂成熟兒の徴候を具ふるに至る而して産婆は分娩されたる小児の成熟せるや否やを區別すること

必要なるを以て第四十七節に之れを詳述すべし
 以上述ぶる處の胎児の身長は其大略を示したるものにして各
 人多少の差異あり而して之を記憶するには左の第一表を
 するときは極めて容易の事ならん即ち妊娠一ヶ月より五ヶ月
 までは其月數を自乘し六ヶ月後は其月數に五を乘じたる仙迷

○妊娠各月ニ於ケル胎

ハ―ゼ氏の妊娠各
月胎児身長計算法

月數	身長	仙迷
1	1	1
2	4	4
3	9	9
4	16	16
5	25	25
6	30	30
7	35	35
8	40	40
9	45	45
10	50	50

妊娠月數	體重
1- 1×1	1
2- 2×2	4
3- 3×3	9
4- 4×4	16
5- 5×5	25
6- 6×6	36
7- 7×7	49
8- 8×8	64
9- 9×9	81
10- 10×10	100

に等しとす此れをハ―ゼ氏計算法と云ふ又た體重の大略を記
 憶するには第二表によるを良とす

第四十七節 成熟胎児の徴候

○成熟未成熟ノ徴ハ如
 ○成熟胎児ノ状況ヲ示
 成熟胎児は身長平均四十八仙迷(凡一尺六寸)にして平均二千
 八百五十五(凡七百五十匁)の重さを有し全身豐滿して皮膚は
 淡紅色を呈し胎脂を附着し毳毛は主もに脱落するも唯だ多少
 肩胛部及び項部に遺残す頭髮は黒く密生し五六分の長さに延
 び眉毛、睫毛、を存し爪は可なり硬く指尖を越へ男児に在て
 は陰囊は他の皮膚に比すれば少しく赤く横皺ありて睪丸下
 降し女児に在ては大陰唇は大にして小陰唇及び陰核を被ふ胎
 兒健康なれば四肢を活潑に運動し殊に伸展運動をなし眼を開

き暗綠色の胎糞を多量に漏し尿を排出し音聲明瞭にして強く胸廓は呼吸に際して一様に擴張し乳頭を含ませむれば哺乳運動をなす耳及び鼻の軟骨は可なり硬く顔面は圓形に豐滿し頭蓋との比較は大人に於けるが如く平均し肩の廣さは凡十一仙迷腰の廣さは凡九仙迷にして臍帶は腹部の中央に附着し大さ小指大なり頭蓋骨は硬くして互に密接し顛頂骨上縁の前後に於て顛門と稱する骨の未だ癒合せざる部分あり

以上は成熟兒の大略を示したるものなれば各人多少の差異あり殊に身長は四十六乃至六十仙迷に達するものあり體重も亦た二千五位より五千五以上に達するものあり故に産婆は身長體重等のみによらずして同時に總ての成熟徴候を探らざるべからず既に一般成熟兒の徴候を具ふるときは例令一二の徴候

に缺くる處あるも成熟せるものご知り得べし

第四十八節 成熟胎兒の頭蓋

頭部は胎兒の身體中最も大にして最も硬く従つて子宮内に於ける胎兒を診察するにあたりて最も手に觸れ易き部分なるが故に其性質を熟知して診察せば妊娠分娩中に於ける胎兒の狀態を精しく知り得べく従つて又た分娩の難易をも豫知し得べし加之身體中最大最硬なるが故に分娩機轉に大關係を有する事勿論にして兒の身體中最も研究すべき部分なり

胎兒頭蓋の外表は七ヶの骨即ち左右二ヶの前頭骨左右二ヶの顛頂骨左右二ヶの顛顛骨及び一ヶの後頭骨よりなり其各骨の邊縁は大人に於けるが如く犬牙狀に癒合せずして僅かの膜狀

大人の前頭骨は一個なるも胎兒の前頭骨は二個なり
○胎兒ノ頭骨結合及ビ顛門ノ名稱ハ如何

○初生児ノ頭蓋ハ何レノ骨ヨリ構成セラレルヤ及ビ其形狀連合ハ如何
○骨の形状は大人に同

大人に前頭縫合なし

○成熟児頭縫合ノ種類
並ニ顛門ノ部位ヲ記セヨ
○初生児頭蓋ノ形状及ビ構造
○成熟児頭ノ形状及ビ直径

をなせる靱帯によりて相縫合し其縫合の會合する處には唯皮膜を以て被はるゝ顛門と稱する骨の未だ合せざる部分あり今其縫合及び顛門を列記すれば左の如し

(一)前頭縫合、は左右前頭骨の間にあり鼻根より大顛門に至る

(二)冠狀縫合、は前頭骨の上縁と顛頂骨の前縁の間にして左右の顛顛部より起り大顛門に終る

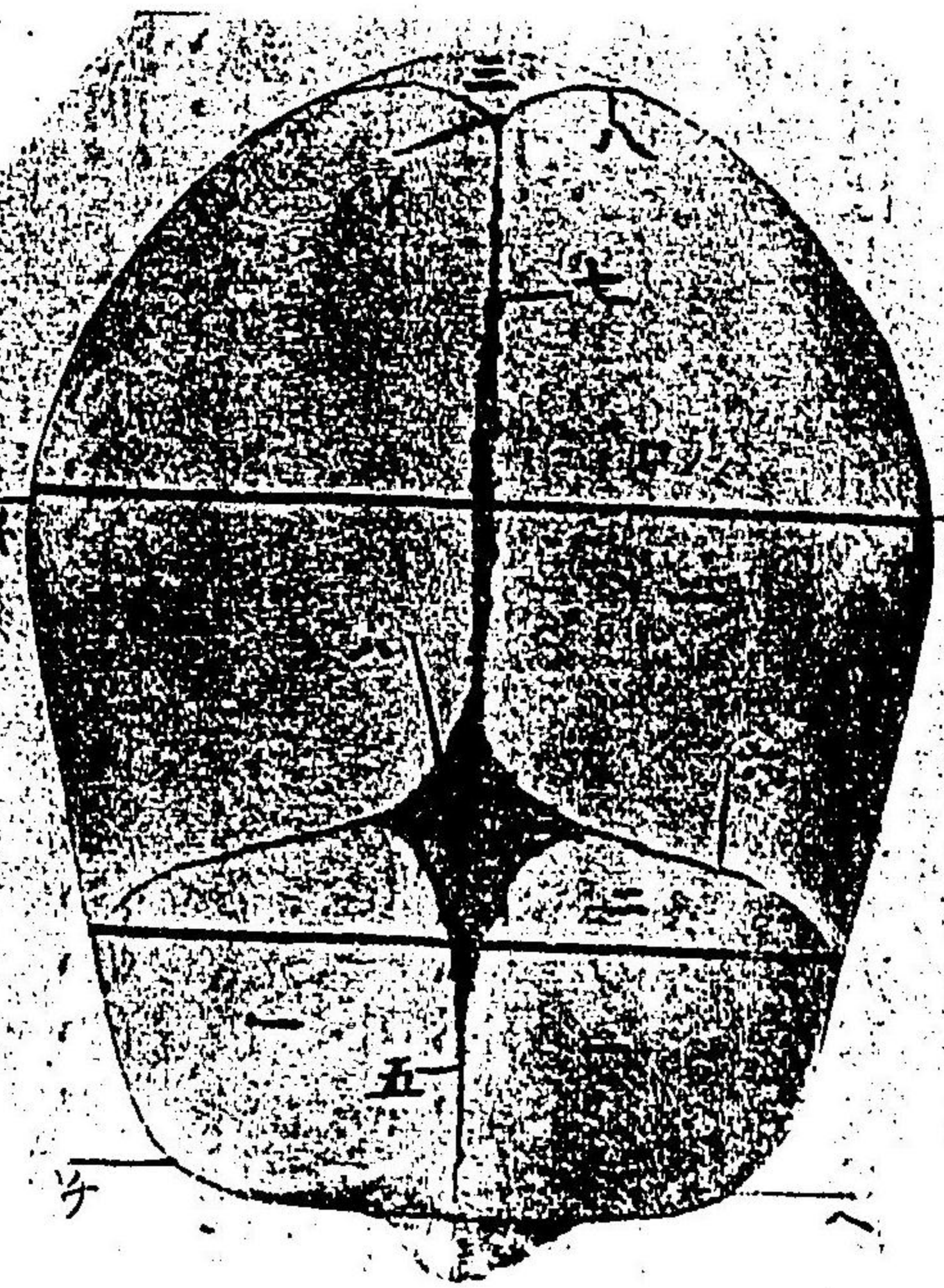
(三)矢狀縫合、は左右顛頂骨の上縁間にあり大顛門より起りて小顛門に終る三角縫合大顛門と共に矢の形状をなすを以て此の名あり

(四)三角縫合一名後頭縫合、は顛頂骨の後縁と後頭骨上縁の間にありて左右の耳の後より起り小顛門に至る

(五)鱗狀縫合、は左右顛頂骨の下縁と左右顛顛骨上縁の間にあり

成熟胎児の頭蓋を表面より見たるもの

第三十七圖



イ小顛門
ロ大横徑
ハ大顛門
ニ小横徑
ホ顛頂結節
ヘ前頭結節
ト顛頂結節
チ前頭結節
数字は第七十四圖を参照せ

(六)大顛門、は冠狀縫合と矢狀縫合と前頭縫合の會合せる所

○大小顛門ノ位置並ニ區別
○大顛門及ビ小顛門ノ位置形狀並ニ構成スル骨ノ名稱ヲ舉ゲヨ

○大小顳門ノ異ナル點ヲ擧ゲヨ

成熟兒に在ては側顳門は既に閉鎖す

にして四ヶの骨縁よりなり菱形をなし前方の一隅は最も鋭くして前頭縫合に移行す

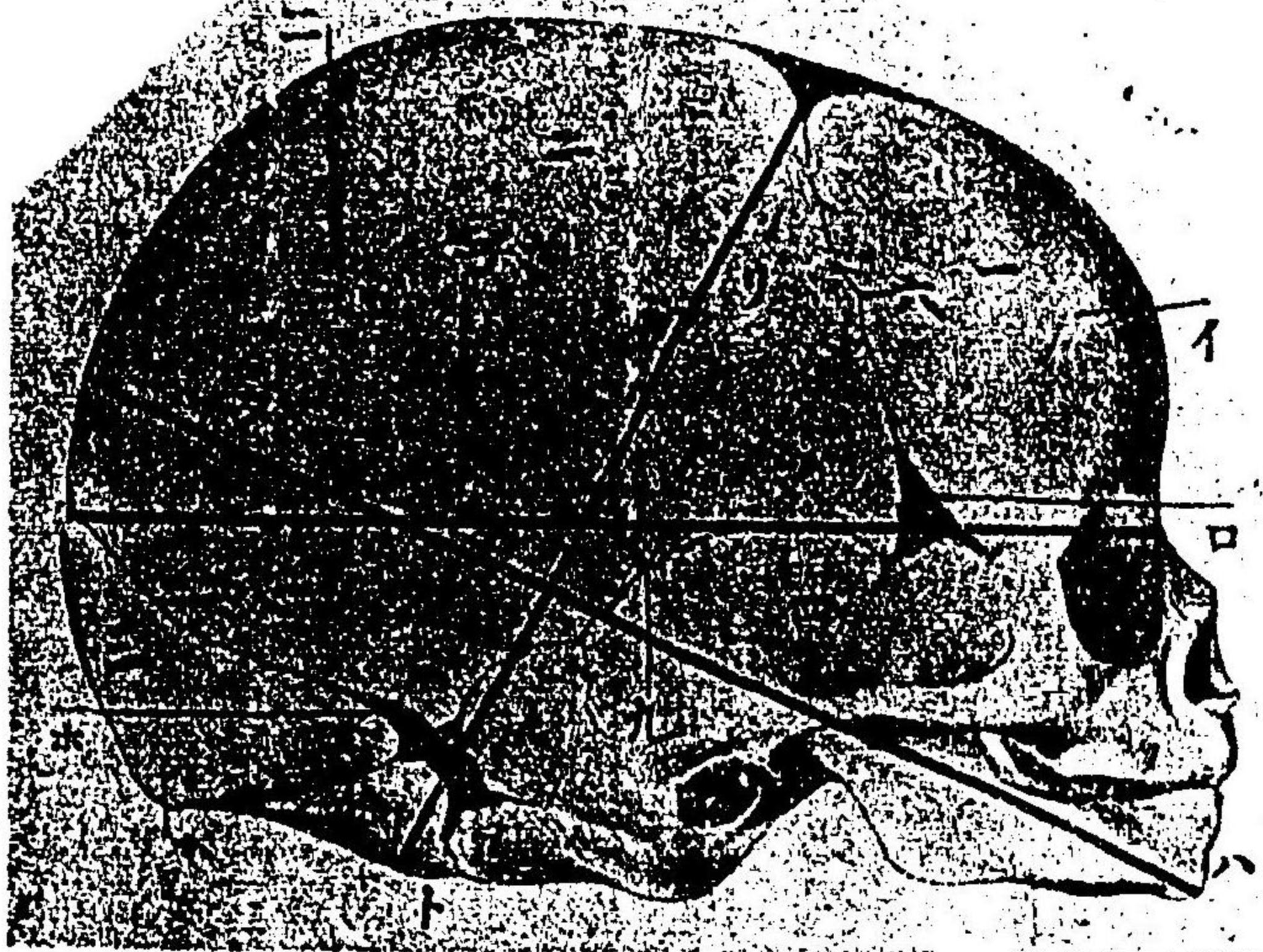
(七)小顳門、は矢状縫合、三角縫合の會合する所にして三ヶの骨縁より成り、三角形の空隙なるも成熟兒にありては殆ど相觸接し皮膚上より按ずるときは一小窩として觸るゝのみ

(八)側顳門、左右各二あり冠状縫合の兩端にあるものを前側顳門及び三角縫合の兩端にあるものを後側顳門と云ひ餘り必要ならず

胎兒の頭蓋は上述の如く身體中最も大なりと雖其縫合弛く且つ顳門を有するが故に分娩に際し母の骨盤内を通過するに當りては各骨の邊緣多少相重なり其周圍の大きさを減じ以て其通過を容易ならしむるものこす

○見度ノ徑度及ビ測點ヲ示セ

第七十四圖



成熟胎兒の頭蓋を側面より見たるもの

- 一 前頭骨
 - 二 顳頂骨
 - 三 後頭骨
 - 四 額骨
 - 五 前頭縫合
 - 六 冠状縫合
 - 七 矢状縫合
 - 八 三角縫合
 - 九 變樣縫合
- (七十二圖参照)
- イ 前頭縫合
 - ロ 前顳門
 - ハ 顳頂縫合
 - ニ 顳頂骨
 - ホ 後顳門
 - ヘ 後頭縫合
 - ト 頂高
 - チ 頂徑
 - リ 小斜徑
 - ヌ 大斜徑

成熟胎兒頭部の大小及び形狀は母體骨盤の大小形狀に等しく分娩機轉に大關係を有するものにして産婆は最も好く之れを熟知せざるべからず而して通常左の諸徑

頭蓋の徑線を測るには骨盤計及びトル尺を用ゆ

○初生児ノ頭蓋徑線ヲ記セ

○兒頭ノ大小斜徑變何ナリヤ及ビ其部位如何

線を設け其大小形状を知るに便ならしむ

(一)頭蓋の周圍、は眉間より左右の顛頂骨を繞りて後頭骨最高部に至るものにして平均三十二仙迷

(二)前後徑即ち直徑、は眉間より眞直に後頭骨の最高部分に至るまでの距離にして平均十二仙迷

(三)大横徑、は左右顛頂結節間の距離にして平均九仙迷

(四)小横徑、は左右顛頂部間の距離にして平均八仙迷

(五)大斜徑、は顛部より後頭骨の最高部に至る距離にして平均十三仙迷

(六)小斜徑、は大顛門の中央より項窩に至る距離にして平均九仙迷

第四十九節 未熟胎児の徴候

○早熟兒及ビ成熟胎兒ノ状態ハ如何

未熟胎児は身體一般に薄弱にして皮膚は甚だ紅く少しく青色を帯び皺襞多くして顔貌恰も老人の如く全身毳毛を有し頭髮少なく眉毛睫毛亦少なく爪は柔軟透明にして短く指頭を越へず男児に在りては陰囊は甚だ赤く皺襞少なく殆ど滑澤にして睪丸を含有せざるか或は之を含有するも鼠蹊管に近くして陰囊中に觸るゝ能はず女兒にありては小陰唇及び陰核は大陰唇間に突出し軀幹及び四肢は羸瘦し生活するも運動不活潑にして兒は常に四肢を腹部に引き附く、音聲弱く哺乳はなし能はざるか或は之を亦すも微弱にして胎糞の量は少なし耳及び鼻の軟骨は軟かなり頭蓋の大きに此して顔面の小なるを覺へ身

胎兒の子宮内に於ける生活

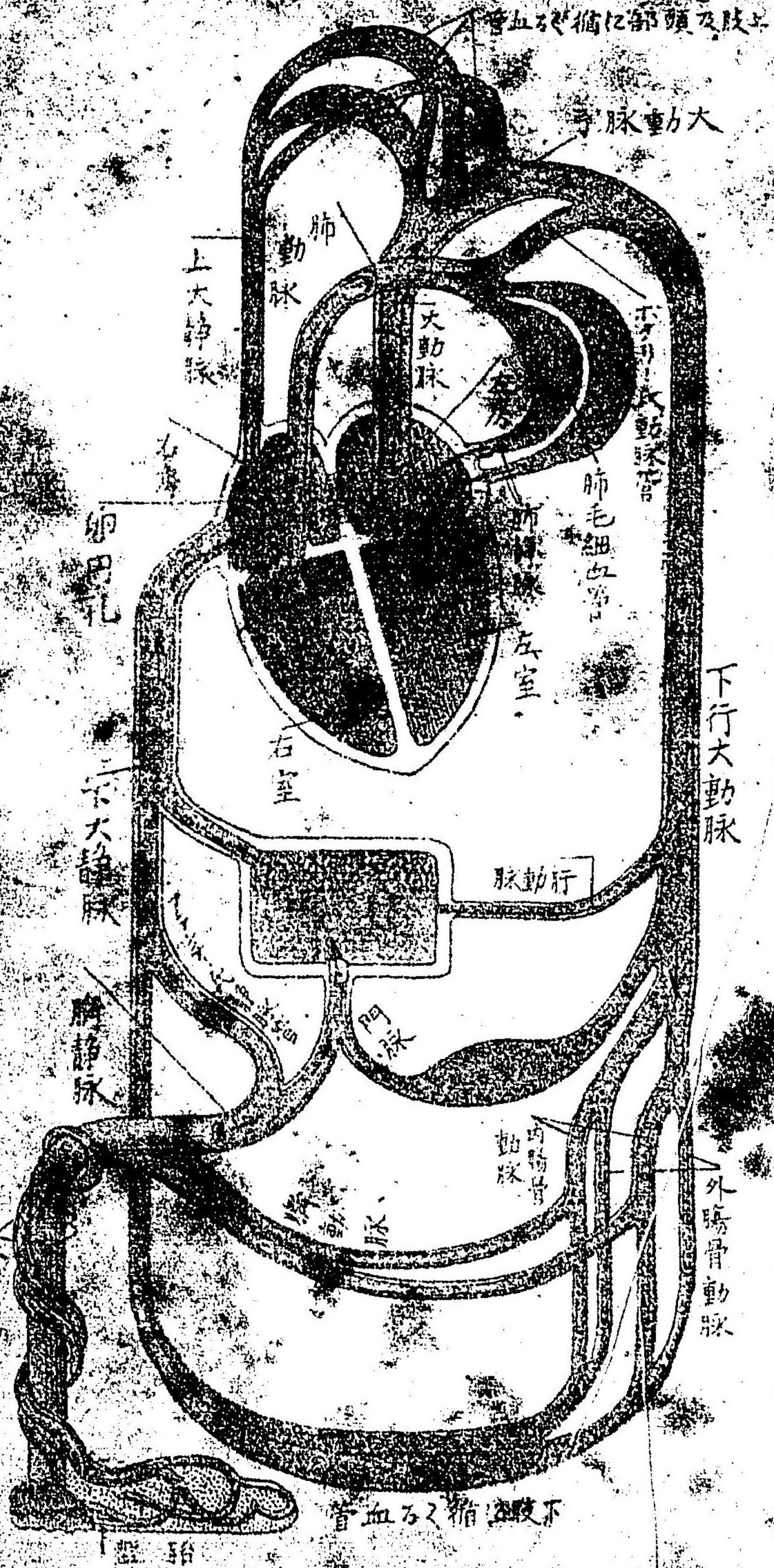
○胎兒ハ如何ニシテ營養分ヲ得ルヤ

長は四十八仙迷に達せず體量は七百五十々に達せず頭蓋の縫合は甚だ弛くして顛門廣く且つ軟かく頭蓋の諸徑線を測定するも成熟兒に比すれば一般に小なり

第五十節 胎兒の營養(胎盤血行)

胎兒は子宮内にありて呼吸せず飲食せずして生活す而して其生活に必要な營養物は血液にして此の血液は矢張り大人小兒に於けると同じく胎兒の身體を循環不潔とあるが故に常に之れを新鮮とすべき裝置なかるべからず然れども胎兒の肺は未だ發育せずして呼吸を營むこと能はざるを以て其の代りに胎盤あるものあり而して胎兒の身體中には血液の新生すること盛んにして之れを消費すること少なきが故に血液の成分を

胎兒の血液循環(想像圖)



第七五圖

十八日位に達せず體量は七百五十匁に達せず頭蓋の縫合は甚だ弛くして頭門廣く且つ軟かく頭蓋の諸徑線を測定するも成熟兒に比すれば一般に小なり

第五十節 胎兒の營養（胎盤血行）

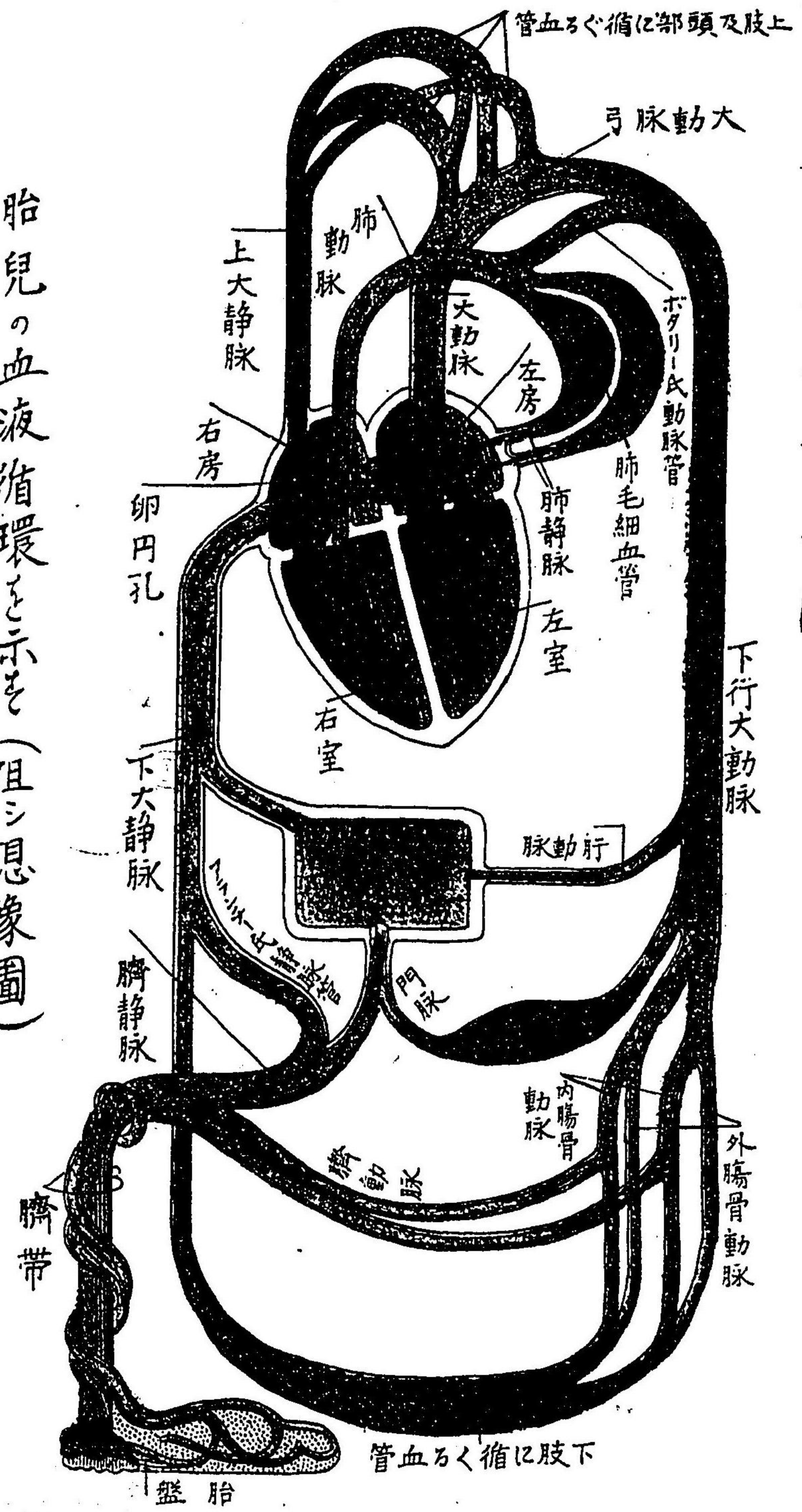
胎兒の子宮内に於ける生活

胎兒ハ如何ニシテ營養ヲ得ルヤ

胎兒は子宮内にありて呼吸せず飲食せずして生活す而して其生活に必要な營養物は血液にして此の血液は矢張り大人小兒に於けると同じく胎兒の身體を循り不潔なるが故に常に之れを新鮮にするべき裝置なかるべからず然れども胎兒の肺は未だ發育せずして呼吸を營むこと能はざるを以て其の代りに胎盤あるものあり而して胎兒の身體中には血液の新生すること盛んにして之れを消費すること少なきが故に血液の成分を

第七十五圖

胎兒の血液循環を示す（但シ想像圖）



管血るく循に部頭及肢上

弓脈動大

肺動脈

上大靜脈

右房

卵円孔

下大靜脈

臍靜脈

臍帶

盤胎

管血るく循に肢下

下行大動脈

脈動行

内腸骨動脈

外腸骨動脈

股動脈

脛動脈

肺毛細血管

左室

肺靜脈

右室

天動脈

左房

ボタリ動脈管

補ふべき飲食物の如き者は要せざるあり

胎盤血行 胎兒より來れる血管は胎盤中にて母體の血液を潜るのみにして兩者の血管は連續せざるを以て血液は相流通せず即ち兩者の血液は壁一重(即ち胎兒に屬する血管の壁)を隔つるあり然れども此壁は非常に菲薄にして瓦斯體の如きものは容易に交流し得べきが故に母體血液中の酸素、胎兒血液中の炭酸は容易に交換せらる而して斯の如くして新鮮とされる血液は毛細靜脈管を経て一本の臍靜脈に集まる

臍靜脈に集まれる新鮮の血液(動脈血)は臍帶を通じ臍を経て腹部に入り分れて一部は肝臓内を通り一部はアランナー氏靜脈管を経て二ツあがら下大靜脈中に入り此所にて身體下半部を養ひ不潔とされる靜脈血と合し終に心臟の右上房に入り卵

胎兒の血液循環

胎兒の血液循環は大人と異なるものにして先づ左の事項を承知せざれば理解し難し

- 一、胎兒の體內に動脈血と靜脈血と混合して循環する事
 - 二、胎兒は肺臟呼吸を營まざるが故に肺に多量の靜脈血を流通せしむ
 - 三、臍動脈は大人の肺動脈に等しく、臍靜脈は大人の肺靜脈に等しく、胎兒は營む事
 - 四、胎兒は腹部にアランチー氏靜脈管左右上房間に卵圓孔大動脈と肺動脈間にボタリー氏動脈管を有する事
- 胎兒ノ血液循環トハ如何ナル影響ヲ蒙ルヤ
○胎兒ノ早期呼吸トハ如何ナル影響ヲ蒙ルヤ

圓孔を通じて左上房に入り左心室に下り其の大部分は上行大動脈を経て身體上半部に循り他の一小部は(上大靜脈より右上房右心室次で肺動脈と大動脈との交通路あるボタリー氏管を経て來たる)身體上半部を養へる不潔の血液と合して益々不潔となり下行大動脈を下り身體下半部を養ひて下大靜脈に集まる而して右循行中血液の大半部は内腸骨動脈より起れる臍動脈に由りて臍及び臍帶を通じ胎盤に至り毛細動脈管となる

以上の如くして胎兒は營養さるゝ。雖胎盤の形成以前にありては妊卵は單に絨毛膜絨毛に由りて直接に子宮壁より營養物を攝取するに過ぎず

胎兒は斯くして子宮内生活を營み決して呼吸せず唯だ胎盤血

○妊娠中臍帶強ク壓迫セラルトキハ胎兒ハ如何ナル影響ヲ蒙ルヤ

○胎兒ノ早期呼吸トハ如何ナル影響ヲ蒙ルヤ

行に由て新鮮なれる血液の爲に養はるゝのみ然れども若し胎盤血行止むか或は血行障害の爲めに胎兒の血液が酸素を得ること能はざるか或は少なきときは血液中に炭酸蓄積し呼吸の中樞を刺戟して胎兒は爲めに時を選ばず第一呼吸を營むべし此の際子宮内に存する胎兒は呼吸に由て羊水を吸引するのみならず(之を子宮内呼吸と云ふ)炭酸は益々増加し終に窒息し死するに至るべし

第五十一節 胎兒の位置

胎兒の子宮内に於ける種々ある位置は左の三者に由て説明し得べし

(一)體勢、胎兒身體各部相互の關係を云ふ即ち胎兒の姿勢を

正規の體勢

胎位胎向體勢

胎兒の位置

○子宮内ニ於ケル胎児ノ位置體向ハ如何
○胎位胎向トハ如何

異常の體勢は分娩開始後に來るもの多し

り而して正規の體勢にありては背部を屈め頤部を胸部に接し、上肢を胸部に於て交叉し、下肢を膝關節、股關節、足關節にて強く屈し、上腿を腹部に接し、下腿を下腿に接す。此の如き體勢は妊娠前半期より分娩に至るまで、持續し、胎兒運動に當つて身體を伸展する時の外は之れを變ずることなし、故に持續性に右の體勢に反するものは異常に屬す。
(二)體位、とは子宮の長徑と胎兒の長徑との關係に由て定まるものにして、兩者同じ方向あるときは胎兒は縦位にあり、云ひ交叉するときは横位(又は斜位)あり、云ふ而して縦位にして兒頭が母體の骨盤入口に向ふものを頭位、と稱し、兒の骨盤部が母體の骨盤入口に向ふものを骨盤端位、と云ふ。
妊娠の前半期にありては胎兒小にして子宮腔は之れに比すれ

妊娠の前半期に在りては胎兒は極めて移動し易きも、後期に至れば漸次移動せざるに至る

第七十六圖



正規の體位體勢をとれる胎兒を示す

の進むに従ひ胎兒の發育盛んなるに反して子宮及び子宮腔の

ば割合に廣く且つ圓く羊水も亦た割合に多きが故に胎兒は容易に體位を變ずべし然れども妊娠時期

増大は之れに伴はず且つ其圓形は變じて卵圓形とあるが故に胎児の運動は漸次困難とあり終に一定の體位を占むるに至る其多くは頭位なり、頭位にして正規の體勢を保ち分娩に至るものは多くは眞先に兒の後頭部より骨盤内に入り産出す是れ即ち後頭位と稱するものにして斯の如く眞先に骨盤内に入り最も深く下降する部を先進部と云ふ此の後頭位は多くの體勢體位を取れる分娩中唯一つの正規の位置にして百回の分娩中九十五回の多きを占め他の頭位は皆な正規の體勢を取らずして百回の分娩中一回半骨盤端位は三回横位は二百回の分娩中僅かに一回の割合にあり

即ち後頭位に於ける先進部は後頭なり

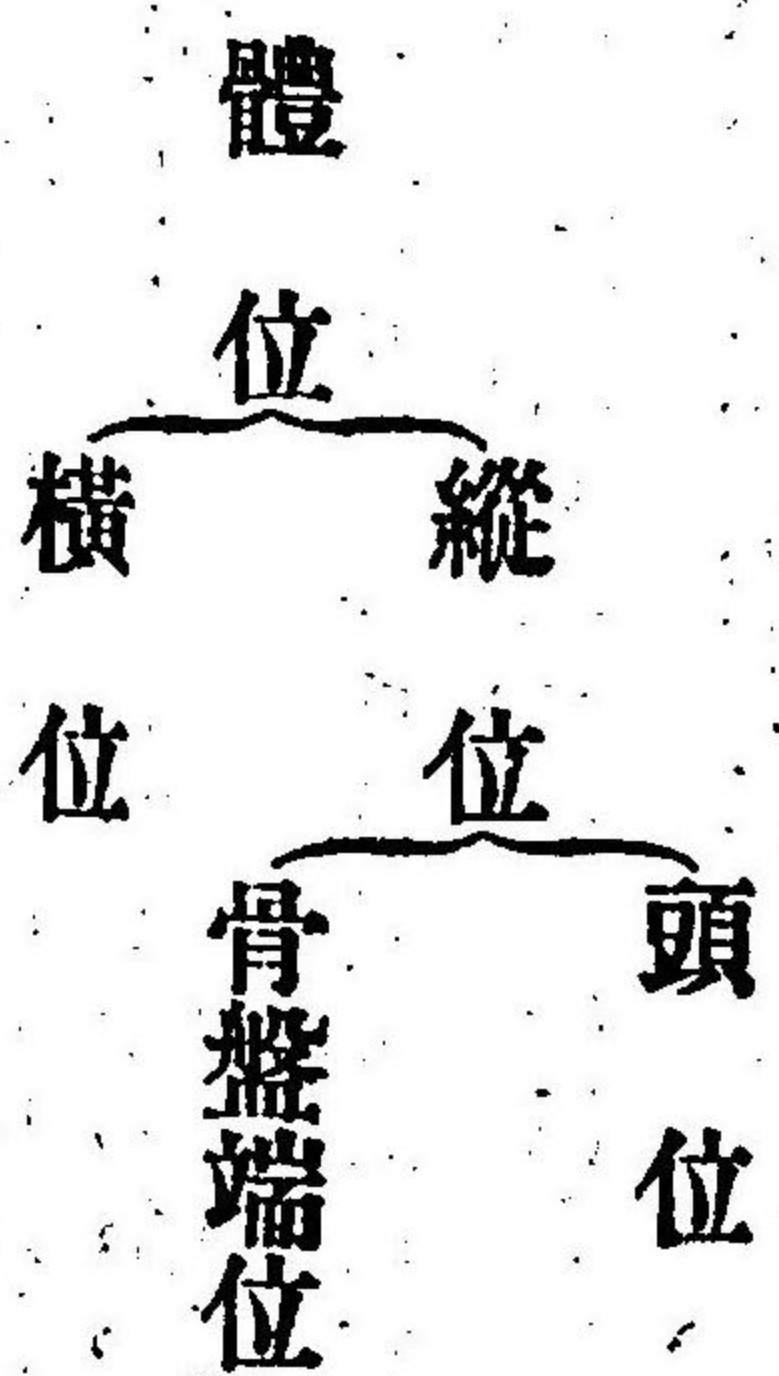
頭位の多き理由

正規の體位

以上述ぶる各體位の中頭位の多きは全く羊水中に浮游する胎児の身體中頭部最も重くして胎児は常に頭部を下にし且

體向

つ妊娠末期に至り子宮腔卵圓形とあり上は廣く下は狭く従つて子宮の下部は兒頭の坐を占むるに適合するが故なり



(二)體向、こは兒背の方向を云ふものにして兒背若し母の左側に向ふときは第一體向と云ひ右側に向ふときは第二體向と云ふ而して頭位にして第一體向あるときは單に第一頭位と云ひ第二體向あるときは第二頭位と云ふ骨盤端位も亦た同じく第一第二骨盤端位と云ふ然るに兒背は常に全く左方若くは全

分類

體向の定まる理由

く右方に向ふものにあらず必らず少しく前方或は後方に向ふ而して其前方に向ふものを第一分類と稱し後方に向ふものを第二分類と云ふ例之は兒背母の左側に向ひ少しく前方に向ふものを第一體向の第一分類と云ふが如し又た横位にありては兒頭左側にあらば第一横位と云ひ右側にあらば第二横位と云ひ分類は頭位に於けると同じ例之は横位にして兒頭左方にあり兒背後方に向はゞ第一横位の第二分類と稱するが如し

以上の如き胎児の體向は胎児身體の最も廣き部分と子宮内腔の關係に由て定まるものにして此關係を知らんと欲せば先づ子宮内腔は左右に幅廣く普通の胎勢を有する胎児にありては其左右部の廣さよりは背部より腹部に至る厚さの大あることを記憶せざるべからず故に胎児は子宮内腔に適合

合すべき爲に背部を左側或は右側に向くるに至る而妊娠中子宮の左角は前方に回轉するが故に兒背は全く左側或は右側に向はずして左側に向へるものは常に少しく前方、右側に向へるものは常に少しく後方に向ふべし又た兒背の右側は肝臓の重さによりて左側よりも常に下方に向はんとするが故に婦人直立の際は兒背の右側左前方に來り靜臥の際は右後方に向ふべし尙ほ又た妊婦直立の際は子宮の前壁は降下するが故に胎児は重き廣き背部を以て全く之れに従はんことすべし然れども腰椎突出の爲に支へられ全く前方に向ふこと能はざるを以て兒背は前左方に傾くべく仰臥の際は之れに反して右後方に向ふべし然るに毎日直立の時間は靜臥の時間よりも長きが故に胎児の背部は常に左前方に向ひ少

して下方に傾き延長し易き腹壁を壓下するに至る

第五十二節 妊婦の全身に現はる、變化

- 妊娠ニ由テ來ル全身ノ變化ハ如何
- 妊娠中婦人ノ身體ニ現ハル、變態ヲ簡單ニ記載セ
- 妊娠ニ現ハル、各系ノ變化ヲ記セ
- 妊娠中母體ノ外部ニ現ハル、變化ヲ詳記セ

精神變調し易し

妊婦初期に於て來るべき變化の中主なるものは精神、神經、消化器、血行器、泌尿器、皮膚の變態にして精神は過敏となり平素快活ある性質の婦人も鬱々として樂しまず些細の事にも感じ易く或は怒り或は喜び或時は悲しむ等のことあり或婦

婦人妊娠するときは身體諸器官は之れが影響を蒙り其作用上幾分の増劇を來すこと通常なり而して此の増劇は決して病氣にあらずと雖も妊婦攝生法の如何、婦人の身體營養の良否によりては屢々病氣に變じ易きを以て産婆は能く是等の變化を記憶し最も注意するを要す

神経系統に起る變態

消化器に起る變態

血行器に起る變態

泌尿器に起る變態

皮膚に起る變態

大にありては平素よりも反つて快活とあることあり神經系統にありては頭痛、齒痛、腰痛、眩暈、等を來し消化器の變化は妊娠中殊に著しきものにして嘔吐、惡心、嘔吐、流涎、等を來し殊に毎朝空腹時に於て水様液を吐出し或は食後直に吐逆することありて大便は多くは秘結す其他嗜好物の變化を來し平素好む處の飲食物を嫌ひて反つて平素慣れざるものを好み殊に酸味のもの喜び時としては好んで壁土、木炭、白墨線香などを食する事あり血行器に於ては心悸亢進、胸内苦悶、脈血、等を來すことあり泌尿器にありては子宮の膨大及び形狀變化の爲に尿意頻數を來し咳嗽、嘔嚏に依つて容易に尿を漏す事あり皮膚に於ては胸部顔面等に褐色の斑を現はし一見雀斑を生じたるが如きことあり又た眼の周圍に褐色の輪を生

子宮の増大に因する變狀

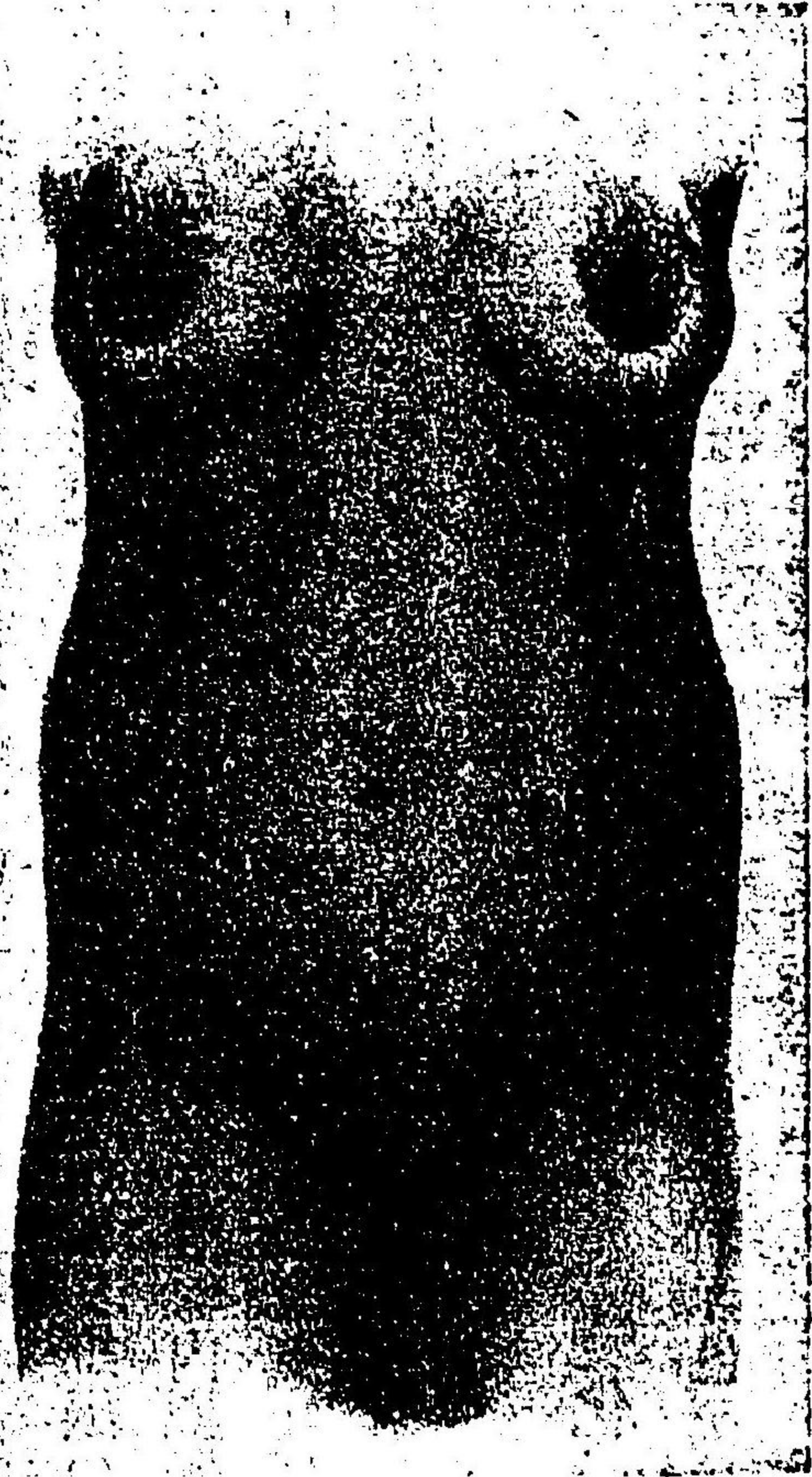
する事あり腹壁の中線即ち白條線はくじやせんは常に子宮底の高さに相當して褐色はくしやくに着色す

以上の變化は多くは妊娠の初期殊に第二ヶ月の頃より起り妊娠四五ヶ月頃に至れば自ら消失するを常とす（殊に消化器の變化）然れ共稀れには妊娠の全經過中持續するものあり（殊に皮膚の變狀）妊娠後半期に發する變化は主に子宮の増大に基こ因して骨盤内に存する血管は膨大せる子宮の爲に壓迫を受くるが故に下肢及び外陰部等の血液循環を妨げ血管中の水分は周圍の組織内に滲漏えんろうし以下肢及び外陰部等に軽度の浮腫うしむを發し加ふるに靜脈管は擴張せられ皮下に走るものは青色の隆起りゅうきとして透見し得べし此れを靜脈怒張じやうまいどかうと云ふ而して腹部は子宮の膨大に従つて膨張し同時に腹壁も又た之れに伴ふて緊張きんかう

妊娠痕

妊婦の全身に現はる、變化

第七十七圖



妊娠線を示す

し妊娠末期に至れば遂に其緊張の極度に達し皮下の深き部に

龜裂かひれきを生じ赤色の線を現はすに至る之れを妊娠線にんごんせんと云ふ此の妊娠線は分娩後も白色の光澤ある線狀の痕あととして生涯消失

せざるものゝす又た妊娠末期に至れば子宮膨大の爲に横隔膜
壓上せられ呼吸困難を來し且つ腹部膨大の爲に臍窩は突隆し
妊婦は身體を反張して歩行をあすに至る
以上述ぶる子宮の膨大によりて來る壓迫徵候は獨り妊娠のみ
に來るにあらずして腹部の腫瘍及び腹水の如き骨盤内臓器を
壓迫し同時に腹部の膨大を來す疾病にも現るゝものあれば産
婆は常に注意せざるべからず

第五十三節 妊娠の生殖器に現るゝ變化

婦人妊娠するときは生殖器は一般に血液に富み藍赤色を呈し
柔軟となり粘液分泌増加し平常より溫暖となる今之れを各別
に論述すれば左の如し

○妊娠中膈外陰部及び
乳房ハ如何ニ變化ス
ルヤ
○妊娠ニ因スル白帶下
トハ如何

(一)外陰部及び陰 陰唇は稍々膨大し柔軟となり靜脈管擴
張し外面の皮膚には多少暗褐色の色素を沈着し陰門及び陰は
柔軟且つ鬆粗となり其長さも廣さを増し温度高まり藍赤色と
なり粘液の分泌増多す

(二)子宮 子宮は妊娠時生殖器中最も變化の著しきものにし
て先づ受胎したる卵が子宮粘膜炎に附着するときは粘膜炎は漸次
(子宮頸管部を除く)肥厚して血管増殖し血液に富み鬆粗と
なり既述の如く翻轉脱落膜及び眞脱落膜となり兩者は初めは
相接せざれども妊娠五ヶ月頃に至れば卵は全く子宮腔を充た
すが故に遂に全く癒着するに至る而して脱落膜は分娩の際
常に其一部脱落し絨毛膜に附着して排泄せらるゝものあり其
他子宮粘膜炎の一部が絨毛と共に胎盤を形成するは前節に述べ

○妊娠セル子宮ノ量況
ヲ記セヨ
○妊娠シタルトキ子宮
ニ起ル變化ハ如何
○妊娠ニ由テ起ル子宮
ノ變化ヲ記セヨ
○妊娠子宮内粘膜炎ノ變
狀

○妊娠中子宮ノ増大ス
ル理由ヲ察ゲ

たるが如し

子宮壁は筋肉組織の肥大増殖によりて肥厚し且つ血管の増殖

擴張の爲に血液に富み大に

柔軟となり子宮は全體に大

きなる而して

子宮の形状は

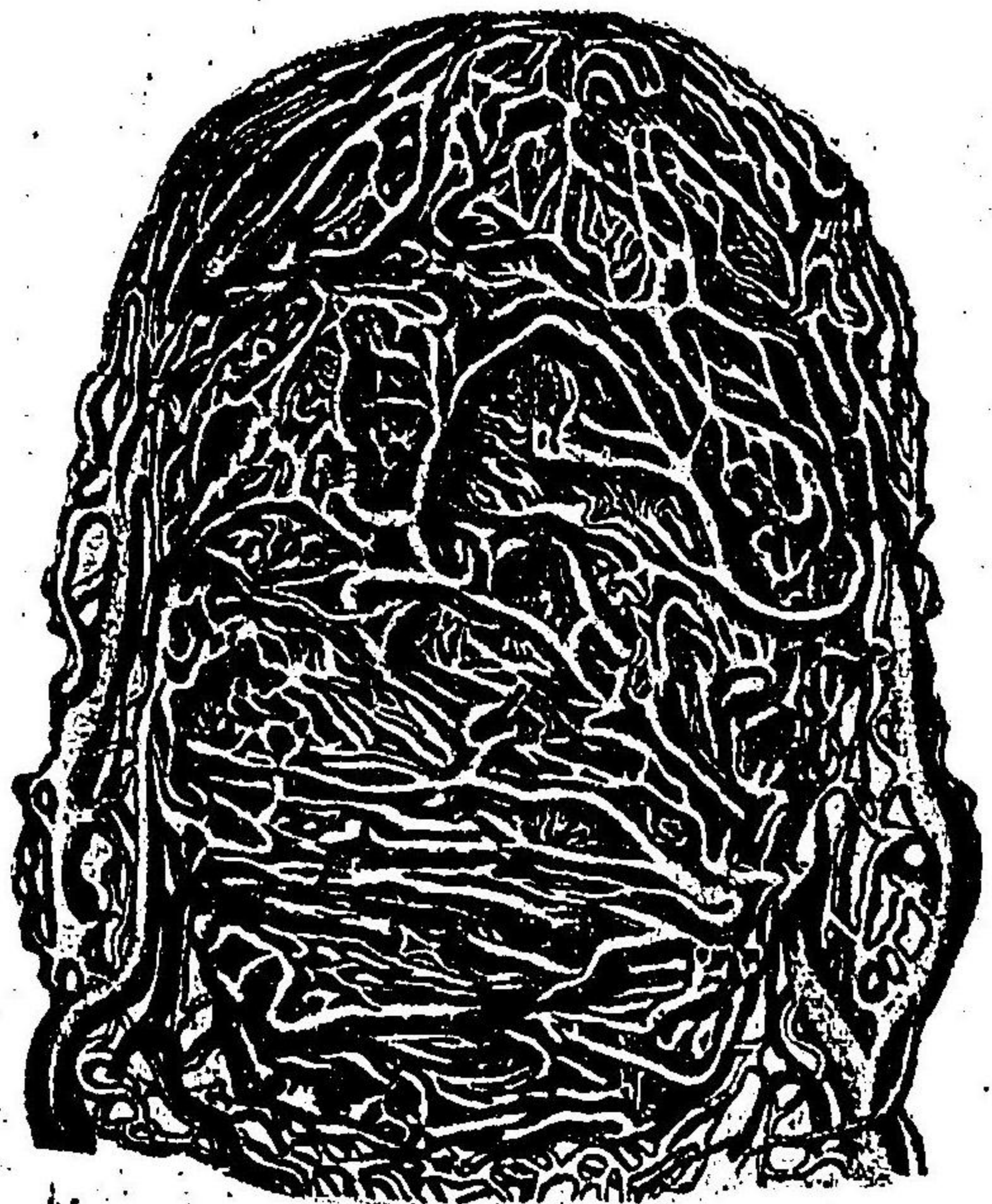
妊娠五六ヶ月

までは梨子状

あれども其後

は變じて卵圓

第七十八圖



は變じて卵圓

○妊娠第十二週ニ於ケル子宮及ビ胎兒ノ状態ヲ記ルセ
○妊娠第十六週ニ於ケル子宮ノ状態

形となり子宮腔の大き及び形状は専ら子宮の變狀に伴ひて變化す今妊娠各月に於ける子宮の變狀を示せば左の如し

妊娠一ヶ月にありては子宮は著しく腫大せざれども二ヶ月の

終りに至れば驚卵大となり卵の附着せる部は突隆す子宮腔部

は著しく着色し柔軟きある三ヶ月の終りには子宮は手拳大

かり全體著しく柔らかく且つ著しく前屈し子宮腔部は從つて

後方に向ふ之れによりて膀胱直腸は壓迫を受け尿意頻數便秘

を來す妊娠四ヶ月の終りに至れば子宮底は耻骨縫際上に於て

腹壁より觸知するを得べく子宮腔部は上昇す而して子宮全體

は漸次球形をなすに至る五ヶ月の終りに至れば子宮底は臍と

耻骨縫際との中間に達し六ヶ月の終りに至れば子宮底は臍部

に達し七ヶ月の終りに至れば子宮底は臍上二指横徑にして子

宮は之れより漸次卵圓形となるべし八ヶ月の終りには臍と胸骨の劔狀突起との中間に達し九ヶ月の終りには子宮底は心窩に達し十ヶ月に至れば分娩の準備と見做すべき特別の現象を現はし子宮全體は沈降し子宮底は前方に突隆し臍と劔狀突起との中間にあり子宮腔部も下降し同時に再び後方に向ふ而して此子宮腔部は經妊婦にありては分娩の開始に至るまで存するも初妊婦にありては妊娠七ヶ月頃より漸次其形狀を失ひ妊娠末期に至れば其形を認むること能はず之れを子宮腔部の消失と云ふ

妊娠の末期に於ては子宮の内容は殆ど平素の五百倍となり一千瓦の重さを有し其形も卵圓形を呈し子宮底部は最も廣く前後の直徑二十三仙迷左右の直徑二十五仙迷にして子宮腔部は

最も小さく子宮口部より底部に至る長徑は三十六仙迷に達す然れ共成熟胎兒の大きさ種々にして羊水の量も又た著しく差あるが如く子宮の大きさも又た妊娠末期に於て多少の差異あること勿論なり以上の諸現象は妊娠時期を診斷するに最も必要なを以て後章に於て再び詳論すべし

妊娠子宮は婦人の體內に於て眞直の位置を保たずして子宮底は前方に傾き子宮腔部は主に少しく左側に子宮底は少しく右側に傾き同時に子宮前壁は少しく右方に廻轉し之れによりて子宮の左角は少しく前方に右角は少しく後方に向ふべし

(三)輸卵管、卵巢、扁韌帶、圓韌帶、も亦た子宮の變化と共に血液に富み柔軟となり且つ子宮の膨大に伴ふて其位置を變ずるものこす

妊娠中は排卵機能止むが故に月経閉止す。雖甚だ稀れには月経様の子宮出血を來すことあり。

(四)乳房 乳房は妊娠二ヶ月頃より漸次膨大し乳暈は暗褐色、或は黒褐色に着色し乳頭は突出し之れを壓迫すれば初乳を稱する不透明の灰白色の水様液を分泌し乳房竝に其周囲の皮下靜脈管は稍々擴張して皮膚上より青色に透見し得べし。

第五十四節 妊娠の診断

妊娠の徴候

○妊娠ハ何ヲ以テ診断スルヤ

○妊娠ノ徴候トハ如何

婦人妊娠するときは已に述べし如き身體竝に生殖器に於ける種々の變化を以て妊娠たる事を診断す。雖も其價値の多少により區別して不確徵、半確徵、確徵の三とす。

(一)不確徵 妊婦の全身に現る、變化にして主として妊娠初期に發するものなり即ち精神の變化、頭痛、眩暈、悪心、嘔吐、嗜好物の變化、腹部の膨滿、便秘、尿意頻數、心悸亢進、眼周圍の暗色、其他皮膚の色素沈着、下肢の浮腫、靜脈怒張等なり此等の徴候は多くの妊婦に於て見る處の徴候なるも又た他の病により生ずることあり或は此徴候なくして妊娠なる事あるを以て診断上の價値少し故に此等の徴候あるときは妊娠を想像し得ること共に又た他の疾病より來りしにあらずやこの疑を起さざるべからず。

○妊娠ノ徴候及ビ子宮内胎兒ノ位置ヲ記セ

(二)半確徵又は疑症 此は主に生殖器に現る、變化にして月經の閉止、子宮の増大、柔軟、子宮腔部の柔軟なること、及び其着色、外陰部及び陰部の柔軟となり粘膜の藍赤色に變ずること、子宮血管の雜音を聴取すること、乳房の變化、殊に乳

○妊娠ノ確證ヲ記載セ

腺の發育乳暈の着色等にして此等の徴候は通常妊娠に於て認むる主なる徴候あるも又た時として他の病に發することあり殊に月經の閉止は種々の病に於て來り乳房の變化は初妊婦にありては妊娠を想像するに足るも雖も經産婦に於ては其價値少し又子宮の疾病腫瘍等によりて子宮は増大し或は柔軟となることあるを以て以上の徴候を以て決して確證を必ず事能はざるものとす唯だ婦人の身體強壯にして他の腫瘍其他の病的症候を認めざる場合に於て以上の變化多數に現るゝときは再三の検査によりて殆んど確實に近き診断をなし得べし

(三) 確徴、とは胎兒によりて現るゝものにして即ち左の如し

(一) 胎兒心音

(二) 胎兒身體各部の觸知

(三) 胎動を觸れ視聽く事

(四) 臍帶雜音の聽取

此等の徴候は一つにても確むることを得るときは其妊娠なることを斷言し得べし然れ共胎動及び胎兒各部の觸知等は産婆自ら感觸したるものにあらずれば確實ならず又胎兒心音及び臍帶雜音は必ず母體の脈膊と比較して檢せざるべからず然らざれば往々母體腹部の大動脈音及び子宮血管雜音等と誤ることあり

以上の確徴中胎兒の心音臍帶の雜音胎兒の運動等は妊娠五ヶ月後に於て現るゝものなるが故に其以前に於ては到底確實ある診斷を必ずし能はざるものとす但し臍帶雜音は常にあるものにあらず故に若し其以前に診斷を確かめんとせば、産科

醫に托するを良しす流産の場合に於て他の妊娠徴候を認め得べからざるも子宮口部に於て卵を觸知せば其診斷は確實あり又死せる胎兒あるときは各部分の觸知のみによりて診斷し得べし。雖も觸診法は最も叮嚀あらんことを要す

第五十五節 妊婦の診察法

(産婆の一般診察法)

産婆が妊婦を診察するの目的は婦人は果して妊娠なるや否や果して妊娠なれば妊娠の第何ヶ月に相當するや其胎兒は生存するや否や胎兒の位置體向等に異常なきや胎兒の數は何個なりや初妊婦なるや經妊婦なるや妊婦の體格骨盤構造に異常なきや胎兒は何時頃分娩すべきや等を決定するものにして是等

妊婦診察の目的

○妊娠ノ徴候並ニ産科學上ノ診察法ヲ記ル
○妊娠中産婆診察ノ目的ヲ記セ

妊婦診察法の區別

を決定すべき爲には産婆は手指、目、耳を用ひて診察す其手指を用ひて檢するを觸診。又は按診と云ひ目によるものを視診。又は望診。と云ひ耳によるものを聽診。と云ふ産婦褥婦に於ても又た同様の手段を以て爲すが故に之れを産婆の一般診察法と名づけ之れを分ちて問診、外診、内診、の三種に區別す而して診察に際しては順序を正しくし叨りに長時間を費さざる様注意すべし然れ共決して粗暴ならず輕卒あらざる様なるべく懇切叮嚀に診察し一回の診察によりて凡てを知り決して二回三回診察を反覆せざる様心掛くべし而して診察に當りてはあるべく身體の露出を少くすべし

(甲) 問診

○妊婦ヲ診察スルニ當
テ産後ハ何故ニ既往
分娩ノ難易ヲ問フヤ

○助産婦ノ胸コソバキ
外検査法

○妊婦ノ外部検査法ニ
就テ

妊婦に接し診察を行ふに當りては先づ左の事柄を詳しく尋問すべし之れ妊娠分娩産褥の経過初生児の取扱法等に大關係を有すればなり

- (イ) 妊婦の姓名年齢職業 (ロ) 之れまで患ひたる疾病殊に生殖器疾患其他梅毒結核骨軟化病佝僂病等 (ハ) 之れまで妊娠したることありや否や若しかつて妊娠したる婦人あれば其度數及び妊娠分娩産褥の経過兒の健否 (ニ) 平素月經の順不順 (ホ) 終末月經の期日 (ヘ) 今回の妊娠經過中異常の有無 (ト) 初めて胎動を感じし時日 (チ) 現今異常なきや否や

(乙) 外診(外検査法)

外診とは身體の外部より検査するの法にして全身一般の視診

胸部殊に乳房の視診觸診腹部の視診觸診聽診骨盤の觸診竝に外部各徑線の計測下肢及び外陰部の視診及び觸診等是に屬す先づ全身一般の外表を觀察して妊婦の體格營養を察し強壯あるや病身なるやを判斷し皮膚着色の有無及び下肢の浮腫等を檢し其歩行の姿及び骨格の大小等により骨盤異常の有無を推測すべし次で胸部の検査に移る

胸部に於ては殊に乳房の形狀に注意し其膨大の模様を檢し緊實にして胸壁に固着せるや或は弛く懸垂せるやを見乳暈着色の模様を見乳頭突出して哺乳に適するや否やを注意し次で能く接觸して乳腺發育の状態を檢し乳頭を搾りて初乳を漏出するや否やを檢すべし

腹部に於ては婦人を仰臥せしめ帶をこき腹部を現はし腹部の

腹部診察の準備

外形及び其膨大の度を見白條線着色の模様、妊娠線の有無等
 を検し臍窩の形状胎兒の運動を観察すべし次で左の五種の方
 式により腹部を觸診すべし

觸診は經妊婦あるときは一般に容易にして初妊婦あるときは
 困難なりなんごあれば初妊婦の腹壁は緊張の度強きが故あり
 而して初妊經妊に拘らず觸診に際して腹壁緊張せば腹腔子宮
 内の模様を明かにすること能はざるを以て凡ての腹壁を緊張
 せしむる事は注意して避ざるべからず即ち妊婦を仰臥位（背
 臀位）にあらしめ必要なるときは上體を少しく高め膝關節及
 び股關節を屈せしめ淺き呼吸を營ましめ努責を禁じ手指を暖
 め各指を竝列平坦にして徐々に腹壁に貼すべし若し手指冷き
 か或は手を以て衝突伏に腹壁を觸るれば腹筋は收縮し腹壁は

緊張し且つ子宮は收縮して硬固となり胎兒部分を觸るゝ能は
 ざるに至るべし

第一式 産婆は妊婦の一侧に於て妊婦の顔と自身の顔と相
 對向するが如く坐し先づ兩手を下腹部の左右側に貼し手掌面
 を相對向せしめ徐々に下腹を觸れつゝ耻骨縫際より上方に及
 ぼすか或は心窩より下腹及び耻骨縫際に向つて觸診すること
 は子宮の所在其大さ形状並に移動するや否や同時に腹腔内に
 他の腫瘍の有無等をも判定し得べし

第二式 子宮底の部に一手若しくは兩手の小指縁を押壓し
 て子宮底は腹壁の何れの部分まで達せるやを検し次で子宮底
 部に存せる胎兒の部分を觸れ頭部なるや臀部なるや或は小部
 分あるや又た空虚なるやを検査すべし

圖九十七第



式二第診觸部腹

圖十八第



式三第診觸部腹

第三式 此法は主として體向を定むるにあり先づ兩手掌を對向せしめ子宮底部より腹部の兩側を下降せしめ一手を他手に向つて押壓しつゝ觸診すれば正規の妊娠に於ては樹枝の水中に浮游するが如く輕易に運動する小部分即ち四肢を觸れ他

側に於ては廣くして稍々硬き胎兒の背部を觸知すべし(縦位) 若し子宮底及び耻骨縫際上の空虚あるときに於ては腹部の兩側に於て兒頭及び臀部を觸知すべし(横位)

第四式 此法の目的は専ら胎兒の先進部を定むるにあり先

同 第四式を示す

圖一十八第



妊婦の顔面に向はしめざるべからず此の如くして檢するとき

づ一手の拇指と他の四指との間若しくは兩手を對向せしめ其間に耻骨縫際に存する胎兒の部分即ち先進部分を握み之れを檢すべし此際産婆は自身の背部を

は兒頭は既に述べたるが如く胎兒身體中最も圓く且つ最大最硬にして最も觸れ易きを以て容易に診定し得べし之に反して兒頭此處に觸るゝ能はずして縦位あるときは例令子宮底部に兒頭を確實に觸るゝ能はざるも殆んど常に骨盤端位と見做して可なり何となれば此の如く觸れ易き兒頭も子宮底部に存す

腹部觸診 第五式



るときは容易に觸れ難きものなればあり
第五式 先進部若し骨盤入口に進入するときは産婆は第四式の如き坐位をとり両手の指尖を耻骨縫

圖二十八第

先進部の固定

際上より骨盤内に壓入して先進部を掴み精密に検査すべし然るときは先進部の體勢及び其骨盤内に固定せらるゝや否やを知り得べし(先進部の固定とは先進部骨盤内に入りて移動せざるを云ふ)

以上述べたる腹部の觸診は精密なる注意と熟練とを要するものにして是によりて腹壁の弛緩緊張子宮の位置形状羊水の多少胎兒の大小體位體向體勢及び其移動するや否やを検し得べく同時に妊娠五ヶ月後にありては胎兒の運動を觸知し得べし

聽診器を示す

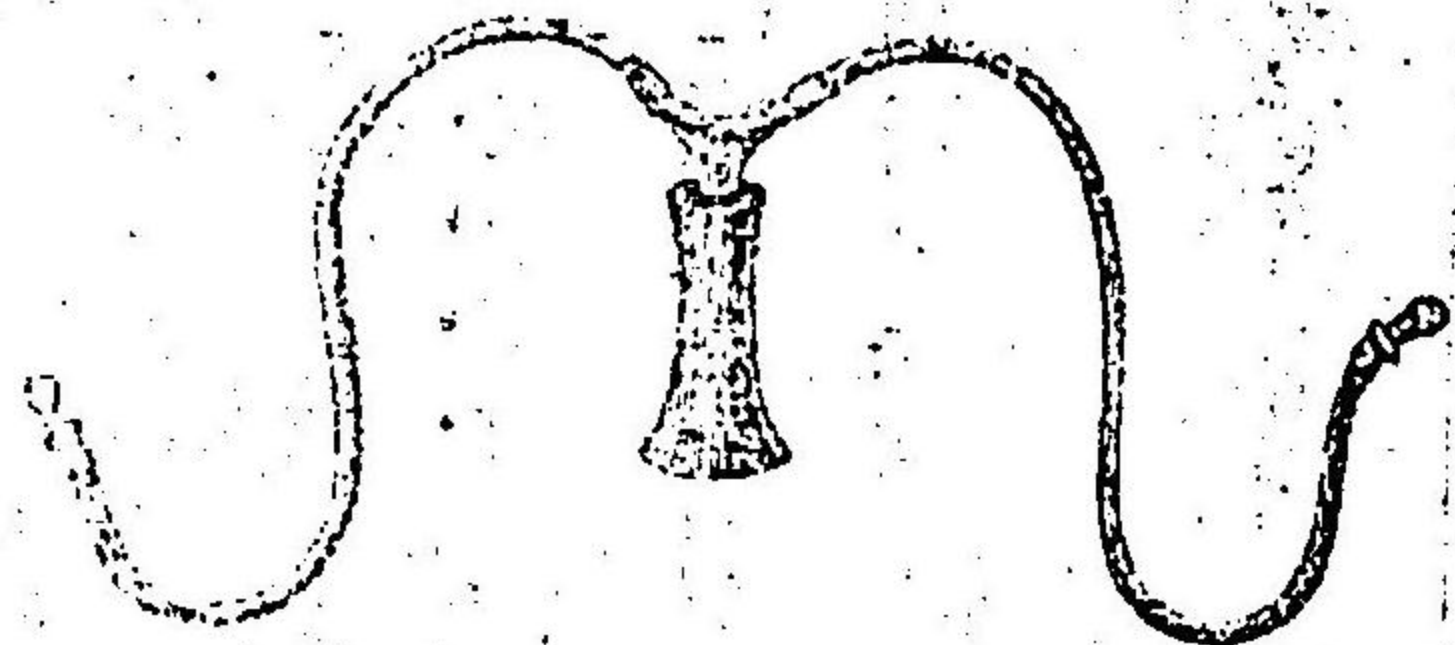
圖三十八第 (甲)



而して觸診の際往々子宮は收縮して硬固とあることあるが故にかゝるときは暫時其手を弛め再び子宮の弛緩するを待ちて觸診

○ 妊娠末期ニ於テ妊婦
ノ腹部ヨリ聴取シ得ル音
キ胎兒ヨリ發スル音

(乙) 圖 三 十 八 第



す示を器診聴

(丙) 圖 三 十 八 第

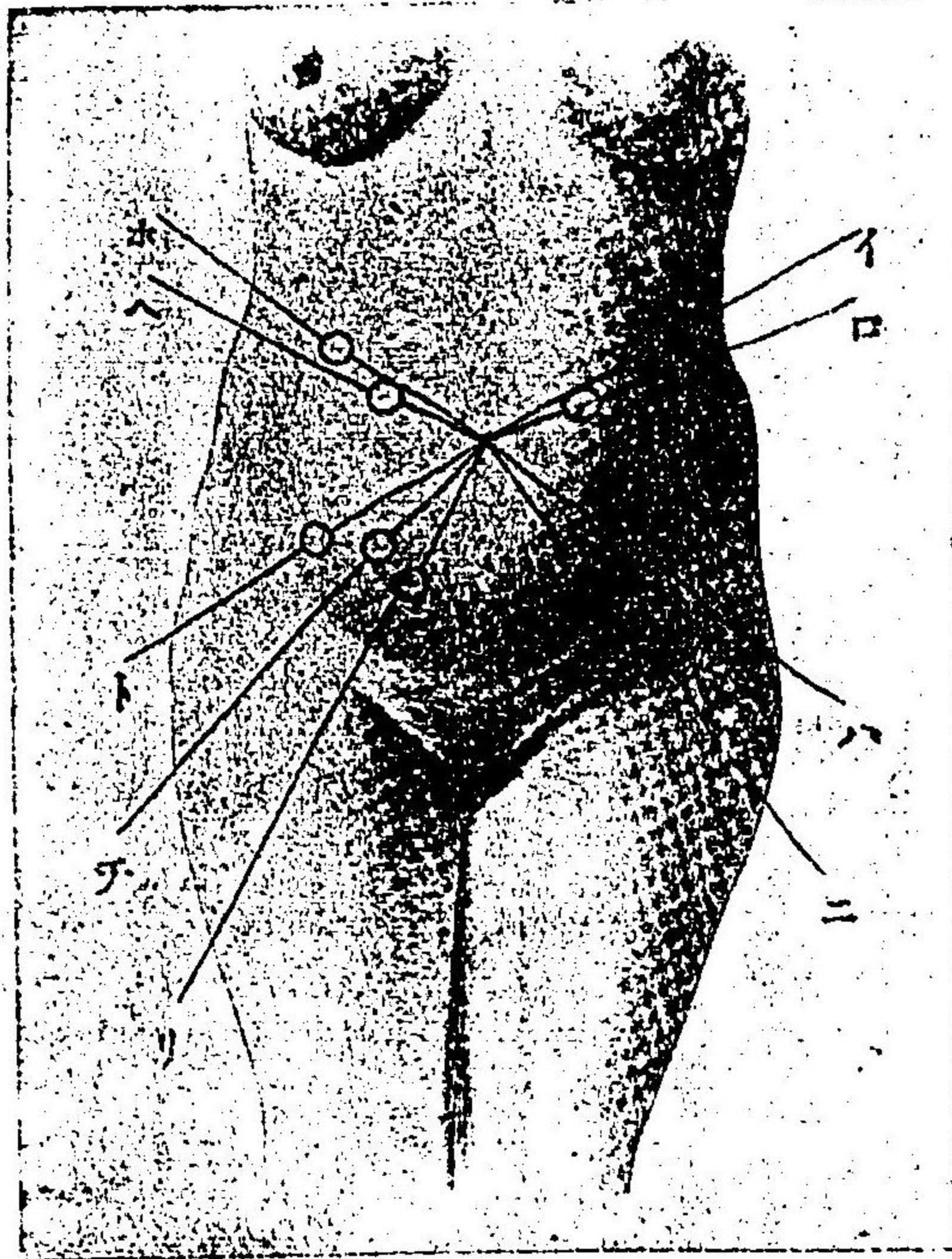


す示をるあ、つし診聴を部腹

すべし以上の検査終らば腹部の聴診を行ふべし
腹部を聴診するには仰臥せる妊婦の兩足を伸して腹壁を緊張
せしめ以て腹壁と子宮壁とを接せしめ産婆は聴診器を用ゆ

腹部を聴診するに
は聴診器の筒口を
かなり強く腹壁に
かたり強し子宮能
に移動するもの
に在ては手を以て腹
壁より子宮體を
固定し聴診器に
寄らしむべし

(甲) 圖 四 十 八 第

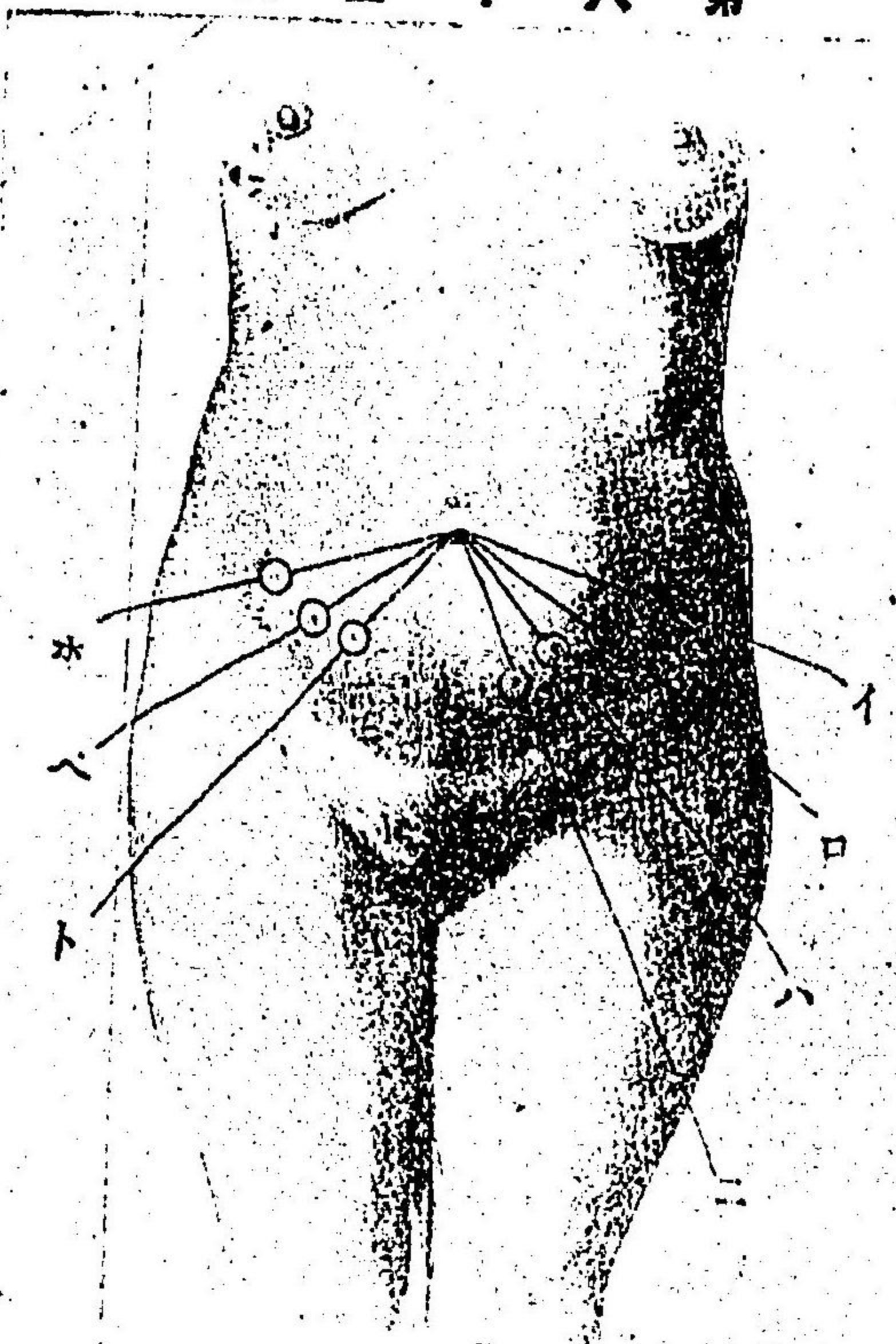


るか或は一枚の布片を腹壁に貼じて直に耳を接着して聴取す
但し腹部に於て聴取すべきは左の六種の音にして其内初めの
各體位體向に於ける胎兒心音聴取の場所を示す

- イ 第一骨盤端位
- ロ 第二分類
- ハ 同第一分類
- ニ 第一前頭位
- ホ 第一後頭位
- ヘ 第二骨盤端位
- ト 第二分類
- チ 同第一分類
- リ 第二前頭位
- ニ 第二後頭位
- リ 第二横位

兩耳聽診器のゴム管は衣服其他にふれざる様注意せざれば雑音を發す

第 四 十 八 圖 (乙)



各體位體向に於ける胎兒心音聽取の場所を示す

三種は胎兒に屬し次の三種は母體に屬す

(一)胎兒の心音、 妊娠五ヶ月の末より聽き得べく胎兒の背

○胎兒心音及胎動ノ診斷的價値
(生死と位置を知るのみならず胎動の強弱を知るは胎動の強弱により胎兒の危險と否とを判別す)

○胎兒心音ノ數及胎動ノ生兒一分時ノ呼吸數
(初生兒一分時の呼吸數は三十乃至四十回)

○妊婦ノ腹壁上に於テ聽取スヘキモノノ名稱及ビ其性質

妊婦の診察法

部が子宮壁と接着する部に於て聽取すること普通あるも顔面位と稱する異常の體勢をこれる位置にありては前胸部子宮壁と接着するが故に胸の存する部にて聽取すべし而して心音は其數、強弱、聽取部位によりて胎兒の危險及び生死を知り體位體向を定め子宮内に存する胎兒の數を鑑別し得べきものにして一分時間百三十乃至百四十にして男兒には少く女兒には多くして恰も時計の音を聽くが如き清く澄める重複音あり

(一)臍帶雜音、 臍帶の壓迫せらるゝか或は結節を生じたるとき生ずる音にして恰かも吹くが如く其數胎兒心音に等しくして妊娠中甚だ稀れに心音を聽取する部位の近くに於て聽く所のものなり

(二)胎動音、 胎兒の運動によりて起る突くが如き音にして一

子宮血管雑音を昔は胎盤雑音と云へり

○胎児心音ト子宮血管雑音ノ異ナル點ヲ明記セヨ

○各種胎位ニ於ケル心音ヲ聴取スベキ部位ヲ記セ

手の指を並列し耳前に支る他手の一指を以て軽く之れを打たば胎動音と全く等しき音を發すべし

(四)子宮血管雑音、子宮の血管内を血液の流通するときに發する摩擦音にして母體の脈搏と同數の吹くが如き著明の雜音なり通常耻骨縫際上の左右側に於て明かに聴取すべし而して妊娠三ヶ月より全妊娠經過中及び産褥の初期に於ても聴取すべし

(五)腸内瓦斯の雜音、腸内に於て瓦斯の運動する際發する不正の雷鳴の如き音あり

(六)母體腹部大動脈管より發する音、母の脈搏と同數同調子の音にして敲くが如く或は打つが如し

以上の諸音を區別せんには常に一手を以て母の手腕關節部に

心音を聴く時は同時に母の脈を見よ

於ける脈搏を検し是れを聴取しつゝある音との數を比較するを要す然らざれば往々過ちを來す事あり即ち胎兒心音、臍帶雜音は通常母體脈搏の二倍弱にして子宮血管雜音母體腹部大血管音等は母の脈搏と同數同調子あり然るに胎動音腸内瓦斯雜音等は極めて不正なるを以て注意を怠らざるときは容易に鑑別する事を得べし以上の検査終らば骨盤及び下肢の検査に移る
産婆は先づ兩手を以て腰部を接觸し骨盤の構造及び外形に異状あきや否やを検し次に骨盤計測法の條下に述べたる方法を以て骨盤の各徑線を計測して骨盤の大小を知り次で股關節大腿下腿骨等に異常あきや否や並に靜脈の怒張浮腫の有無を検す可し

○妊娠中産婆ノ内診ヲ行フベキ場合ヲ記載セヨ

産婆に必要な妊娠時の検査法は以上にて既に足れり。雖も必要の場合ありて内診を行はんとする時は先づ外陰部の状態を検し次で之れを行ふべし。

○助産婦ノ内診スベキ場合及ビ其方法

(丙) 内 診 (内検査法)

内診とは手指を腔内に挿入して検する方法にして之れに必要な注意と其の方法とは左の如し。

産婆内診に就ての注意

産婆の不潔なる手指は傳染毒の媒介物となる

(一) 産婆の身體並に衣服は常に清潔に保ち内診に際しては手指及び外陰部を消毒法に論述したる規則に従ひ極めて嚴重に消毒すべし。然らざれば妊婦産婦の生殖器は柔軟にして血液に

○産婦並ニ産婦ノ内診時ニ當リテ注意スベキ事項ヲ記セ

「ヒン」「アカギレ」の手を以て内診するは禁物なり

富み能く傳染毒を吸収するを以て産褥熱の如き烈しき熱性病を惹起す此危険は妊娠の末期に近くに從ひて増し分娩産褥に於ては一層危険あるを以て甚しき必要に迫らざる限りは成る可く内診せざるを可とす殊に産褥の初期に在りては全く内診を止め若し疑はしき事あらば産科醫の診察を乞ふべし。
(二) 他の熱性病殊に産褥熱に罹れる褥婦の取扱をさせる産婆は全身浴を行ひ衣服の交換をかし殊に手指に嚴重の消毒を行へる後一二晝夜を経るにあらざれば内診すべからず。
(三) 産婆の手指に創傷あるか殊に創傷部化膿せる場合は内診すべからず。
(四) 内診は度々行ふべからず一回の内診。雖も豫じめ外診によりて充分判明せざるべきのみ行ふべし一回の内診によりて

其目的を達せず再診を要するときは時を更へて爲すを良しす然らざれば數度の内診の爲に流産早産を促し且つ傳染毒を移すの危険あり

(五)内診は決して粗暴あるべからず子宮口の開ける場合に於ては手指を頸管内殊に卵膜と子宮壁間に進入すべからず是が爲に卵膜を破り流産早産を促すのみならず殊に細菌の進入を媒介すべし故に先進部を探らんと欲せばあるべく膣穹窿部を隔てゝのみ検する様にすべし

(六)内診前は可及的大小便を通利せしめおくべし殊に排尿は最も必要なり

(七)内診によりて検査し得たる種々の徴候は一々是れを記載し置き度々内診を反覆せざる様心懸ざるべからず

(八)産婆は左右何れの手にてても内診ををし得る様練習し置くを良しす

内診によりて検査すべき事柄

- (一) 膈及び會陰の性質
- (二) 骨盤の大小廣狹
- (三) 子宮口及び子宮腔部の模様
- (四) 膀胱直腸の充虛
- (五) 胎兒の先進部
- (六) 膈内に存する分泌物の性質

此他分娩時に於ては尙特別に檢すべき箇條あり後章に詳述す

妊娠中内診に由て知り得べき事項

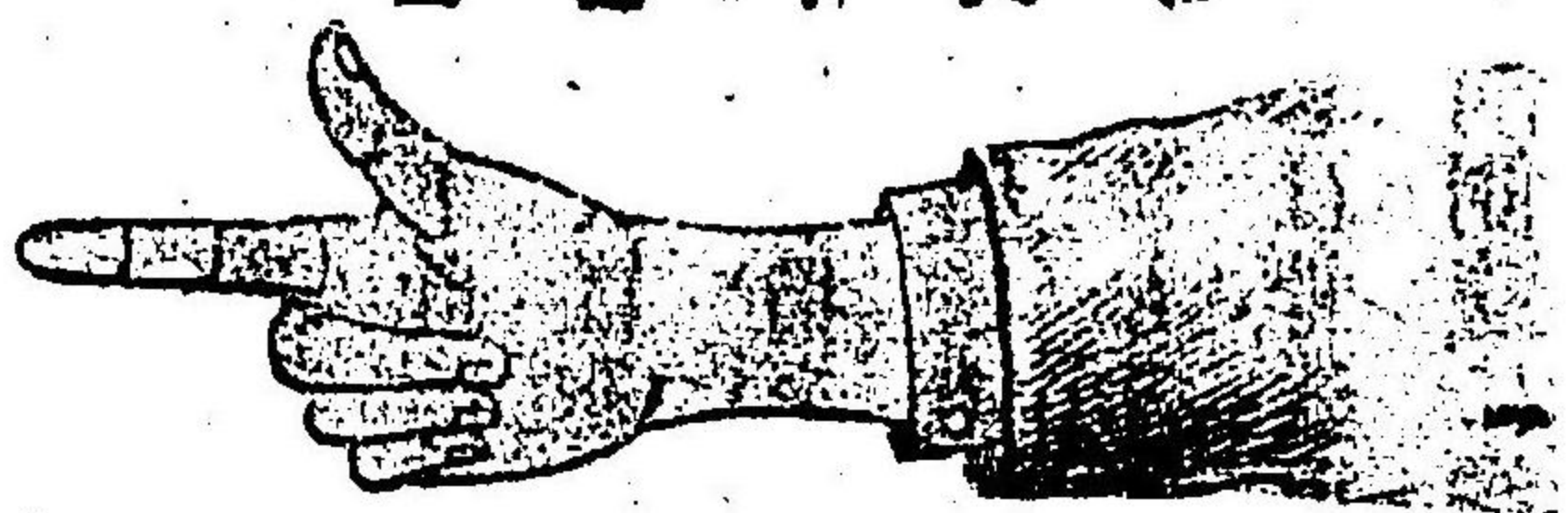
へし

内診の方法

妊婦を仰臥せしめ膝を屈せしめ布片を以て下肢下腹部等を被ひ臀下に枕を挿入して是れを高め(骨盤傾斜を減少せしめ)或は妊婦の上半身を少しく高くし産婆は其手指を消毒せる後妊婦の顔面に向ひ其傍らに接着して坐を占め或は兩脚間に坐を占む而して先づ外陰部を消毒せる後更に今一度手指を消毒し其一手の拇示二指を以て陰唇を開き手指挿入の際陰唇陰毛を壓入せざる様注意し傍ら浮腫靜脈瘤等の有無を検し次で他手の示指及び拇指は伸し他の三指は掌中に屈し示指のみを挿入す(然れ共必要あるときは中指を加ふる事あり)即ち之れに五

内診に際しては拇
指其他の手指陰核
に觸れざる様注意
すべし

第十八圖



内診の時手指の方式を示す

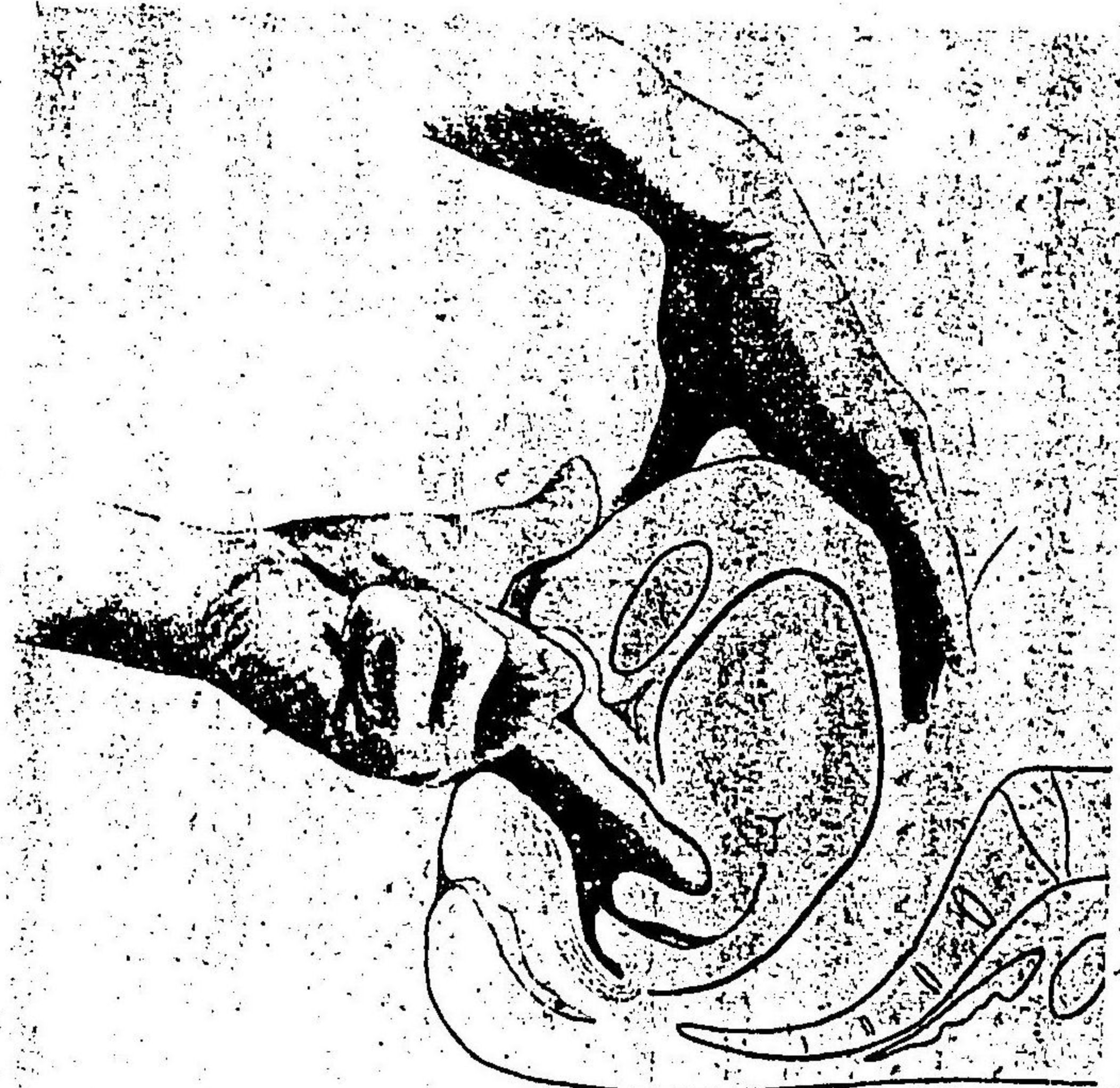
十倍石炭酸阿列布油を塗り其手掌面を會陰にむけ膣の後壁に沿ふて徐々に挿入すべし但し此時拇指は延したるまゝ一側の陰唇上に貼するか或は掌中に屈するを良しす此際注意すべきは膣入口の大小硬軟會陰の延長性膣の廣狹硬軟分泌物の性質等なり次に手指を深く挿入して膣穹窿部に達すれば指の手掌面を前方に回轉して先づ子宮膣部を検すべし即其方向長さ及び大きさ形状硬軟等を検し次に手指を其尖端に送り子宮口の形状を検し次で其大き及び其邊緣滑澤あるや或は不平あるやを検し若し子宮口の開大せる時は其大きを探り次で膣穹窿部殊に前膣穹窿部を隔て

て子宮體を觸診し其壁の厚さ、硬さに注意し疼痛を感じる處は無きや妊娠の末期ならば既に胎兒の先進部を骨盤入口上に於て觸知すべきにより其何れの部分先進せるや且つ此先進部はよく移動するや或は既に骨盤内に固定せるや否やを檢すべし但し此際よく耻骨縫際の上縁を觸れ得るときは先進部未だ骨盤入口上にあり従つて尙固定せざるを知り得べし次に手指を後脛穹窿部に送り薦骨胛に向つて押壓すべし通常骨盤にありては一或は二指を以てするも容易に薦骨胛を觸るべきものにあらざるが故に此際指尖容易に薦骨胛に達するときは骨盤直徑線の著しく短きを知り得べし次に手指を骨盤の兩側壁に送るときは三角形の隆起即ち坐骨棘を觸知すべきにより其際左右の距離は何程あるやを推測し次に手指を尾骶

雙合診

骨の前部に貼じて其移動性を檢し腔内より指を去るに當りては耻骨弓の廣狹をも檢すべし内診の際尙ほ檢すべきは膀胱直腸の有様にして膀胱充盈するときは前脛壁より軟き護謨球の如きものとして觸れ直腸に糞便の充滿せるときは腔の後壁に於て凸凹不平の塊を觸れ之れを壓迫するときは指痕を残し以て他物を鑑別するを得べし兒の先進部尙ほ高く位し移動するが故に腔内に挿入せる手指を以て詳細に觸診すること困難あるか或はまた腹腔内に上昇せざる子宮を檢査するが如き場合に於ては雙合診を行ふこと必要あり雙合診とは一手の手指を腔内に挿入し他手を腹壁上に加へて子宮若しくは先進部を支持し兩手合せて檢査するの法あり之れによりて腹壁より子宮に與へられたる運動は内診

第十八六圖



双合診を行ふを示す

せる手に傳
はり子宮腔
部より與へ
られたる運
動は外診の
手に傳はり
以て詳細な
る検査を遂
げ得るもの
とす而して
雙合診を行
ふには強く

欠

MISSING

第九圖

經産婦に於ける子宮腔部及び子宮口の變化を示す



妊娠五六月頃の子宮腔部

妊娠七八月頃の子宮腔部

妊娠九十月頃の子宮腔部

故に胎兒の各部分を容易に且つ早期に觸知し得べし

(三) 外陰部 初妊婦に在つては腔口狹くして弛緩せず處女膜痕は完全に存す經産婦に在つては腔口廣くして弛緩し處女膜は破裂して數個の小結節狀をなし所謂ミルツ狀肉阜となり陰唇繫帶會陰及び腔の前壁尿道口の兩側等には往々前回分娩に於ける創傷の癍痕を遺し爲めに陰裂は間々後方に延長し陰唇は全く閉鎖せざるもの多し

(四) 膈腔、初産婦に在ては狭くして横に走る皺襞著しく、經産婦に在ては廣く滑澤にして皺襞少し

(五) 子宮膈部、甚だ必要ある區別の點にして初産婦に在ては漸々其尖端より柔軟となり子宮口は圓形にして其邊緣滑澤手指を挿入す可らず、妊娠後半期殊に七ヶ月頃より子宮膈部は漸次短縮し妊娠の末期に至れば殆んど消失し子宮口縁は菲薄となり子宮口は多くは閉鎖す、經産婦に在ては子宮膈部は漸次柔軟なるも硬き癍痕の部分を交る、妊娠の末期に至れば短縮するも全く消失するに至らず、子宮口は圓形滑澤ならず、妊娠後半期に至れば漸次漏斗狀に開大して指を挿入し得べく、末期に至れば益々開大して手指を以て卵膜を觸れ得るに至り子宮口縁は厚く不正にして裂痕を有す

(六) 兒頭、初産婦の妊娠末期に在りては兒頭は骨盤入口に固定するも、經産婦に在りては然らず

以前の妊娠正規の終に達せざるか或は分娩後多くの年月を経過するに従がひ上述の諸變化は漸次消失して著明あらざるに至る之れに反して處女膜會陰及び子宮口の變化は常に殘存するが故に區別上最必要あるものなり然れども亦た經産婦に非らざるも他の原因よりして以上列記の諸變化を來すことあるを忘るべからず

第五十七節 分娩期日の推定法及び

妊娠時期の鑑定

妊婦は自ら何時頃分娩すべきやを知らんとするを以て産婆は

普通用ゆるは此の法なり

○分娩期日推定法トハ如何

○終末月經五月二十八日ニ閉止スルトキハ何月何日ニ分娩スルヤ

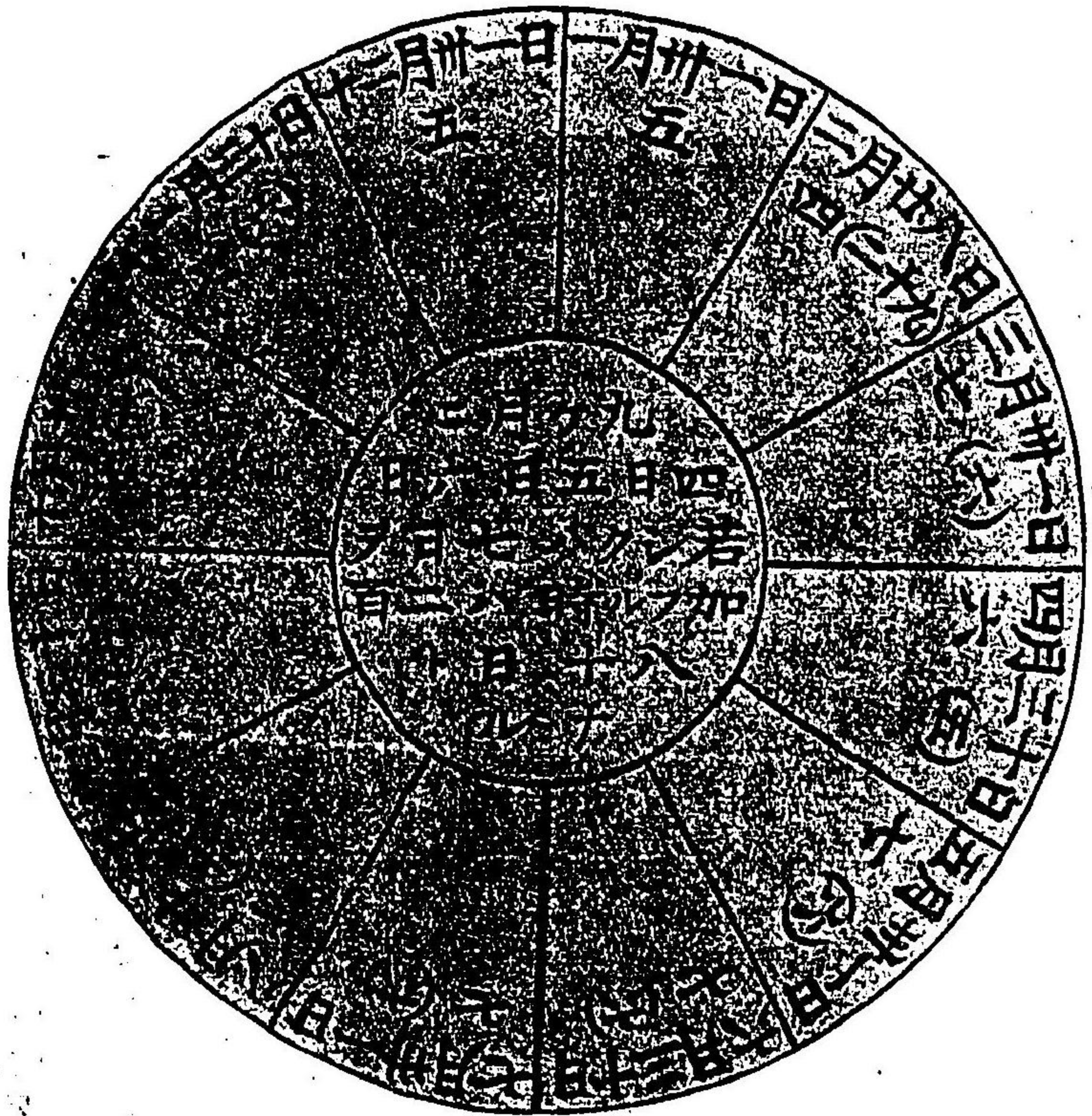
○受胎ノ月日ヲ算スル法

○妊娠時期ヲ推定スルニハ何々ニ由リ之ヲ定ムルヤ

妊婦診察の際現今妊娠第何ヶ月に相當せるやを鑑定し従つて之によりて分娩期を推定するの要あり其方法に種々あり

第一、終末月經より起算する法、第三十七節に述べたる如く妊娠の持續は平均二百八十日にして最終月經の第一日より計算し二百八十日を以て分娩時と假定す然れ共一々指を屈して計算するは甚だ煩雜なるが故に左の如き簡單の法を用ゆ即ち太陽曆の一ヶ月は其月の大小及び閏月等により多少相違ありと雖も其九ヶ月と七日を加へたるものは凡そ二百八十日に當るが故に終末月經の日に九ヶ月と七日を加ふるか或は終末月經の日より三ヶ月を減じ之に七日を加へ其得たる數に等しき翌年の月日を以て分娩期日と定む例之ば本年五月十日より終末月經を見たりとすれば是れに九ヶ月を加へ或は三ヶ

第十九圖 妊娠を推定する



月と大小あり年に平年と閏年あるを以て上圖の如き妊娠を以て分娩日と算定せんと欲せば圖中の終末月經に相當する月より左方に三ヶ月を算へ各月の下に記せる數字を月經日に加ふる時は二百八十日なる正確なる日數を出す但し閏年には各月の下にある括弧内の數字を加へざるべからず今一例を擧げん十月三日を終末月經の始まりとし日とすれば其日より左方に三ヶ月を算へ七月三日を得之れに其の月の下にある數字七日(閏年は六日)を加ふ即ち翌年の七月十日は分娩日にあたる

月を減じ得たる答の二月十日に七日を加へたる者即ち翌年二月十七日を分娩の日と定む又は是と反対に分娩の月日より九ヶ月を減じ或は三ヶ月を加へて七日を減じ終末月経の日を測定するを得べし此算法は第九十一圖に示す妊娠暦を用ゆる時は精密にして簡單なり右計算法は甚だ簡便なり且雖も妊娠の初期に於ては稀に一二ヶ月間月経様の子宮出血を來すことあり或は分娩後授乳の間は月経多くは來潮せず或は他の疾病に由り月経閉止を來せしに拘らず妊娠することあるが故に是れ等の法に由つて分娩期日を測定すること能はざる場合あり

第二、受胎の日より起算する法、是れ受胎せりと思ふ交接の日より第一の方法に由つて分娩期日を測定するの法あり然れ共受胎の日を知り得べき事は甚だ稀あるのみならず婦人は

は受胎せる交接と雖も特別の感覺を覺ゆるものに非ざるが故に産婆は之を利用して計算をなすこと稀なり單に一回の交接に由て妊娠せり云ふ場合あきに非らず雖も斯かる場合は甚だ稀にして亦た實際信用し難きものとす

第三、妊婦の初めて胎動を感じたる日より起算する法、妊婦の初めて胎動を感じるは通常妊娠前半期の終り若しくは後半期の始めあるを以て始めて胎動を感じたる日に五妊娠月を加へば分娩の日を測定し得べし然れども胎動は胎兒の健否羊水の多少に由て母の感じを惹くに遅速あり又婦人の注意すること否に由りても同様遅速あり即ち經妊婦の如きは初妊婦より早く之れを感じるが故に胎動を以て分娩を豫期するは精確なるものにあらず

妊娠各月の徴候

○妊娠中各月ニ於ケル徴候ハ如何

○妊娠各月ニ於ケル子宮、膈部、及胎兒變化ノ状況ヲ記セ

○妊娠各月ニ於ケル子宮底ノ高さ如何

第四、妊娠各月の徴候に由り鑑定する法、妊娠の徴候を診査し、妊娠月を鑑定する法にして産婆が實地に熟練を積む程其鑑定は益々確實となり殊に終末月經又は初めて胎動を感じし日の詳ならざる場合等に於ては之に由りて妊娠月を推定し次で分娩時日を測定する外あり故に此方法は産婆に於りて甚だ必要なるものなり今妊娠各月に於ける徴候を列記すれば左の如し

妊娠第一ヶ月(第四週)の終りに於ては子宮膈部は少しく肥大し其尖端より柔軟となり藍赤色を呈し膈の分泌は稍増加し溫暖となり然し是等の變化は月經時と誤り易し

妊娠第二ヶ月(第八週)の終りに於ては以上の如き子宮膈部の變化に加ふるに膈粘膜も漸次弛緩着色し子宮は増大して

驚卵大となり少しく圓みを帯び或は其一部に突隆部を生じ前方に傾く此時に於て膀胱を空虚にし雙合内診を行ひ示指を前腔穹窿部に至て他手の指先を腹壁上より骨盤腔内に壓入するときは前腔穹窿部に於て増大して柔軟となり子宮體を觸知し得べし而して乳房は此時より稍膨大して緊實となり乳暈及白條線の着色を始む

○妊娠第十二週ニ於ケル子宮ノ變化ヲ舉ゲ

ヘーガルの徴候

妊娠第十二ヶ月(第十二週)の終りに於ては子宮膈部は益々柔軟となり外陰部弛緩して着色著しく子宮頸部より子宮體に移行する部分即ち子宮口の部分は殊に柔軟となり内診の際恰も此部分の消失せるが如く感ず而して子宮は手拳大となり益々柔軟となり前方に傾き且つ腹腔に向つて上昇を始むるが故に子宮膈部も後方に傾き且つ上昇す此際雙合診を行ふとき

○妊娠十六週ニ於ケル子宮ノ状態ヲ問フ

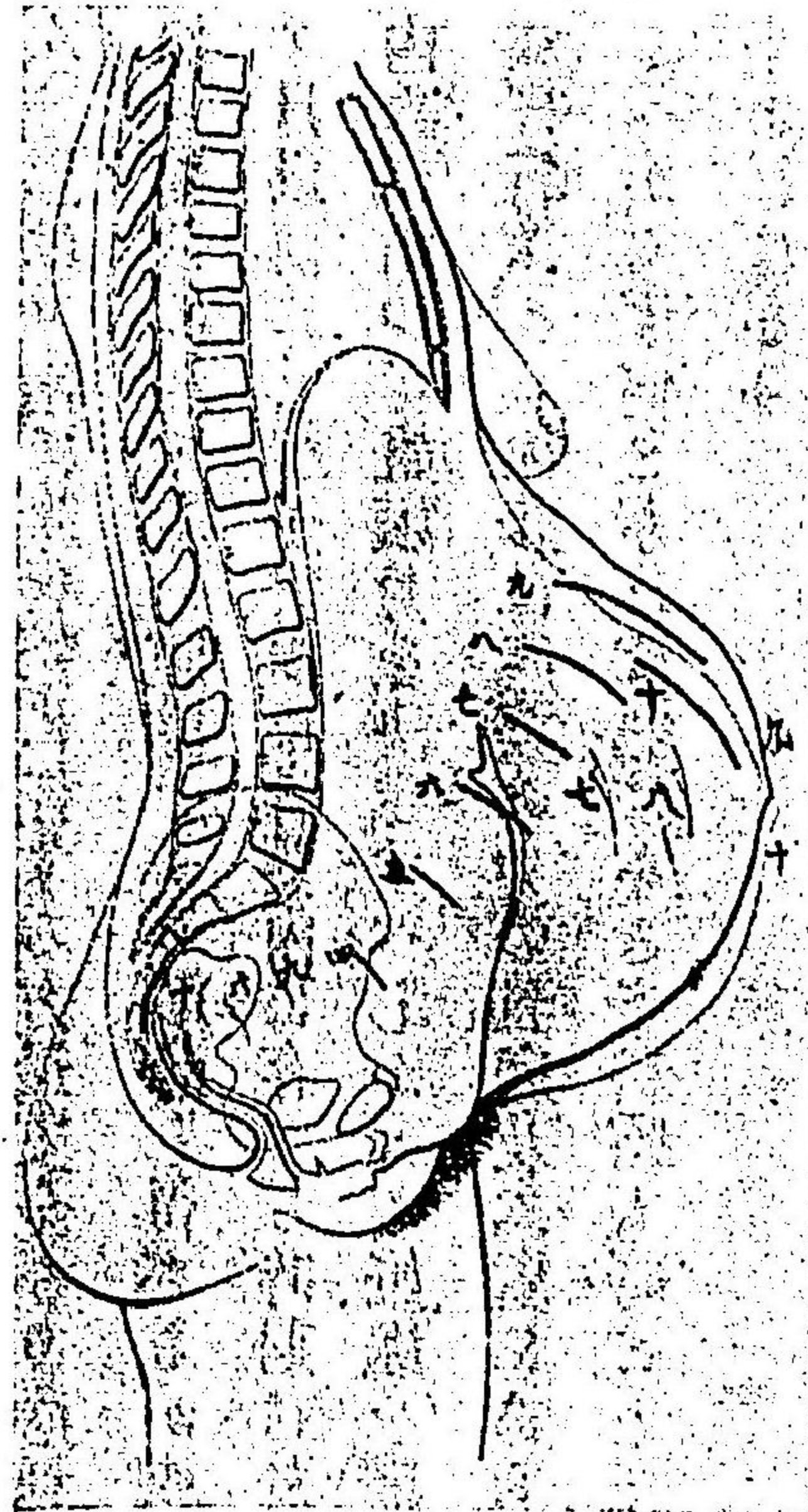
妊娠子宮の硬度(觸感)は一種特別なり

は前腔穹窿部より益々増大せる子宮體を觸るべし而して乳房は益々膨大して緊實となり之を壓搾すれば水様の初乳を漏らし、乳暈及び白條線は暗褐色となる

妊娠第四ヶ月(第十六週)の終りに於ては子宮は兒頭大となり骨盤腔を充たし子宮底は半球形をなして耻骨縫際上に現はれ腹壁より之を觸知し得べく子宮腔部は益々高位を占め屢々少しく左方に向へり此時に於て最も注意して下腹部を聽診するときは間々子宮雜音胎動音を聽取し妊婦を仰臥せしむるに下腹は稍膨隆し白條線乳房の着色著し

妊娠第四ヶ月以上に於ては通常腹壁上より子宮を觸れ殊に妊娠子宮の硬度は一種特異にして甚だ柔軟丁度飴を摘むの感あるを以て多少の熟練を積まば容易に診斷し得べし然れ

圖二十九第



太き線は子宮底の位置
上方の細き線は臍の位置
下方の細き線は子宮底の位置を示す
数字は何れも妊娠の時期を月にて示す

ごも腹壁脂肪に富むか若しくは初妊婦の如く腹壁の緊張せる場合に於ては妊婦第五六ヶ月と雖も子宮を觸れ或は子宮底の高さを定むること甚だ困難なり故に斯の如く妊娠の初期に於て其妊娠あるや否やを判定し若しくは其月數を定め

妊娠各月に於ける子宮底及子宮腔部の位置を示す

んご思は、常に産科醫に托する方最安全あり産科醫は斯の如き場合に於て若し腹壁上より觸診し得ざるか或は妊娠四ヶ月以前にして子宮尙ほ骨盤内に存する時期に於ても常に内診に由つて妊娠月を決定すべしかゝる妊娠を鑑定するが爲に行ふべき内診は産婆の力の到底及ぶ處にあらざるを忘るべからず何とあれば熟練ある産科醫も時として之を誤る事あればあり

妊娠第五ヶ月(第二十週)の終りに於ては子宮腔部は益々高く子宮は全體球形を呈し子宮底は臍と耻骨縫際の中央にあり聽診に由つて子宮雑音胎動音を聴取し且つ初めて胎兒心音を聴取し得べく注意深き婦人にありては胎兒の運動を自覺す可し

妊娠第六ヶ月(第二十四週)の終りに於ては子宮腔部は益々高く經産婦にありては時として此時期よりして外子宮口内に少しく指尖を挿入し得ることあり子宮は球形にして其底部は臍窩に達し外診に由つて胎動を觸知し胎兒心音は明瞭に聴取するを得べし

妊娠第七ヶ月(第二十八週)の終りに於ては腔穹窿部より胎兒の先進部を觸知するに至るも手壓に由て容易に移動す子宮は漸次卵圓形となり子宮底は臍上二三指横徑に達し臍窩は消失を初む

妊娠第八ヶ月(第三十二週)の終りに於ては初妊婦の子宮腔部は短縮を始め胎兒先進部は腔穹窿部を隔て、明らかに觸知し得べく且つ幾分骨盤内に進入を始め移動し易からず經産

婦にありては之に反して極めて移動し易し子宮は全く卵圓形となり子宮底は臍と胸骨の下端ある劍狀突起との中央に達す
 妊娠第九ヶ月(第三十六週)の終りに於ては初妊婦の子宮腔部は益々短縮し子宮腔部と腔穹窿部とは殆んど同じ硬さとなり子宮口は尙ほ閉鎖するも經産婦に在ては外子宮口は少しく開大して時としては滑澤ある卵膜を觸れ得ることあり而して子宮腔部は甚だ高く左後方に在り腔穹窿部を隔て、胎兒の先進部を觸れ得べく初妊婦にありては已に固定して移動せず
 雖も經産婦にありては尙ほ未だ移動し子宮底は最も高くして心窩及び肋骨下縁に達して少しく右方に傾き臍窩は平坦あるか或は少しく膨隆し妊婦は腹部の膨大甚しきを以て呼吸困難を感ず

○初妊婦へ何故ニ見取
 早ク下降スルヤ

妊娠第十ヶ月(第三十七週より第四十週の間)に於ては子宮腔部は再び下降し同時に後方に向ひ初妊婦にありては全く消失す
 雖も經産婦にありては消失著しからず子宮口は初妊婦にありては菲薄なる邊緣を有し開かざれども經産婦に在つては邊緣尙厚くして開大し指頭を挿入し得べく時としては卵膜を觸れ得べし胎兒先進部は初妊婦にては全く骨盤入口に固定せらるゝ
 雖も經産婦に於ては妊娠の末週に於て若しくは分娩の始めに於て固定す子宮底は此妊娠月に至れば再び下降して八ヶ月の高さと等しく心窩は弛緩して妊婦は安らかに呼吸を營み得べく經産婦に在ては子宮底は強く前方に傾くを以て腹壁は前方に突隆す而して臍窩は胞狀に膨隆す
 以上妊娠各月に於ける徴候中最も必要なるは子宮底の高さ並

各月に於ける児頭の固さと大さとは盛んに研究すべし

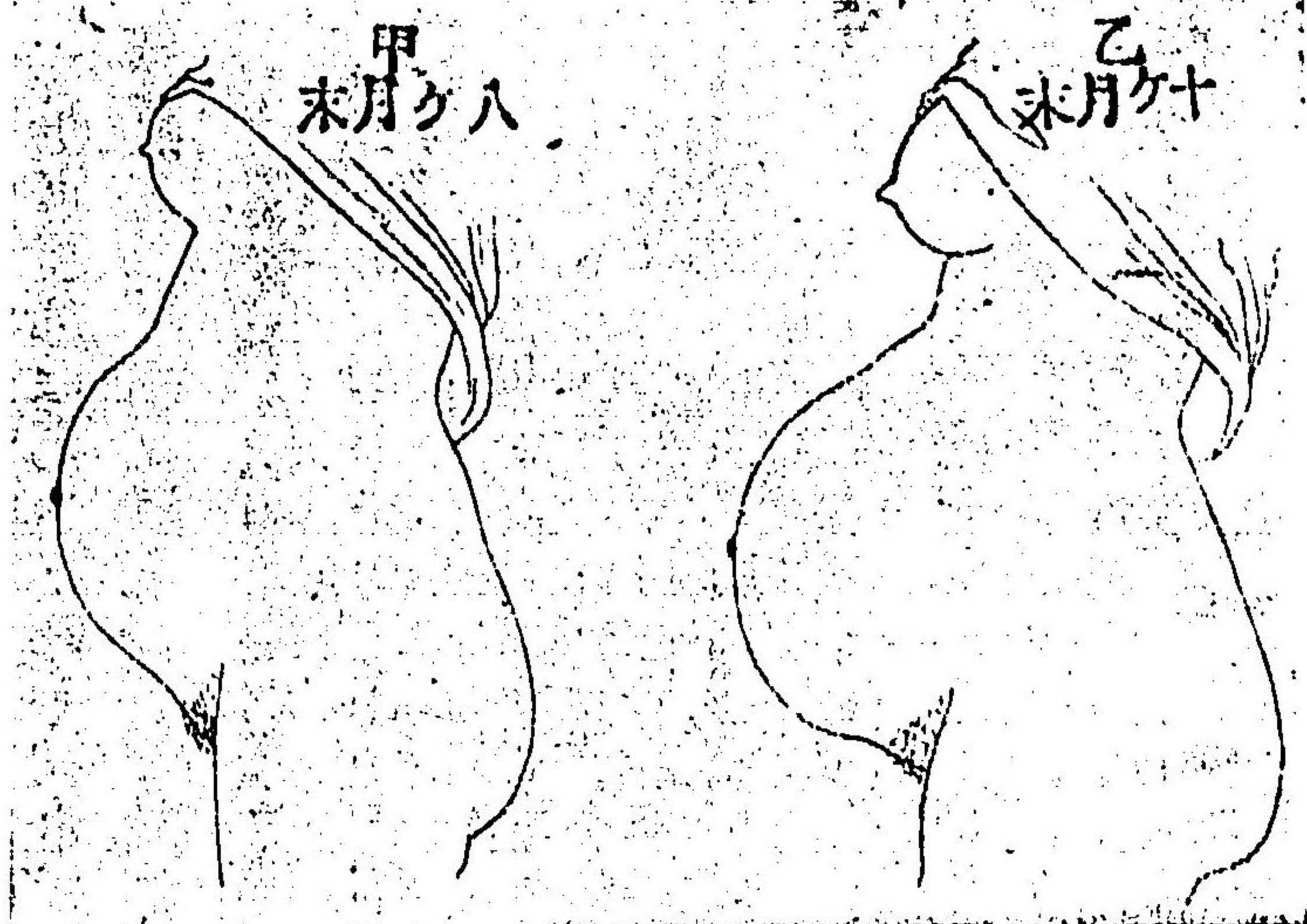
に子宮腔部の有様にして胎児の心音及び胎動音聴取によりては妊娠前後の半期を別つべく胎児先進部の固定は妊娠末週を示すべきが故に共に甚だ必要なり加之産婆若し各月胎児の大きさ及び硬度を觸知することに熟練せば以上諸種の徴候と相待つて妊娠月鑑定を助くること甚だ大あり即ち胎児身體中最も大にして觸れ易きは頭部なるが故に産婆は妊婦の診察に當つて常に妊娠第何ヶ月の児頭の大きさ及び硬度は如何程なるやを記憶し練習を積まば少くとも一ヶ月の差は容易に區別するを得るに至るべし

○妊娠八ヶ月末と十ヶ月末との鑑別

ト子宮及び腹部ノ差異ヲ示セ

妊娠八ヶ月と十ヶ月末との子宮底の高さ同一なり。雖も産婆は左に記する徴候に由つて鑑別をなし得べし
妊娠八ヶ月の末に在ては心窩緊張し臍窩は平坦にして児頭は

第三十九圖



妊娠八ヶ月末と十ヶ月末に於ける腹部の形状を示す

骨盤入口に固定せず且つ尙ほ小にして十ヶ月末に於けるが如く硬からず而して子宮腔部の位置高し妊娠十ヶ月末に在ては心窩弛緩し腹壁は前方に突隆し(殊に經産婦に於て然り)臍窩は胎状に膨隆し児頭は骨盤入口に固定し大にして甚

だ硬く子宮腔部は再び下降し初妊婦に在つては消失す

第五十八節 妊娠と他病との鑑別

妊娠の確徴即ち胎兒心音、胎動、臍帶雜音、胎兒部分の觸知等其一つにても確かなるときは素より妊娠に相違なし。雖も婦人の疾病により往々月經閉止を來し初期妊娠と誤まることあり且つ經閉に伴ふに腹部膨滿を以てするときは妊娠五六ヶ月との區別甚だ困難なる事あり故に産婆は疑はしき場合には常に産科醫の診察を乞ふべし。雖妊娠と似たる種々の疾病ある事を知り居らば診斷は輕率ならざるに至るべく従つて失敗を招くこと少かるべし

妊娠に似て非なるもの

(一) 月經閉止

月經閉止は婦人授乳期間若しくは生殖器の疾患ある婦人或は貧血、脂肪過多、慢性重症疾患、例之ば肺結核、結核性腹膜炎等に來り或は重症疾患の恢復期にて未だ衰弱せる婦人などに來りて妊娠の極く初期と誤り易き場合あるべし。雖産婆が此の如き場合に遭遇することは稀れなるべくよし此の如き場合に出遭も産婆は之れを産科醫に托すること至當にして産婆の學術を以てしては鑑別殆んど不可能なるべし

(二) 月經閉止と腹部膨滿を伴ふもの

(イ) 卵巢腫瘤、往々月經閉止を來す事あり然れども凡ての妊娠徴候を缺き腹部は膨滿するも膨大の度月經閉止の月數即ち

妊娠月に相當せず而して常に妊娠子宮より硬く多くは波動を呈し時としては凸凹不平にして甚だしく硬し若し注意して雙合診を施さば子宮は尋常の大きにて腫瘍は子宮の外にあるを知るべし

(ロ)腹水、腹水とは諸種の疾病により腹腔内に水様液の溜溜するを云ふ此の場合に於ては腹部の形状多くは扁平にして左右に廣く腹壁は妊娠時の如く突隆せず且つ凡ての妊娠の徴候を缺く

(ハ)想像妊娠、脂肪過多若しくは腸の疾病にて腹部の膨満を來し且つ月經閉止することあり此の如き場合に極めて妊娠を希望する婦人あるときは腸の運動を胎動と誤り腹部の膨大を妊娠より來れるものと誤信し所謂想像妊娠なるものを惹起す

想像妊娠は極めて
妊娠をいやがる人
にも見る事あり

欠

MISSING

殊に夜間就眠前の飲食を慎ましめ悪心、嘔吐等あるものは消化し易き粥、牛乳、卵の如き流動物を少量づゝ度々に與へ早朝空腹時に嘔吐するものには以上の流動食を床の中にて與へ暫時安靜に伏さしめ然る後起床せしむるを良とす

(四)清潔、全身殊に外陰部は常に清潔にせざる可からず故に妊娠末期に至れば毎日一回づゝ入浴し外陰部は毎日二三回微温湯を以て洗ひ粘液等に由つて汚れざる様心懸けしむ可し然れ共入浴後感冒せざる様注意せしめ脚浴、腰湯は妊娠に害あるを以て禁ずるを良とす又々肌着及敷布等は屢々清潔あるものと交換し若し多量の白帶下ある婦人に在ては醫治を乞ひ腫洗滌を受けしめ民間に用ゆる忍び綿をば嚴禁すべし之れ等は平時にありても有害にして殊に妊婦の腔内にありては速か

入浴の際腔内に手指を挿入して洗ふが如き事をなすなかれ

に腐敗し腐敗物は速かに吸収せられ恐るべき熱性病を惹起するに至るべし

(五)衣服、衣服は氣候に従つて適當ならしめ軽くして温く窮屈ならざるものを撰び常に清潔に保たしむべし而して婦人の普通に用ゆる巾廣き帯は妊娠初期に於ては結ぶも可ありと雖も後半期に至りては成るべく用ゐざるを良しと殊に固く結ぶが如きは最も害あり即ち總て腹部及乳房を緊迫するが如き被服は用ゐざるを良しとす腹帯は腹部の弛緩を防ぎ子宮及び胎兒の位置を固定し且つ妊婦の運動を容易ならしめ腹部を温かに保つる益あるが故に妊娠五ヶ月頃より用ゆるを可し然れ共古來用ひ來りし如き幅狭きものはよろしからずフランチル又は木綿等にて幅廣きものを用ひ胃部より下腹部に至るまで輕

○妊婦ニ腹帶ヲ施スベキヤ及ビ其利害ヲ記
腹帶は通常妊娠五ヶ月の「いぬ」の日に始めて行ふ
「いぬ」のお産は甚だ容易なり

妻妊娠せば主人は別室に起臥すべし

く纏絡するを良しとす

(六)交接、は粗暴ならず過度ならざる様せしむべし妊娠初期及末期に於ては之れが爲めに流早産を來す恐れあり殊に妊娠末期に至れば之れが爲めに微菌を腔内に輸入し分娩産褥に於ける障害を來す事あるべし

(七)兩便の通利、大便は妊娠中秘結し易きを以てかゝるべきは適當の運動をなさしめ毎朝空腹時に一碗の微温水若しくは之れに重曹の少量を加へ飲用せしめ新鮮にして能く熟したる果物又は煮たる果物を適度に食せしむべし若し尙ほ便秘するときは石鹼水又は偏利設林の浣腸を行ひ尙ほ便通なきときは醫師の診察を乞はしむべし妊婦に下劑を與ふるには慎重の注意を要するが故に産婆自ら下劑を投與するなどの事決して

あるべからず尿の排泄に就ては其量の多少に注意し尿意を催さば長く忍ばしめざる様すべし

(八)乳房 初妊婦に在つては乳頭短くして哺乳に用立ざる事あるが故に妊娠中は是れに向つて準備するの必要あり即ち乳頭短く或は平坦なるか或は凹めるときは毎日數回指を以て之を摘み出すを良しす而して乳房は常に温暖に保たしめ衣服にて緊迫せざる様外傷を受けざる様不潔ならざる様注意し若し皮膚薄弱なる婦人に在りては妊娠七八ヶ月の頃より日々乳頭及び乳暈の部を酒精若しくは冷水を以て洗拭せしむべし
以上の如く妊娠の末期に至らば専ら精神及び身體の安静を守らしめ凡て分娩産褥中に要する物品を整へしめ置くべし

分娩の種類

妊娠七ヶ月以前の出産を流産と云ひ七ヶ月後十ヶ月の終りに至らざる出産を早産と云ふ正規産は一に順産と云ふ

○分娩ノ種類機能ハ如何
何分機機能ハ産出力ニ由テ變ズル
（分機機能ハ産出力ニ由テ變ズル）

正規分娩

第六章 正規分娩及び其取扱法

第六十一節 正規分娩

分娩 一名出産とは胎兒が其附屬物即ち胎盤、卵膜、臍帶等と共に子宮を離れ母體外に排出（娩出）せらるゝを云ふ而して胎兒は妊娠中諸種の原因により母體外に娩出せられ得べく（流産若しくは早産）又た正規の妊娠經過後に於ても娩出せられ得べし（晩産）

正規分娩 一名正規産とは妊娠十ヶ月に於て充分成熟せる胎兒が少しの障りもなく自然力により母體外に娩出せらるゝを云ふ言ひ換ゆれば成熟せる胎兒が正規の位置を取り異常なき産

○正規分娩異常分娩ノ區別並ニ其一例ヲ示セ

道を産出力と稱する自然の力にて通過するを云ふ、故に胎児、産道、産出力、の三者の中一つにても異常あらば正規産を遂ぐる事能はざる可し

第六十二節 分娩時に於ける胎児

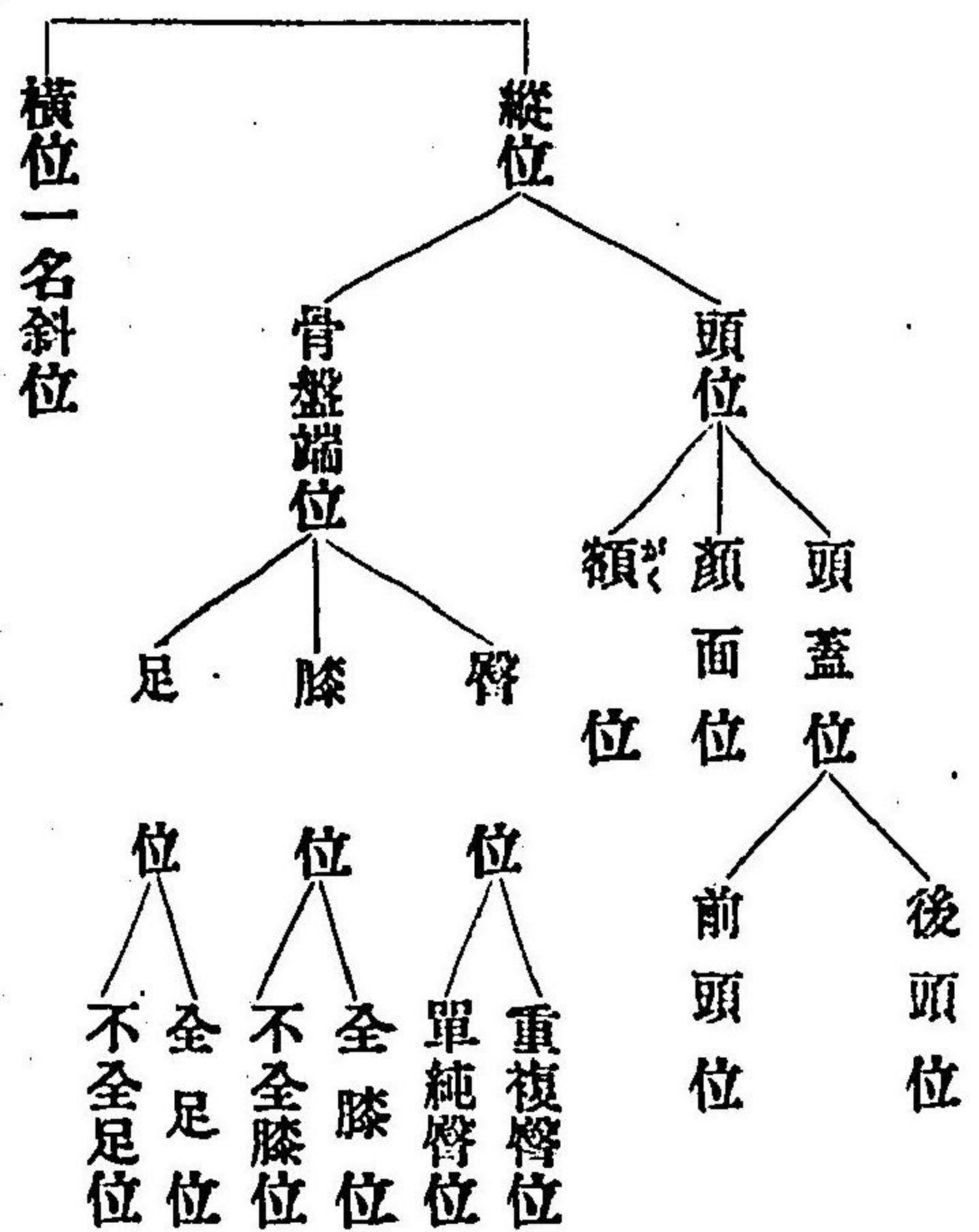
○比較的大ナル小兒頭骨が比較的小ナル産道ヲ通過シ得ル理由如何

○分娩時に於ケル胎児ノ變化如何

○分娩中胎児ノ取ルべき位置體勢ヲ記セヨ

成熟胎児の頭蓋骨は分娩に際し幾分相重り之れが爲めに幾分か兒頭全體の大きさを減じ得べきものなる事は既に第四十八節に述べたるが如し而して一般胎児の身體は甚だ柔軟なるのみならず其頸部の如きは脊椎骨との關節構造上よりして運動甚だ容易なるが故に産道通過の際兒頭は屈伸回轉等をなし脊柱も亦た軀幹娩出の際著しく屈曲し以て分娩を容易ならしむ然れども分娩に際しては又た種々ある體勢及び體位をこり従つ

て種々の経過を取るに至るへし今其分娩時に於ける胎児の位置を區別する時は左表の如し



○胎児位置ノ種類ヲ説明シ且ツ自然分娩ノト否ヲ示シテノ種類ヲ區別セヨ

○各體位ニ於ケル胎児前部ヲ示セ

以上諸種の位置に於て總て第一、第二體向及び第一、第二の分類を分つべき事は第五十一節に述べたるが如くにして昔は頭蓋

頭蓋位の區別

位を第一、第二、第三、第四、に分ちたれ共現今は第一及び第二頭蓋位を多くは第一第二後頭位と云ひ（即ち第一體向第一分類及び第二體向第一分類）第三、第四頭蓋位を第二及び第一前頭位と云ふ（第二體向の第二分類及び第一體向第二分類）而して是れ等の位置の中正規なるは獨り後頭位のみにして他は皆な異常の體位若くは體勢を取るが故に多くは分娩の困難を來すべし然れ共常に人力を借らざれば出産し能はずと云ふにはあらず

第六十三節 産道

産道の區別

産道とは分娩の際胎兒及び後産（娩隨）の通路にして骨部産道及び軟部産道に區別す骨部産道（一名硬部産道）とは骨質より

○産出力トハ何ゾ
○分娩力及ビ之レニ抗
拒スルモノハ何ゾ

○子宮ノ收縮ハ何ト稱
スルヤ何レノ部分最
モ劇シキヤ

○胎兒ノ出産ハ如何ナ
ル力ニ由ルヤ其主要
ヲ示セ

おれる骨盤管の總稱にして軟部産道とは骨部産道の内面を被包する軟部分殊に子宮頸管、膣、及び外陰部を云ひ其方向は骨盤誘導線の方向に一致し胎兒産出の際多少の抗抵をあすものとす

第六十四節 産出力一名娩出力

産出力とは産道の抗抵に打勝つて胎兒及び後産を母體外に排出する處の力にして陣痛、腹壓、等之れに屬し膣の收縮も亦た之にあづかる

一、陣痛、とは不隨意に起り間歇性に反覆する子宮の收縮にして此際常に下腹部に起り薦骨部及び大腿に放散する疼痛を伴ふが故に此名あり而して陣痛の始まる時は子宮は收縮して

○出産ハ如何ナル働キ
ニ由ルナリ其理ヲ記ル
セ

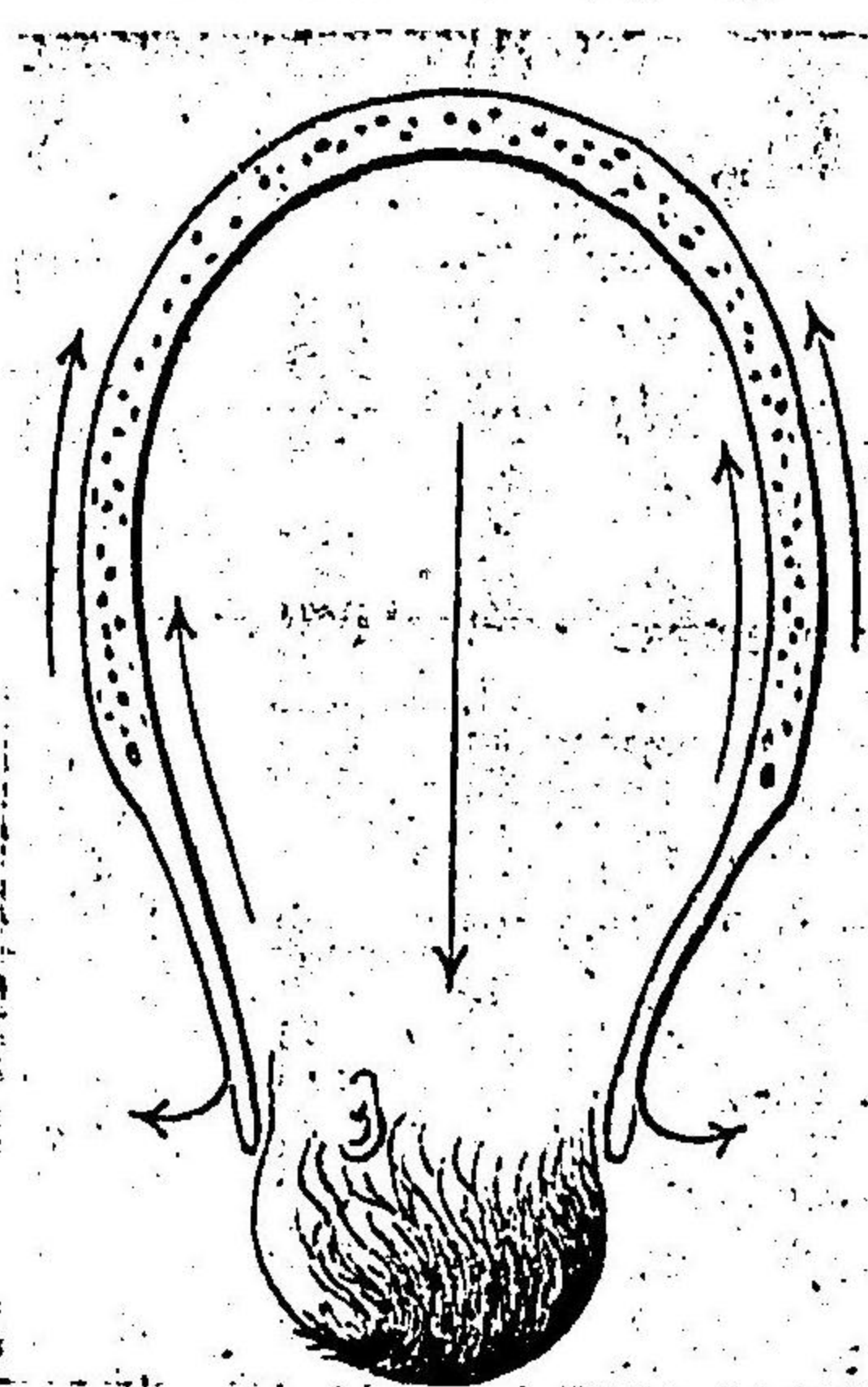
一 陣痛は進行期極
期退行期の三期よ
りなる

○正規分娩ノ陣痛状況

子宮の収縮は腹壁
上より診する事を得

漸次硬固となり球形を呈し疼痛も亦た之に伴ふて漸次増進するに至る之を陣痛の進行期と名づけ子宮収縮其極度に達すれば子宮は非常に硬くして球形を呈し且つ前方に突出し疼痛も亦た其極度に達す之を陣痛の極期と名づく此の期を過ぐれば子宮は漸次弛緩し疼痛も亦た漸次消退す之を陣痛の退行期と稱す此の如き陣痛は通常暫時間を隔て再び發作するものにして斯の如く陣痛の發作する時期を陣痛發作時と名づけ其休

圖 四 十 九 第



子宮は子宮口より子宮外に出る
子宮口より子宮外に出る
子宮口より子宮外に出る

陣痛の作用を矢の方向を以て示す

止する間を陣痛間歇時と云ふ此陣痛の發作せるや否やは手を腹壁上に抵て、檢する時は子宮の漸次硬固となり且つ前方に突出するにより明らかに證明するを得べし而して陣痛發作時には母體の脈搏は増加し間歇時には平常に復すべしと雖も胎兒心音は全く之に反し陣痛時には減少し間歇時には通常に復すべし

○陣痛ト病的腹痛トノ
區別
(病的腹痛は子宮収縮
せず)

子宮収縮する時は
胎盤血行障礙せら
るゝにより胎兒心
音に變化を來たす

陣痛の持續

一度陣痛發作し其休止する迄の持續は僅かに一分時間内外にして其強度は分娩の進むに従ひて増劇し且つ頻數もあり疼痛も亦た益々強劇となり加之産婦は便意尿意を催し不隨意の努責をなし非常に興奮し顔面潮紅し汗を流し或は戰慄し時として嘔吐を催す事さへあり而して陣痛は常に不隨意に起るを以て素より隨意に加減する事能はざるものあり

陣痛の胎兒及び羊
水に及ぼす作用

○各分挽期ニ於ケル陣
痛ノ状況或ニ之ニ
テ發スル子宮ノ變
化ヲ記セ

陣痛の區別(種類)

陣痛即ち子宮の收縮は羊水及び胎兒を常に子宮口に向て驅逐し、傍ら子宮下部を上方に牽引し以て子宮口及び頸管の擴張を營むものこそ是れ子宮體及び底部の筋層は子宮下部の筋層より強厚なるが故に其收縮する力も強く従つて其收縮の際子宮下部を上方に牽引するに至るあり而して子宮口開き胎兒を娩出するに當ては常に不隨意の腹壓起り陣痛を助けて産出を容易ならしむ

陣痛は分娩の經過に従つて前驅陣痛、開口期陣痛、産出期陣痛、後産期陣痛、後陣痛等の稱あり

二、腹壓、こは呼吸を止め手足を固定し力を籠め恰かも大便を排出する時の如く腹筋及び横隔膜を收縮せしめ腹腔内容物即ち胎兒及び羊水を下方に壓出するの作用にして隨意に之を

欠

MISSING

○分娩開口期ニ於ケル
子宮ノ變化

胎胞の成立

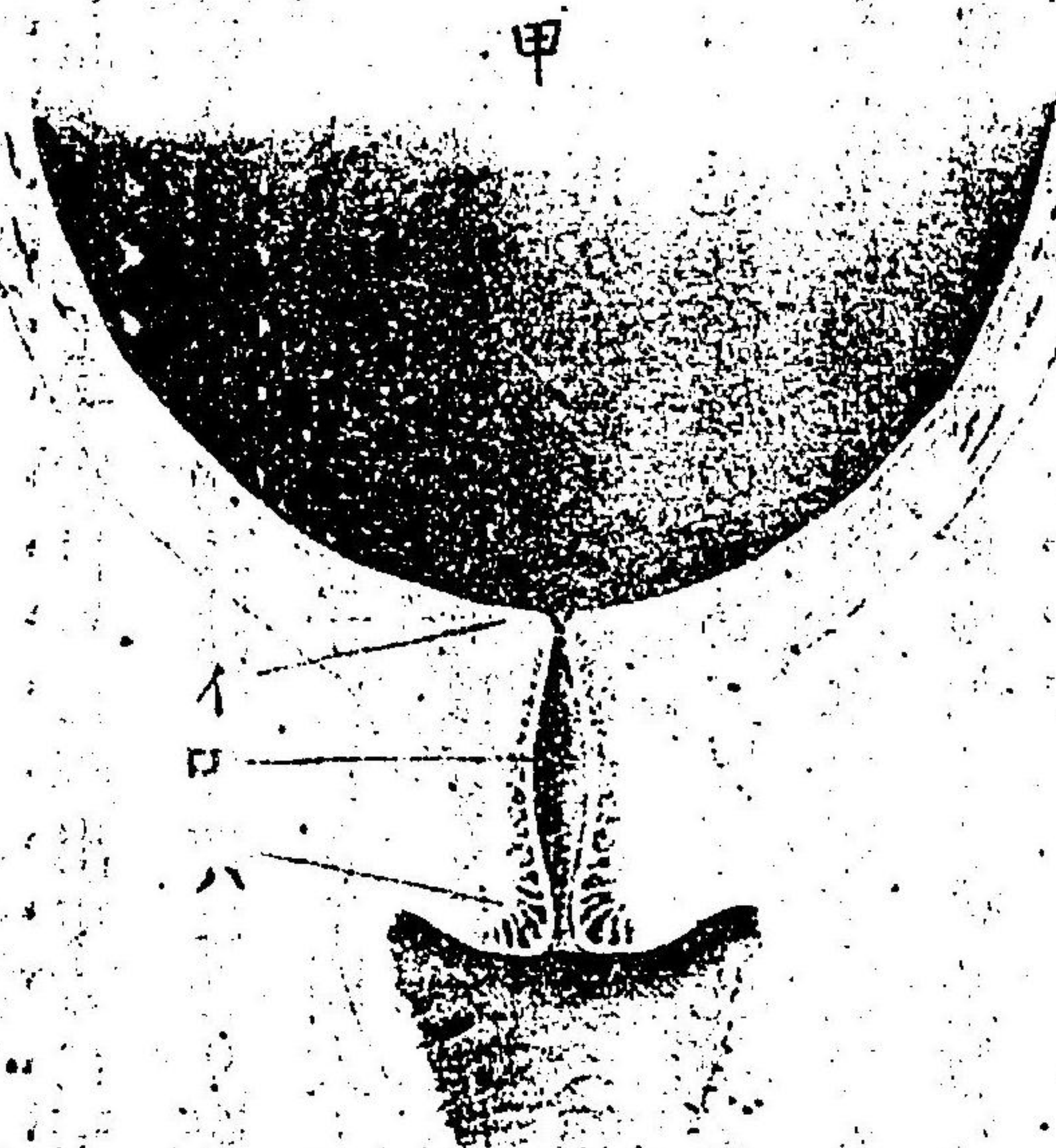
○分娩時ニ於ケル卵膜
ノ變化並ニ破水
如何

前羊水

られ剝離したる卵膜の下部を緊張せしむるが爲めに卵膜は子宮頸管内に嵌入して其擴張を助け羊水を充たせる卵膜は遂に半球状をなして子宮口外に膨出するに至る是を胎胞と云ふ此胎胞は其の發生當初は陣痛發作により緊張し陣痛止めば弛緩すれ共陣痛強劇となり子宮口全く開大して殆んど膈と一管を成し子宮口縁を觸るゝ能はざるに至れば陣痛間歇時と雖も緊張して再び弛緩せざるに至るべし(即ち胎胞は將に破裂せんぞす)是れ陣痛の爲めに胎兒の先進部が子宮下部に嵌入固定するが故に胎胞内の羊水は陣痛止むも再び子宮腔内に戻る事能はざるに由る此の如くして胎胞は終に破裂して其内に含める前羊水一名第一羊水を漏出するに至る是を破水と云ふ而して破水後は通常暫く陣痛の間歇を來すべし

○卵膜トハ如何其膜ノ破裂スル原因及ビ破如何ノ最良ナル時期ハ

第九十圖 初産婦の子宮頸管漸次擴張する様を示す



分娩の初期に於ける初産婦の子宮頸管

(イ) 子宮内口
(ロ) 頸管
(ハ) 子宮外口

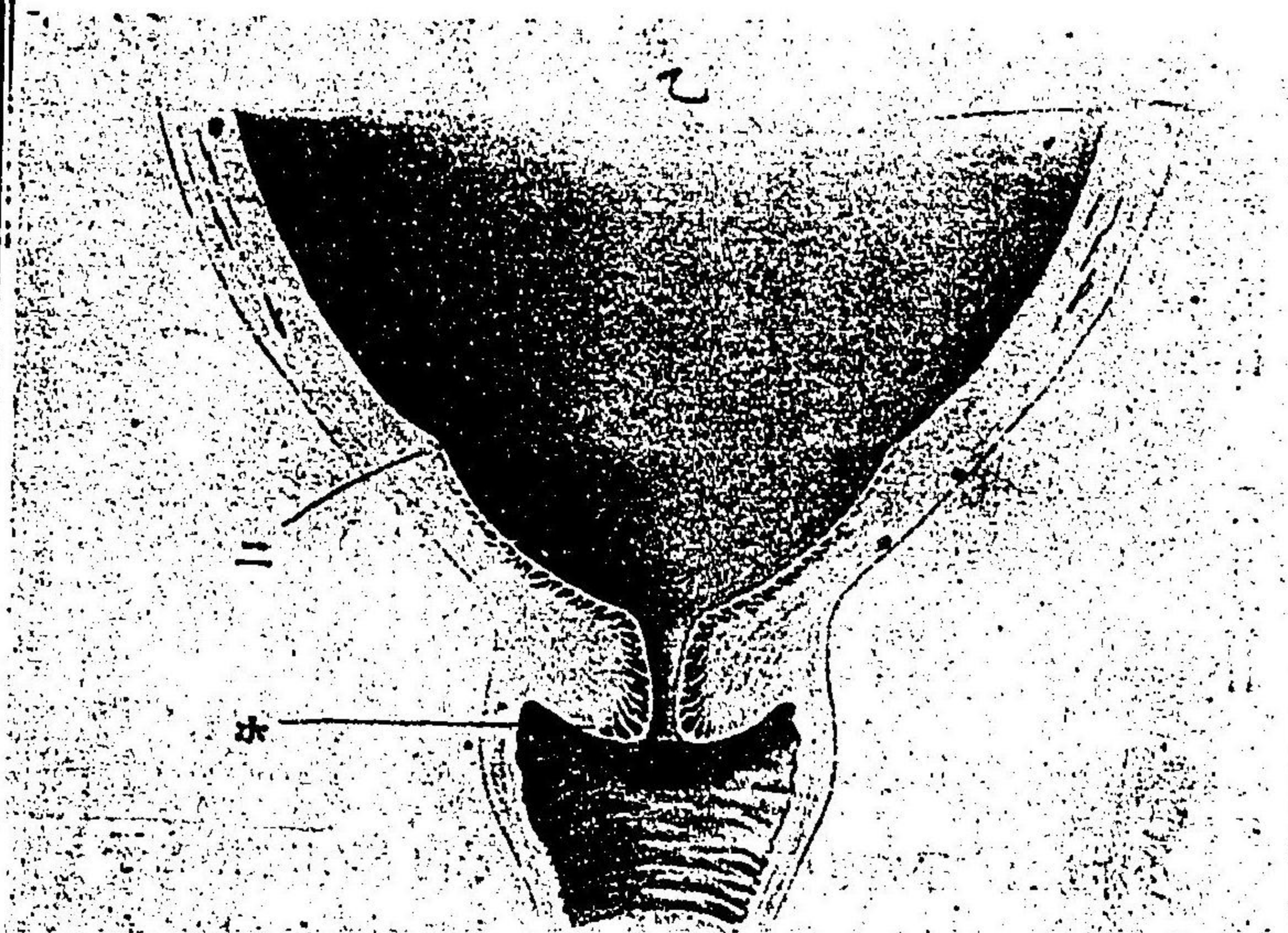
以上によ
て開口期
は終りを
告ぐ然れ
ども開口
期の終り
は前羊水
の流出即
ち破水に
非らずし
て子宮口
の完全な

羊水の早期漏出

正規分娩の経過

○子宮口ノ完全ニ開大シタルトキハ如何ノ廣サニ達スベキナ

第九十圖 同

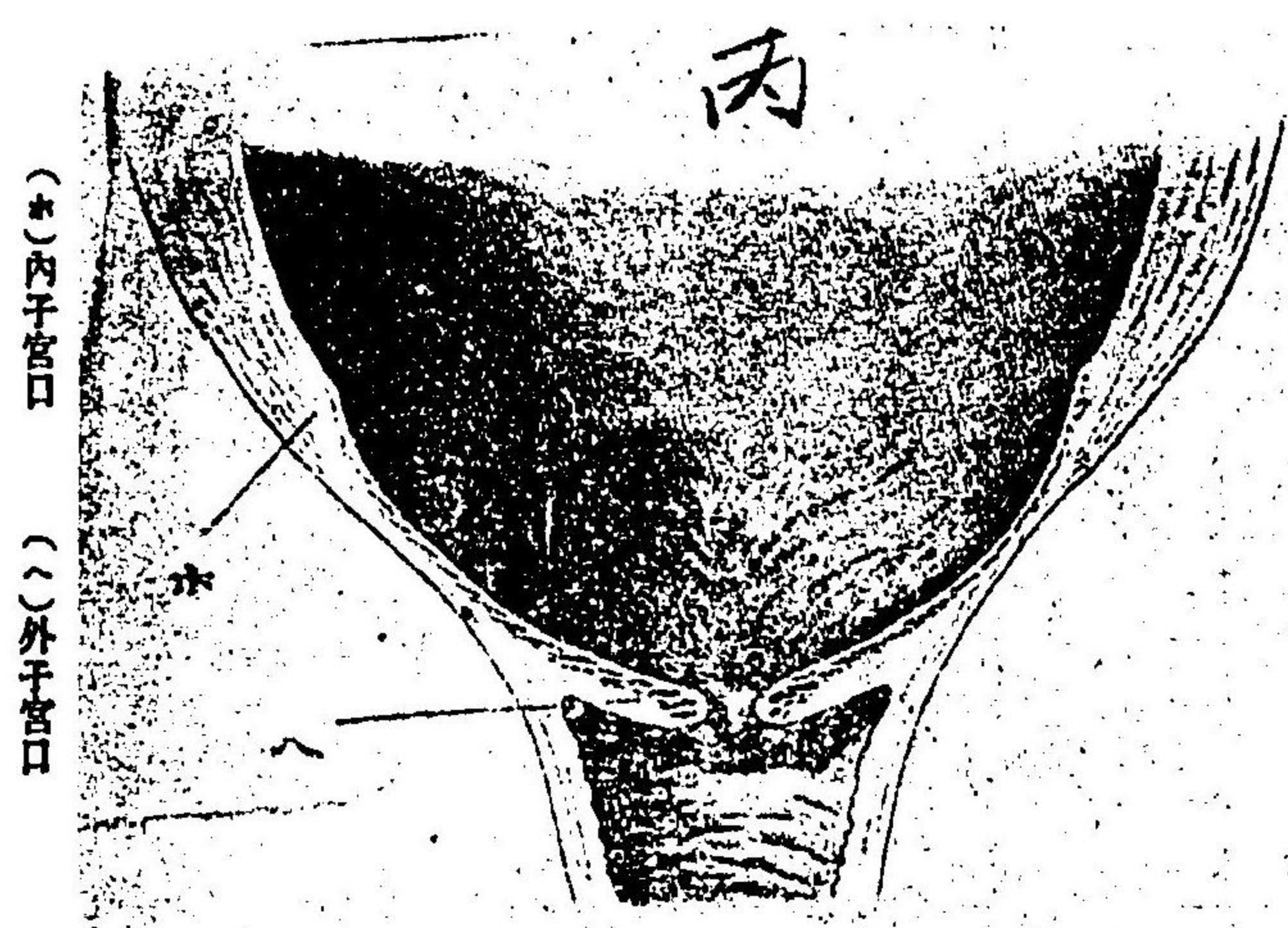


子宮を縮小するに際して子宮内口の開口をたるす

(ニ) 子宮内口
(ホ) 子宮外口

る開大にある
事を忘るべか
らず(子宮口
完全に開大す
る時は其口径
約十仙迷に達
す)而して破
水は多くは子
宮口の殆んど
或は全く開大
せる時に來る
と雖も時

第九十圖



子宮収縮に依り子宮内口全開き外子宮口も亦少
し開く(初産婦に在りては子宮口縁薄し)

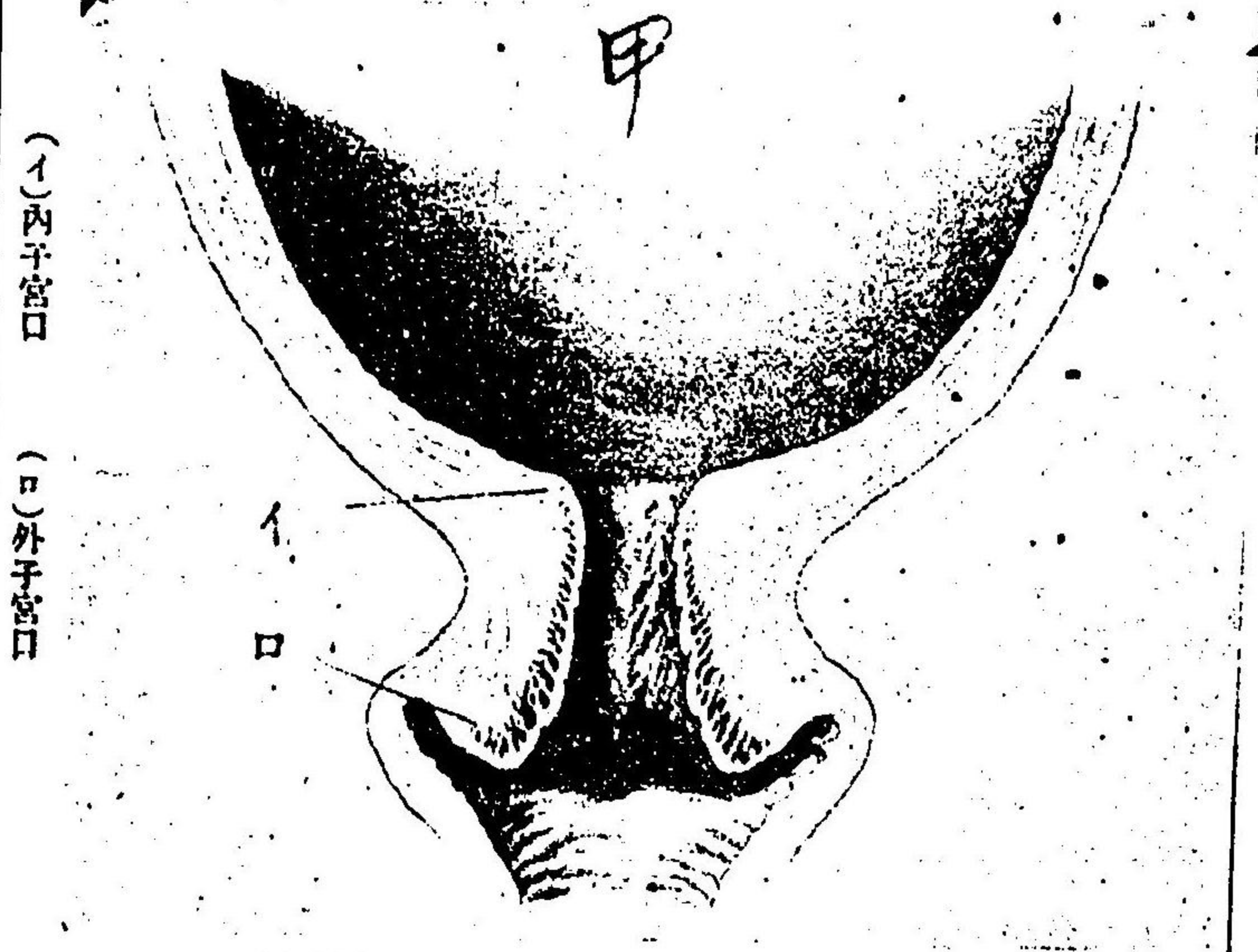
三二四
しては開口期の初めに於てする事あり又た時としては遅く稀れには破水せずして胎児は卵膜を被むりたるまま産出する事あり分娩第二期即ち産出期、子宮口の全き開大より胎児の全く産出する迄を云ふ此期に於

○娩出期ノ状況ヲ示セ

○分娩第二期ニ於ケル経過ヲ記セヨ

第九十圖

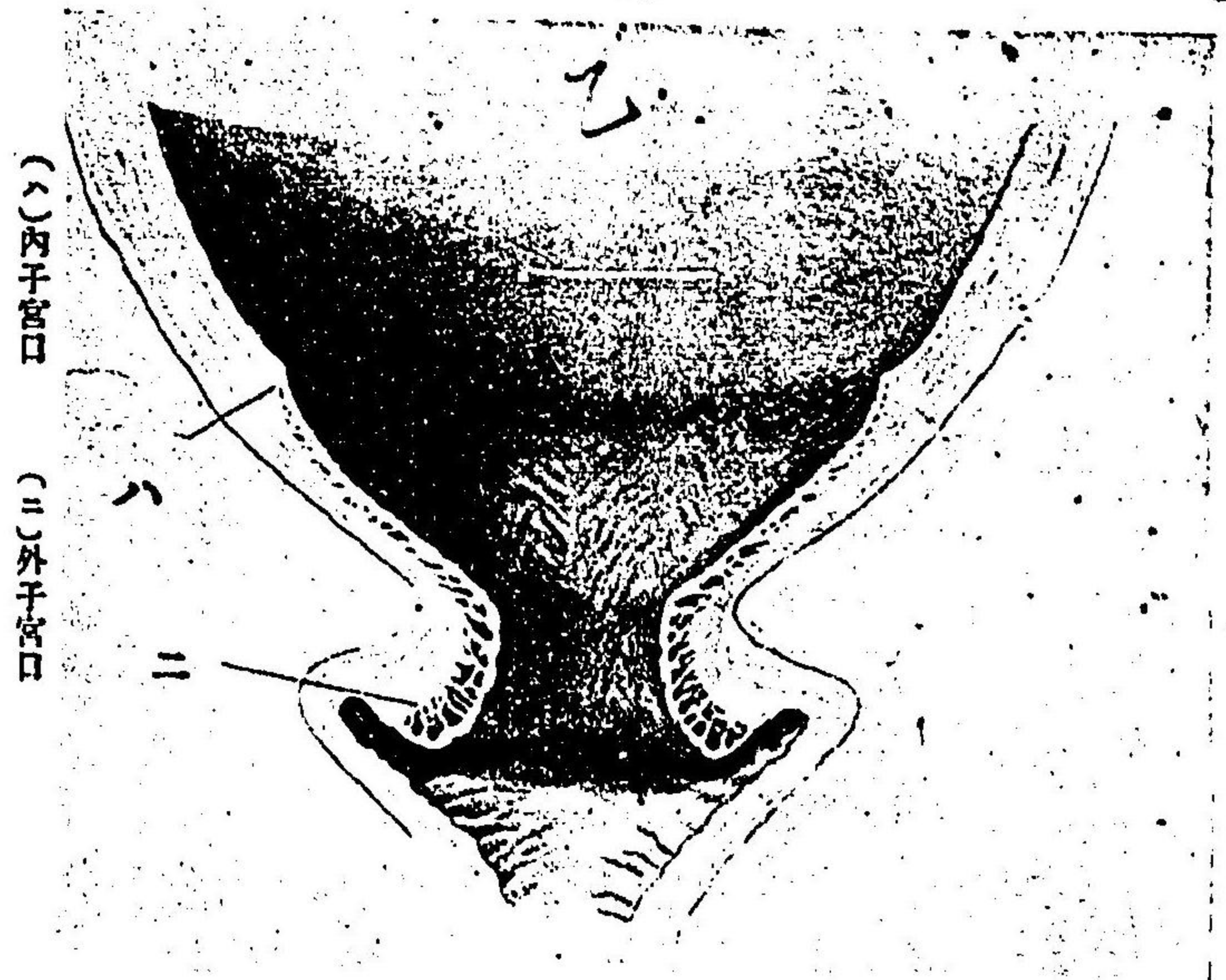
経産婦の子宮頸管漸次擴張の様を示す



分娩初期に於ける経産婦の子宮頸管

三二五
ては陣痛(産出期陣痛)は更に強劇となり間歇時短かく凡そ二三分時毎に起り、腹壓之に加はり胎児の先進部は既に開大せる子宮口を経て漸次膈内に壓出せられ遂に骨盤底部に達す此時

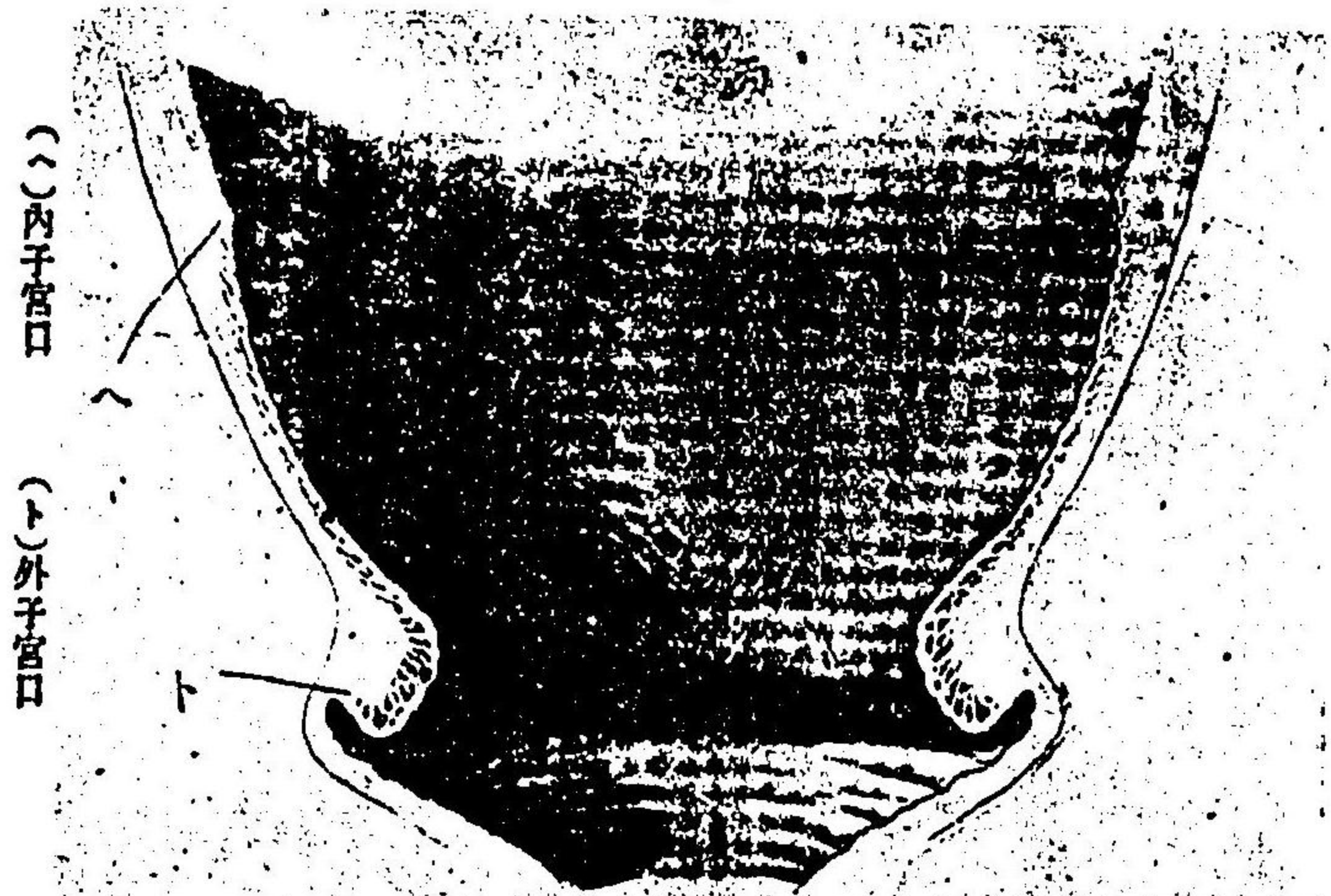
第九十七圖



(ハ)内子宮口
(ニ)外子宮口

子宮内に縮むに際し開きたる子宮口は益々閉鎖し、胎児の頭部は陰裂間に至れば會陰は胎児先進部の爲めに延張せられ所謂分娩痛を伴ふが故に疼痛は益々劇しく産婦は不随意に強き腹壓を營み會陰は益々膨隆し肛門は壓下せられて漸く哆開し胎児の先進部は陰裂間

第九十七圖

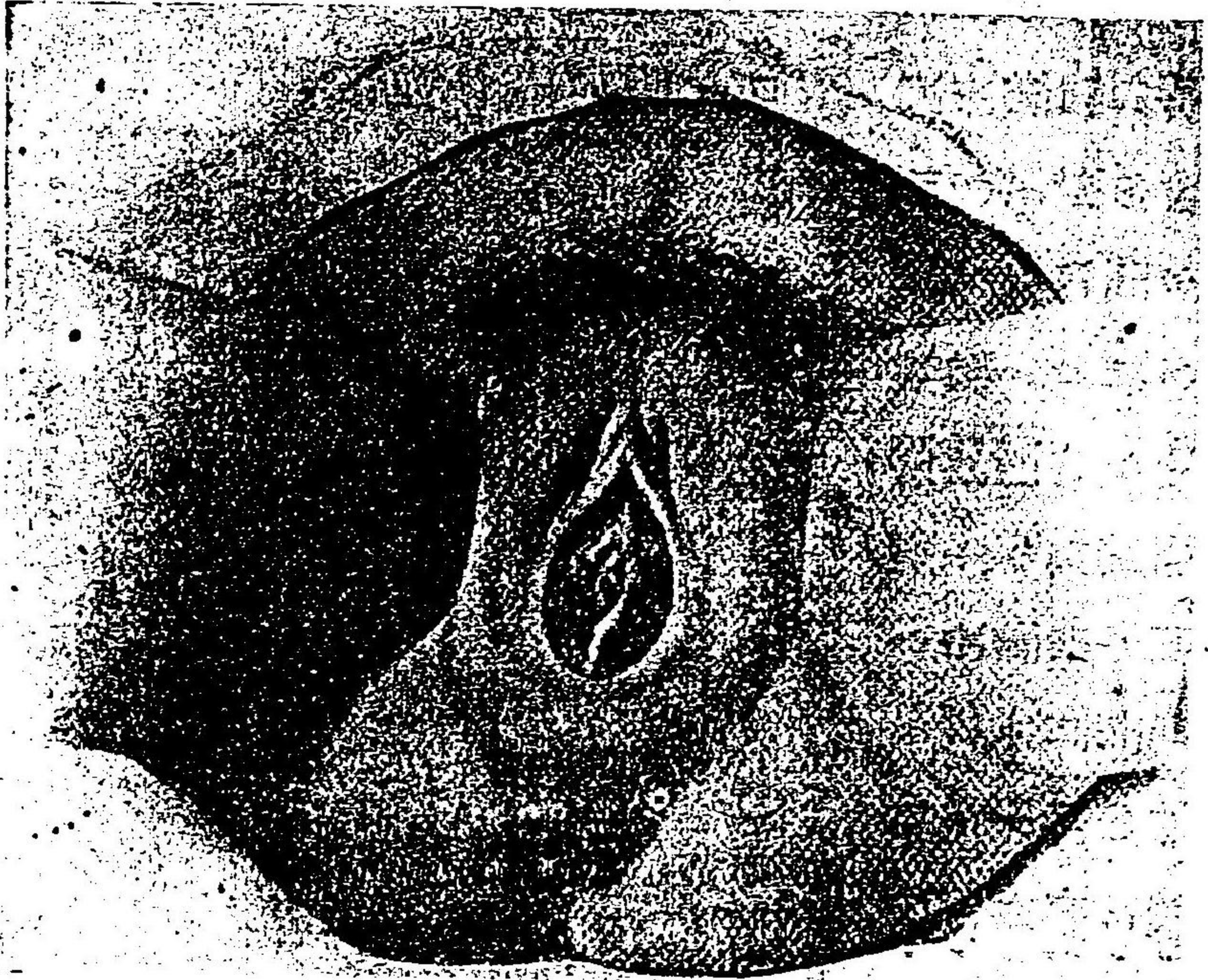


(ハ)内子宮口
(ト)外子宮口

子宮内に縮むに際し開きたる子宮口は益々閉鎖し、胎児の頭部は陰裂間に至れば會陰は胎児先進部の爲めに延張せられ所謂分娩痛を伴ふが故に疼痛は益々劇しく産婦は不随意に強き腹壓を營み會陰は益々膨隆し肛門は壓下せられて漸く哆開し胎児の先進部は陰裂間

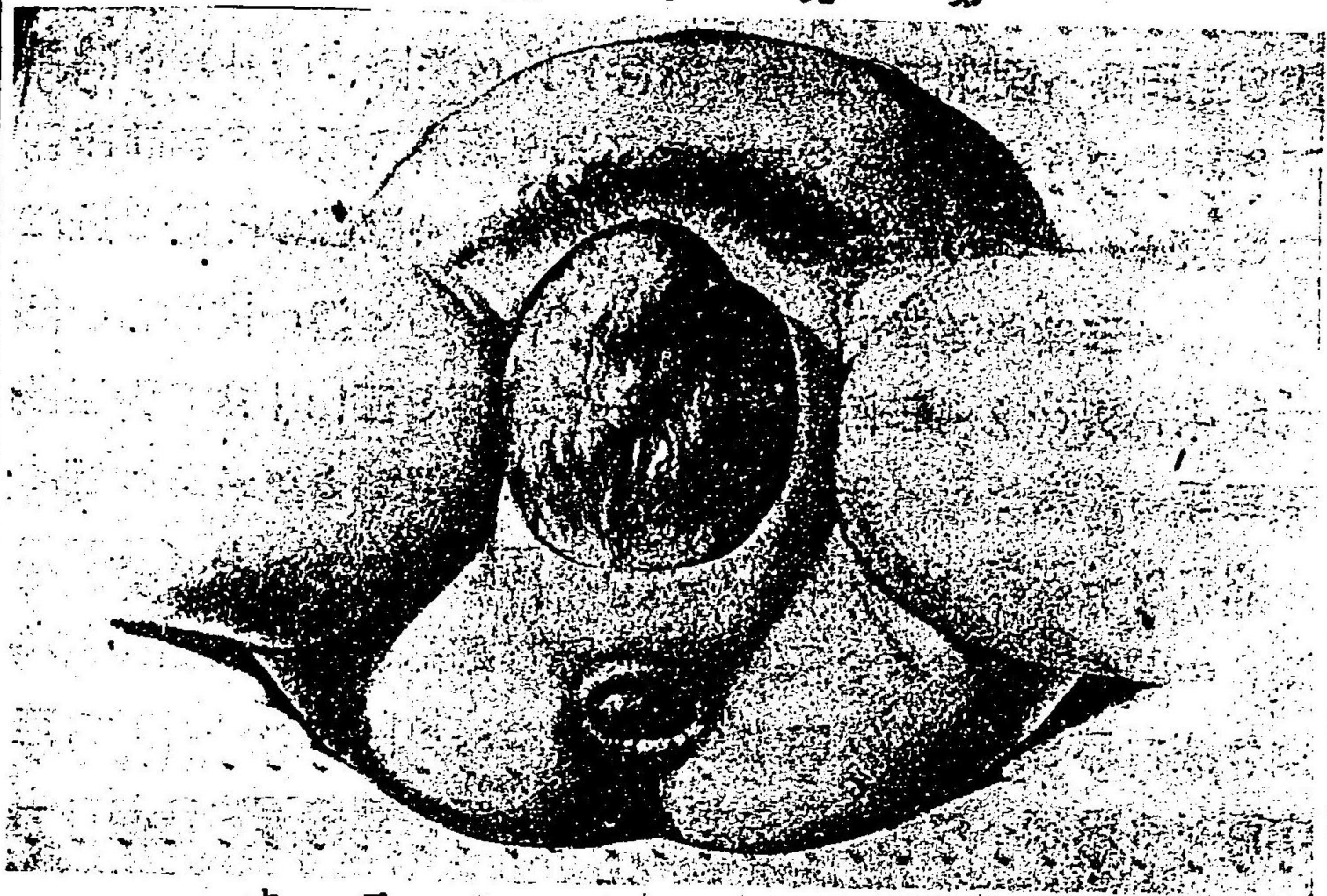
に現はるゝに至る之を排臨と稱す然れども此の時に於ては一旦現はれたる先進部も陣痛腹壓止めば再び退き陰門閉づるが故に外部より見る事を得ざるに至るべし而して斯の如く胎兒先進部は陰裂間に見えかくれする

第九十八圖



兒頭の非臨を示す

第九十九圖



兒頭の發露を示す

兒頭の發露

震戰陣痛

産瘤發生の理由

事暫時の後正規分娩に在ては兒の後頭部は後頭結節迄耻骨弓下に現はれ陣痛間歇時雖も再び退く事なく緊張せる陰唇間に嵌在するに至る之れを兒頭の發露と云ふ此の時に至れば疼痛は極度に達し産婦は屢々聲を揚げ全身の戰慄を現し(震戰陣痛)次で來る陣痛腹壓と共に兒頭は全く娩出するに至る兒頭産出するや肩胛及び軀幹は續て産出するか或は少時間陣痛間歇の後一二回の陣痛によりて全く産出すべし次で子宮は直ちに收縮し残りの羊水即ち後羊水及び血液を流出す

兒頭の産道を通するに當て周圍より壓迫せらるゝ事強ければ先進部の皮膚は皺襞を現はし皮下の血行障礙せられ爲めに腫起を來す之を産瘤と云ふ此者は産道の抗抵抗く産出期の経過愈長きに從がひ著しきものにして産出期の経過甚だ短きも

欠

MISSING

○分娩機轉トハ何ゾ

轉運動を名けて分娩の機械的作用又は分娩機轉と稱す今正規の分娩たる後頭位につき其分娩機轉を論述し以て一般分娩の状態を知るに便からしむ

兒頭の産出

○頭産ノ分娩機轉ヲ示

兒頭の骨盤入口内に進入せんとするや兒頭の直徑線は骨盤入口の直徑線よりも長きが故に兒頭の矢狀縫合は骨盤入口の横徑に一致するか若くは斜徑に近き位置を占め就中後頭の前方に向ふもの多く且つ矢狀縫合も通常少しく後方薦骨岬に近き位置を占むべし而して斯の如き状態を以て兒頭は初産婦に在ては既に妊娠の末週より骨盤入口に入り固定す。雖も經産婦にありては骨盤入口上にありて能く移動し分娩開始と共に

児頭第一回轉を營む理由

第二回轉は骨盤腔内に於て營む

骨盤内に入り左の如き回轉を營む

第一回轉(第一横軸回轉) 児頭が骨盤入口に進入するの際、營むべき回轉にて後頭は下り、頤部は上りて胸部に近づき、児頭は強く屈伏するが如き状態を取るの運動あり、是れ恰かも児頭の横徑を軸として回轉するに等しきが故に横軸回轉とも稱す

此回轉は子宮の收縮力が胎児の軀幹より頭部に傳はり、主として後頭を壓下するに由るのみならず、児頭を取り巻ける子宮筋肉の弾力性壓は児頭を壓して後頭を先進せしむるに由て生ずるものあり、而して此回轉に由て後頭は最も降下し、児頭は最小の周圍を以て産道を通ずるに至るべし

第二回轉(縦軸回轉) 児頭第一回轉を營みつゝ、骨盤内に入れば後頭は漸次前方に廻り、骨盤底部に至れば盆前方に回轉

○分娩ノ第二及び第三ノ機轉トハ如何

第五百五圖



児頭の第二回轉を營むつゝ、矢狀縫合は骨盤の斜徑線と一致し、次で盆回轉して終に骨盤出口の直徑線と一致するに至るべし、此回轉運動を第二回轉又たは児頭の縦徑を軸とせる回轉に

正規分娩に於ける胎兒産道通過の状態即ち分娩機轉

三三三

兒頭第二回轉を營む理由

等しきが故に縦軸回轉云ふ

此回轉は昔より骨盤の諸徑線と兒頭の諸徑線との關係に由て

第二回轉の完成を示す



第四回圖

正規分娩に於ける胎兒産道通過の状態即ち分娩機轉

三三三

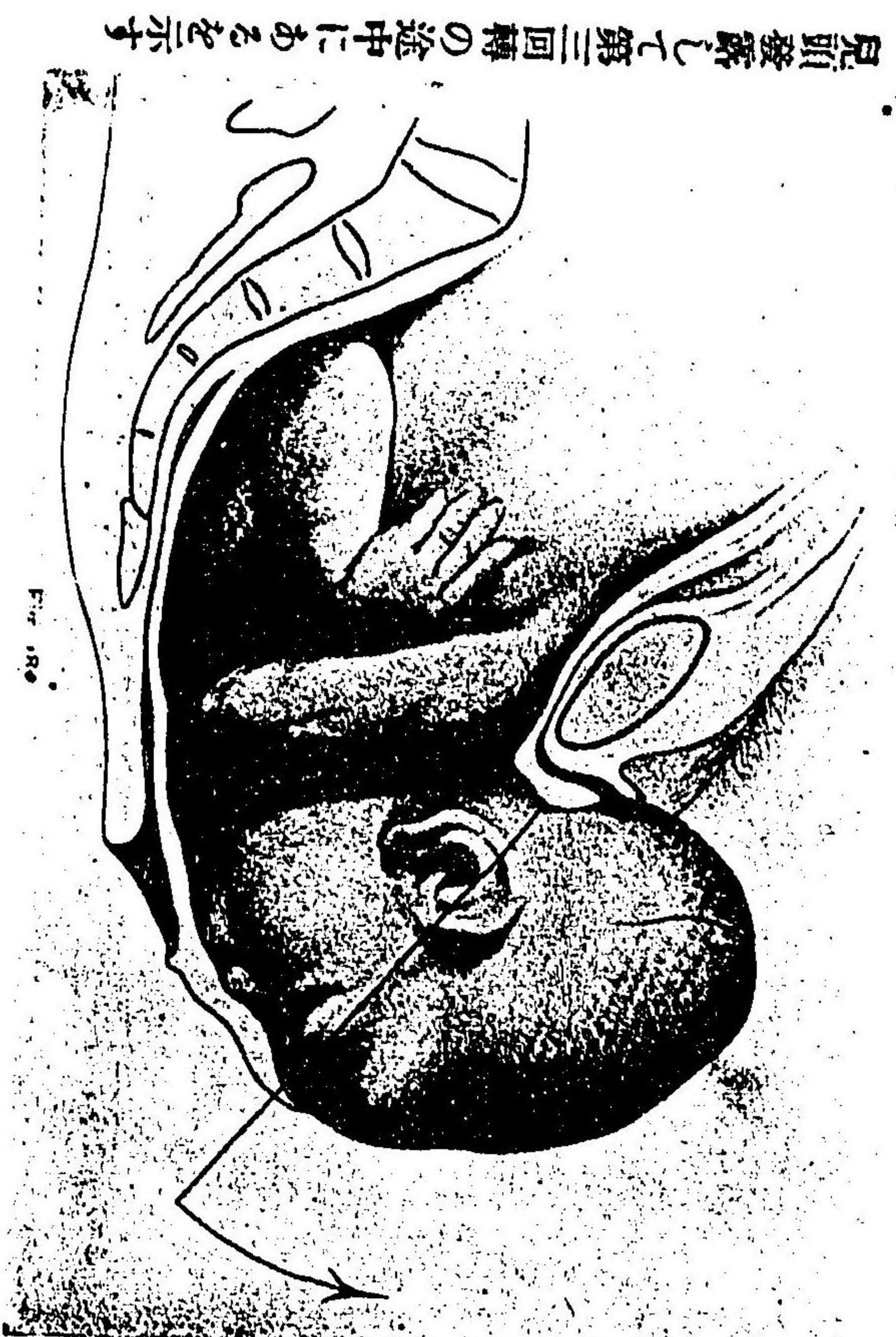
生ずるものありし又たは兒背の回轉が源にして兒頭は之れに従つて回轉するなりなごの説あれども一般に信ぜらるゝ近

兒頭非直して第三回轉を營むことを示す



第五回圖

頃の説は骨盤筋肉の作用に由て來るものにして筋肉の作用と
兒頭の形状との關係に由て生ずる結果に外ならず云ふ



兒頭發露して第三回轉の途中にあるを示す

圖 一 四 編

兒頭第三回轉を營
む理由

第三回轉(第二橫軸回轉) 兒頭骨盤出口に至り尾椎骨を後
方に壓排し會陰を膨隆せしめ後頭は漸次陰裂間に現はれ項部
耻骨弓下に産出するに至れば第三回轉を始むるものにして即
ち第一回轉と全く反對の運動をなし頤部は胸部を離れ顙頂前
頭顔面は會陰上を滑脱し産出するに至る

此回轉は兒頭が骨盤基底部及び會陰抵抗の爲めに抵抗少なき
陰裂に向つて壓排せらるゝに由て起る

肩胛の産出

兒頭産出する時は後頭は前方に顔面は後方會陰の方に向かひ
頸部は膈中にあり然るに肩胛は兒頭の排露と同時に骨盤入口
に進入し肩胛の横徑は初め兒頭の矢狀縫合の取りたると反對

肩胛の回轉

の骨盤斜徑線に一致して骨盤腔内に入り前方の肩胛は漸次前方に（第一體向に在ては右より左に第二體向に在りては左より右に）回轉して骨盤出口に至れば肩胛の横徑は骨盤の直徑線に一致し前方の肩胛は耻骨弓下に固定せられ後方の肩胛は産道の後壁を下りて陰門外に産出す而して斯く肩胛の回轉するに従がひ初め會陰の方に向へる兒の顔面は母の右或は左の大靨（第一體向に在ては右、第二體向に在ては左、大靨）に向ふべし是れを兒頭の、外回轉、又は第四回轉、と稱す、肩胛全く産出する時は其他の體部は容易に是に續て産出し得るものとす

兒頭が産道通過の際は後頭骨及び前頭骨縁は多くは顛頂骨の下に嵌入し先進せる顛頂骨縁は常に他のものゝ上に重なり以て兒頭の容積を小ならしめ、産瘤は常に最も先進せる部に生ず

兒頭の外回轉

分娩時兒頭の變化

べし而して後頭位にて分娩せる兒の後頭は著しく延長せるが如く見ゆ

第六十八節 第一後頭位の外診分娩

機轉及内診

外診、第一後頭位に在ては胎兒の背部を母體腹部の左側に於て觸知し子宮底の中央若しくは稍左側に於て臀部を觸れ小部分（上肢殊に下肢を云ふ）は右側に於て觸知す而て頭部は耻骨縫際上に於て觸れ臍と左の腸骨前上棘とを結合せる線のほぼ中央に於て心音を聽取す

分娩機轉、初め兒頭の矢狀縫合は骨盤入口の横徑線に一致するか或は第一斜徑線に近き位置を占め骨盤入口に進入し其

- 第一及第二頭位に於て胎兒の位置を決定す
- 頭位第二胎向第一分
- 各胎位に於て胎兒の心音を聽取す
- 第一頭位に於て分娩機轉を説明す
- 第一頭位に於て胎兒の位置を決定す

際第一回轉に由りて小顛門の部最も下降し骨盤腔内に入るに
從ひて漸次第二回轉を營

第一後頭位外診上の状態を示す

圖九百第

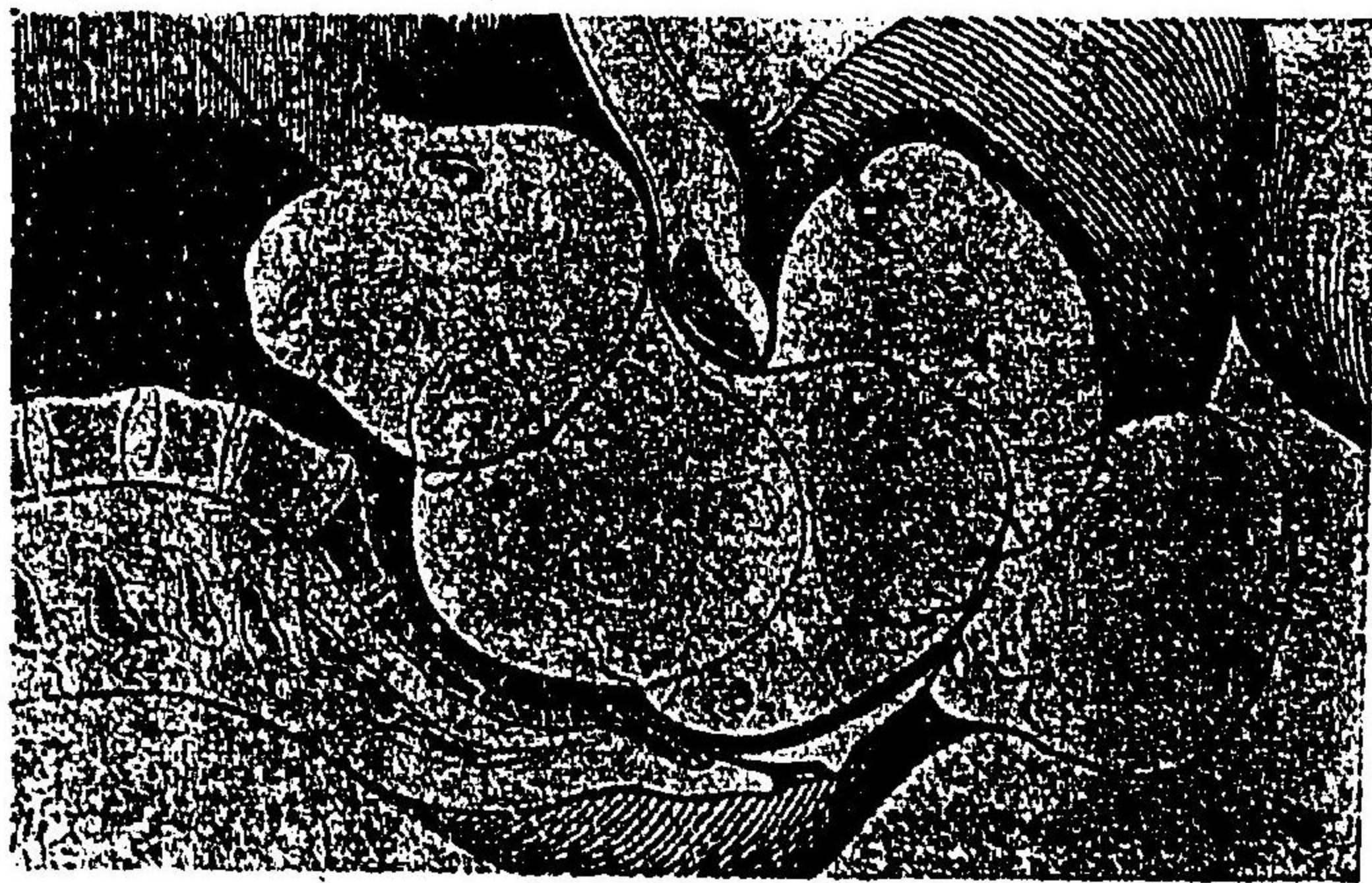


×は臍部 ○は胎音聴取の部位

部まで耻骨弓下に産出し項部こゝに停止して終に第三回轉を
營み顔面は産道の後壁を下り前頭顔面頭部は漸次會陰より陰
門外に出て兒頭全く産出す而して肩胛の横徑は第二斜徑線に

するに至り後頭は項窩の
骨盤出口の直徑線と一致
で兒頭の矢狀縫合は殆ど
の顛頂骨は先づ排臨し次
向ひ骨盤出口に至れば右
右に回轉して耻骨縫合に
み小顛門は母體の左より
從ひて漸次第二回轉を營

圖十百第



第一後頭位の外診分娩機轉を示す

圖中點線の骨盤腔の中心を以て胎頭の中心とする。胎頭の矢狀縫合は矢狀線に一致し、小顛門は母體の左より、大顛門は母體の右より、骨盤腔に入る。胎頭の横徑は第二斜徑線に一致し、胎頭の矢狀縫合は矢狀線に一致し、小顛門は母體の左より、大顛門は母體の右より、骨盤腔に入る。

一致し骨盤入口内に
入り右の肩胛は右前
方左肩胛は左後方に
在り骨盤内を通過す
るに從がひ右の肩胛
は母の右より左に回
轉して骨盤出口に至
り耻骨弓下に来りて
止まり肩胛の横徑は
骨盤出口の直徑線に
一致し左の肩胛は産
道の後壁を下りて會

陰より出づ此際兒の顔面は母體の右の大腿に向ふ而して肩胛
産出の後ち兒の體部は容易に分娩を終るものとす産瘤は右顱
第一後頭位にて分娩したる兒頭の變化を示す



第百一十圖 (甲)

○第一後頭位内診上ノ
處見ナリトセ

頂骨の後方小
顱門に近き部
に生ずべく左
の顱頂骨縁は
右の顱頂骨縁
の下に嵌入す
べし
内診、内診は
兒頭が骨盤入
口にあると骨

同

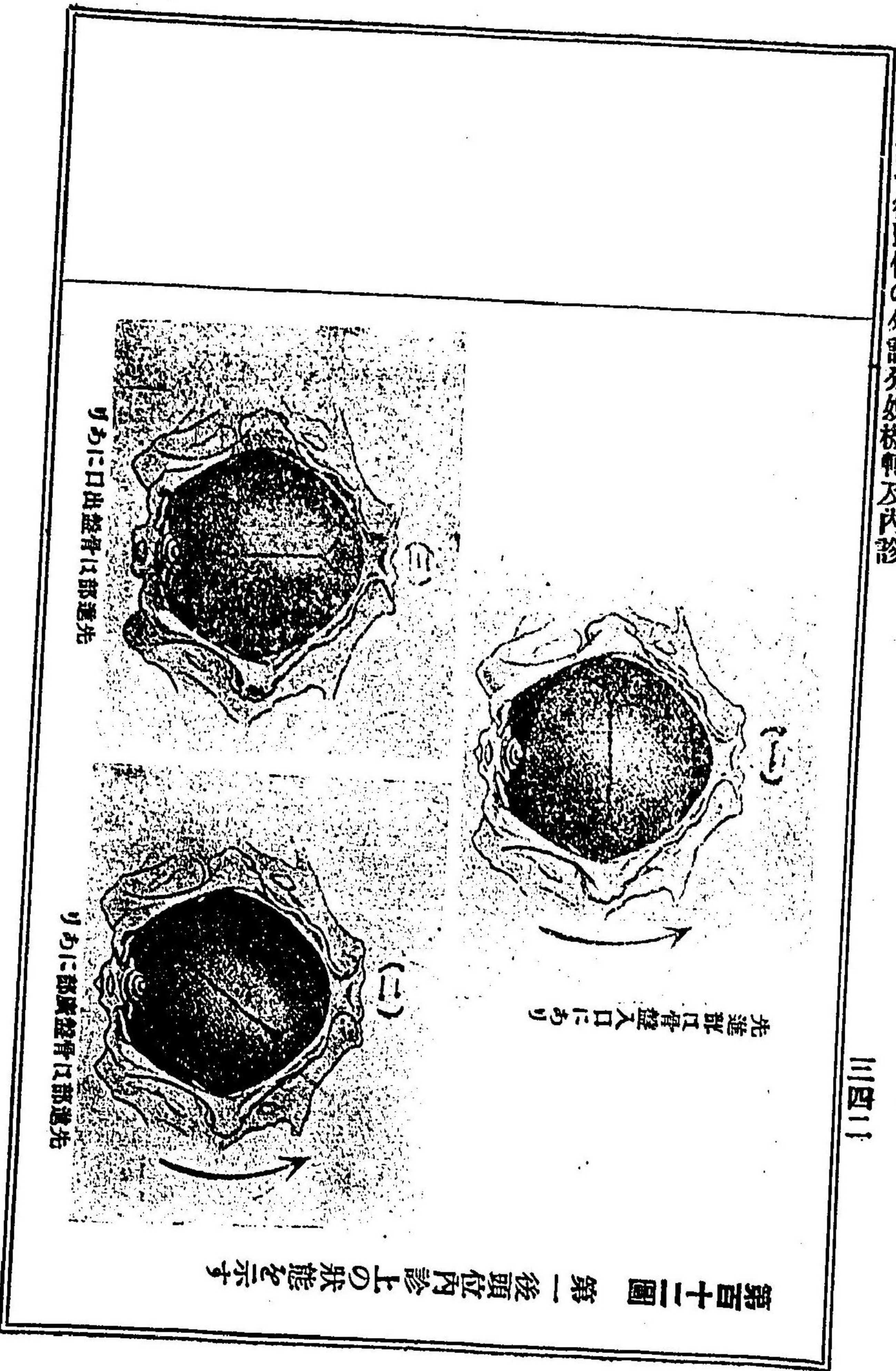
第百一十圖 (乙)



ある時あるを以て以下内診の條下に述ぶる處は常に骨盤廣部
に於ける所見と知るべし

第一後頭位に在て兒頭骨盤腔内に進めば其矢狀縫合は第一斜

盤廣部に在る
と出口にある
とに由て其の
所見異なれり
と雖も産婆
に必要ある内
診は主に破水
後にして兒頭
が骨盤廣部に



第一後頭位内診上の状態を示す

徑線に一致し小顛門は左前方にありて最も深く下降し觸知し易く大顛門は右後方に在りて觸知し難し而して兒の後頭は左の腸耻結節に向かひ顔面は右の薦腸關節に向ふ

第六十九節 第二後頭位(第二頭蓋位)

第二後頭位外診上の状態を示す

の外診分娩機轉及び内診



Xは臍部○は心音聴取部

外診、第二後頭位に在ては胎兒の背部は母體腹部の右側に於て觸れ、臀部は子宮底の中央若くは稍々右側に存し小

○第二頭蓋位ノ外診内
診上ノ所見位ニ第一
頭蓋位ト異ナル點ナ
キ

第三百十三圖

○第二頭蓋位ノ分娩機轉如何

部分は兒背と反對即ち左側に於て觸れ頭部は耻骨縫際上にあ
り胎兒心音は臍と右腸骨前上棘との間に於て聴取す
分娩機轉 初め兒頭の矢狀縫合は骨盤入口の横徑線若くは

第二後頭位にて分娩したる兒頭の變化を示す

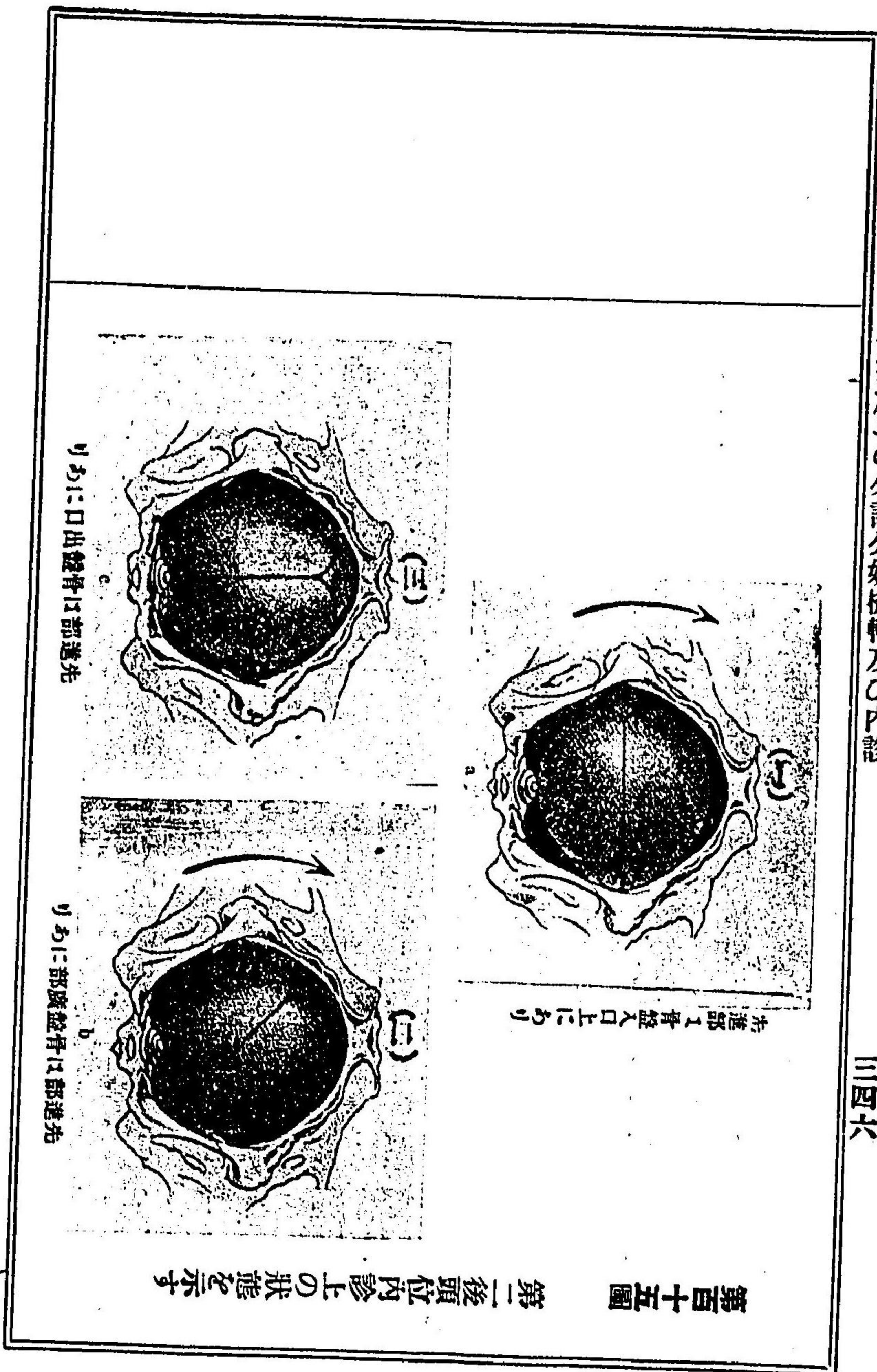


多くは第三斜徑線に近き位置を
占め骨盤腔内に
進入するの際第
二回轉に由て小
顛門の部最も下
降し顛部は胸に
接し骨盤腔内に
入るに従がひ第

第四百四圖

二回轉を營み後頭は右より左に回轉して前方に回り骨盤出口
に至れば左顛頂は先づ排臨し次で兒頭の矢狀縫合は骨盤出口
の直徑線と一致するに至る而して第三回轉は第一後頭位に於
けるごとく同一あり肩胛の横徑は第一斜徑線に一致し骨盤入
口内に入り左の肩胛は左より右に回轉して前方耻骨縫際下に
至りて止まり右の肩胛は産道後壁を下りて會陰より産出し其
際兒頭の第四回轉に由て顔面は母體の左大腿に向ふ産瘕は左
の顛頂骨の後上方に生じ右顛頂骨縁は左顛頂骨下に進入する
こと通常なり

内診 兒頭骨盤腔内に在らば矢狀縫合は第二斜徑線に一致し
小顛門は右前方に在りて最下降し觸知し易く大顛門は左後方
にありて觸知する事困難あり而して兒の後頭は右の腸耻結節



第十四圖 第二後頭位内診上の状態を示す

に向ひ顔面は左の薦腸關節に向かふ

第七十節 産婦の攝生法並に産婆の取扱法

産婆故なくして急病人の招きに應ぜざる時は一日以上三日以下の拘留又は三十日以下の拘留又は五十日以下の拘留又は六十日以下の拘留又は七十日以下の拘留又は八十日以下の拘留又は九十日以下の拘留又は百日以下の拘留又は百十日以下の拘留又は百二十日以下の拘留又は百三十日以下の拘留又は百四十日以下の拘留又は百五十日以下の拘留又は百六十日以下の拘留又は百七十日以下の拘留又は百八十日以下の拘留又は百九十日以下の拘留又は二百日以下の拘留又は二百十日以下の拘留又は二百二十日以下の拘留又は二百三十日以下の拘留又は二百四十日以下の拘留又は二百五十日以下の拘留又は二百六十日以下の拘留又は二百七十日以下の拘留又は二百八十日以下の拘留又は二百九十日以下の拘留又は三百日以下の拘留又は三百十日以下の拘留又は三百二十日以下の拘留又は三百三十日以下の拘留又は三百四十日以下の拘留又は三百五十日以下の拘留又は三百六十日以下の拘留又は三百七十日以下の拘留又は三百八十日以下の拘留又は三百九十日以下の拘留又は四百日以下の拘留又は四百十日以下の拘留又は四百二十日以下の拘留又は四百三十日以下の拘留又は四百四十日以下の拘留又は四百五十日以下の拘留又は四百六十日以下の拘留又は四百七十日以下の拘留又は四百八十日以下の拘留又は四百九十日以下の拘留又は五百日以下の拘留又は五百十日以下の拘留又は五百二十日以下の拘留又は五百三十日以下の拘留又は五百四十日以下の拘留又は五百五十日以下の拘留又は五百六十日以下の拘留又は五百七十日以下の拘留又は五百八十日以下の拘留又は五百九十日以下の拘留又は六百日以下の拘留又は六百十日以下の拘留又は六百二十日以下の拘留又は六百三十日以下の拘留又は六百四十日以下の拘留又は六百五十日以下の拘留又は六百六十日以下の拘留又は六百七十日以下の拘留又は六百八十日以下の拘留又は六百九十日以下の拘留又は七百日以下の拘留又は七百十日以下の拘留又は七百二十日以下の拘留又は七百三十日以下の拘留又は七百四十日以下の拘留又は七百五十日以下の拘留又は七百六十日以下の拘留又は七百七十日以下の拘留又は七百八十日以下の拘留又は七百九十日以下の拘留又は八百日以下の拘留又は八百十日以下の拘留又は八百二十日以下の拘留又は八百三十日以下の拘留又は八百四十日以下の拘留又は八百五十日以下の拘留又は八百六十日以下の拘留又は八百七十日以下の拘留又は八百八十日以下の拘留又は八百九十日以下の拘留又は九百日以下の拘留又は九百十日以下の拘留又は九百二十日以下の拘留又は九百三十日以下の拘留又は九百四十日以下の拘留又は九百五十日以下の拘留又は九百六十日以下の拘留又は九百七十日以下の拘留又は九百八十日以下の拘留又は九百九十日以下の拘留又は千日以下の拘留又は千十日以下の拘留又は千二十日以下の拘留又は千三十日以下の拘留又は千四十日以下の拘留又は千五十日以下の拘留又は千六十日以下の拘留又は千七十日以下の拘留又は千八十日以下の拘留又は千九十日以下の拘留又は千日以下の拘留

産婆は晝夜の別なく何時にても産家の需めに應ずるの義務を有するものにして自ら病に罹りし時或は現に一婦人の分娩に従事し居る時或は産褥熱の如き傳染病に罹れる婦人を取扱へる時の外は是を拒む事を得ず若し故なくして産家の需めに應ぜざる時は道徳上の罪人とある可きは勿論法律上よりも亦た所罰を受ざるべからず殊に分娩の経過は變化し易く若し時を過たば屢々兒は勿論母の生命迄も失ふ事あるべきが故に常に分娩に要する器具藥品衣服等を整へ置き産家よりの需あらば

○分規ノ時ニ臨ンテ産婆ノ注意スベキ要點ヲ順記セヨ

直ちに之れに應ずるの用意肝要あり而して其分娩を取扱ふに當つては正規分娩なる時は決して出産を促がすが如き處置を爲すの必要なきのみならずかゝる處置を爲す時は之れが爲めに分娩経過を障害する事あるを忘る可らず即ち産婆の主なる取扱法は産出期の末期に於て始まる可し、雖も其以前に在りても注意深き觀察と検査とに由て少しにても分娩経過を障碍すべきものを排除するに勉め極めて瑣細の變化にても之れを看過す事なく若し少しにても異常を發見せば時を失せず産科醫の來診を乞ふ様心懸く可し且つ正規の分娩にして何等の異常をも認めざる場合に於ても産家より醫師を招く事を望まば少しも故障なく寧ろ喜んで之れを承諾すべし何となれば醫師來診後に於て萬一異常の経過に變ずる事あるも産婆の責任

○分規ノ準備トハ如何

は輕ければなり
産婆既に産家に到着し尙ほ暇ある時か若しくは既に妊娠中より診察し居る場合なる時は豫め産室産床等を撰び分娩時に於ける諸種の準備をなし置くべし

第七十一節 産室

産室は天井高く、明らかにして、空氣の流通よく清潔にして、廣き室を撰び、直接日光の射入する事あらば窓懸け又は屏風を以て之れを遮り、寒冷なる氣候に在ては戸障子壁等の隙間より漏るる風を防ぎ、暖かにして常に攝氏十八度乃至二十度あるを良し、故に暖爐の設けなき室内に在りては適宜火鉢等を以て暖めざる可らず（但し火鉢を用ゆるには室外に於て充分木炭を紅

産室は産褥中續て使用す

子供はどかく面白
想に産室内に入る
を好むものなり故
に遠けざるべから
ず

餘り軟かき蒲團の
上に臥する時は努
責の際充分力をい
る、事能はず

熾せしめたる後室内に入れざれば炭酸瓦斯を發生して中毒を
起す恐れあり) 而して不用の器具殊に室内を不潔ならしむる
もの臭氣を發するもの等は悉く是れを遠ざけ唯だ産婆の携帶
器具及び分娩に必要な消毒用具のみ備へ付くべし又た家人
の多數入り込むを禁じ唯だ一二の手助けとなるべき温順冷劑
にして産婦の氣に適へるものゝみを留まらしむべし

第七十二節 産床

産床は何れの方よりも近寄り易き様室の中央若しくは産婦の
頭部の方に片寄りて設け清潔なる蒲團を用ゆべし而して敷蒲
團は一定の硬度を必要とするが故に羽毛等よりあれるものは
甚だ不適當なり若し寢臺を用得る時は其一端に紐或は手拭

産婦には分娩の始
まる前に髪を梳ら
しめ置くを要す
不潔の「ぼろ」は禁
物なり

産家に前以て用意
すべき物品

等を選び附け産婦努責の際之れを握るに便ならしむ可し枕は
通常男子の用ゆる坊子枕を用ゆべく木製のものを用ゆる時は
知らず知らず産婦の創傷を來す恐れあり又た産床は平坦なる
を良とし従來民間に行はるゝ高枕の如きは腦貧血を起し易き
を以て全く廢すべし
以上の如く産室産床を準備し産時に用ゆる衣服腰卷の如きは
前以て洗濯し度々日光に晒せるものか若くは全く新調のもの
を用ゐしめ下着腰卷等直接身體に觸るゝものは出來得べくん
ば消毒するを良とし且つ妊娠中より産婦をして左記の品を準
備し置かしめば甚だ可なり最も皆な蒸汽消毒等に由て殺菌せ
るものあらざる可らず

防水布、直接蒲團の上を被ふもの

敷布、防水布の上を被ふもの

産用蒲團 敷枚、通常の大形座蒲團位の大きにして一方油

紙よりなり他方は綿紗よりあり中に脱脂綿を入れたる

ものにして産婦の臀下に敷き血液羊水等を吸収するに

供ふ(藁灰蒲團を以て代用し得)

脚袋二本、木綿製股引の如きものにて分娩の際外陰部及

び大腿の消毒の後穿たしむ

膝掛、分娩の際は衣服を腰部以上に捲き上ぐるが故に

下腹以下の暴露せざる様之れにて被ふ夏時は幅廣き布

片にて可あり冬時は薄き蒲團を用ゆべし

脱脂綿、脱脂綿紗の多量 外陰部の清拭壓抵等に供す

丁字帯、五六個 半幅の晒木綿三尺計りのもの一端に

長さ三尺計りの紐を附す

産褥用蒲團、二三枚 産用の蒲團に同じ

産褥用三角形蒲團、二三個 各尖端に紐を有し丁字帯

の代用をあし且つ血液等を吸収するに供す

腹帯用蒲團及び腹帯、一個 腹帯用蒲團は方八寸位に

て可あり、腹帯は長さ三尺位幅一尺位のフランチル又

は木綿二枚を重ね其外層のもの、兩端を各三四片に引

き裂きたるもの

初生児の湯上げ、一枚 大ある西洋手拭を良しす

同口眼拭綿、少し

石 鹼、一個 刷毛、一個

胎盤收容器、一個 手洗盤、二三個

藁灰繙帯(灰枕)

若し貧家にして以上の如く準備するの餘裕なき時は洗濯して屢々日光に曝せる衣服及び布片等を準備し置かしむべし
 分晩時及び産褥に於て汚物を吸収せしむる繙帯材料として藁灰繙帯を用ゆる時は其吸収力に富むる綿紗等より其價の廉なるに何處にても得らるゝに能く消毒の目的に適へるこの便利あり今其製法及び用法を述べれば左の如し
 藁灰繙帯とは藁灰を容れたる一の袋即ち灰枕にして先づ脱脂したる金巾又は晒木綿、綿紗等を以て方形或は長方形の糠袋に等しき一方口の開きたる袋數個を製して蒸汽消毒又は煮沸消毒を行なひ乾燥せしめ之に黒色の藁灰を適當に充たし消毒したる手指及び糸針を以て其口を縫ひ塞きたるものなり

其藁灰を製するには大なる鍋に稻藁を盛り上げ火を點じて能く焼けるを待ち蓋をなし暫時冷却して用に供す然れども此際注意すべきは藁の焼け具合にして餘り焼け過ぎて白くからざる様にし眞黒なる所謂藁灰を得るに止めざる可らず若し大なる鍋あき時は土間に藁をつみ焼くるに同時に能く攪拌して火を早く消し藁灰を得るもよし
 灰枕は能く空氣中の濕氣を吸収するの性あるにより成る可く用に臨みて製する事必要なり且雖も鋺力罐の如き密閉し得るものなれば消毒乾燥したるのち之れを貯ふる事を得べし而して産床には座蒲團位のもの數個を要し外陰部の壓抵には長さ六七寸幅四五寸の袋數十個を要す一度汚染したる灰枕も内容を去り能く洗ひ消毒さへ行ふ時

○産婆ノ常ニ携帶スベキ物品ハ如何
 ○産婆ノ携帶スベキ器械及ビ藥品ハ如何
 ○産婆ノ日常携帶スベキ必要ノ器械及ビ藥品如何

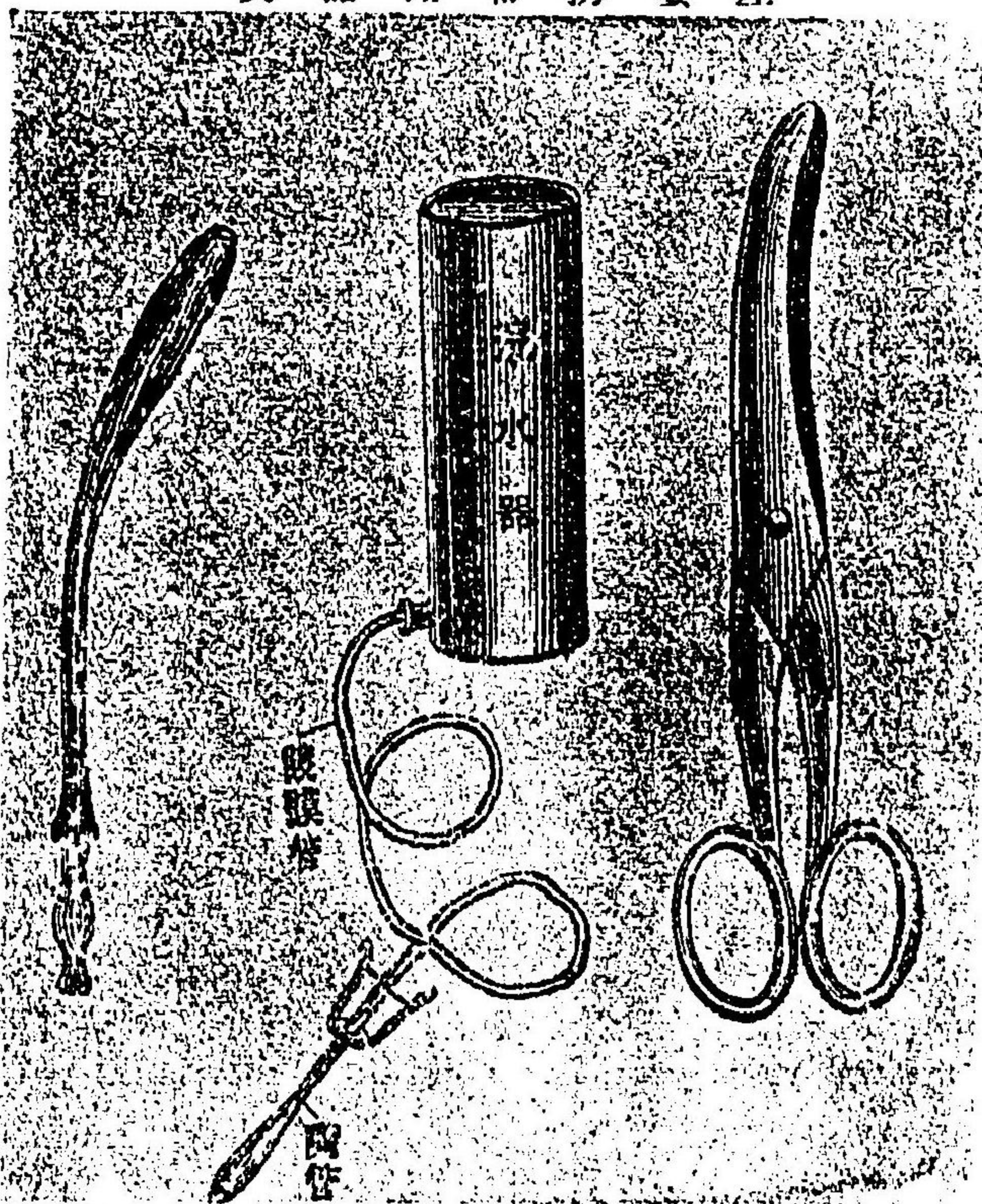
は何回にても使用し得らる可し

第七十三節 産婆携帶用器具

産婆が日常使用し殊に分娩に際して携帶すべき器具を擧ぐれば左の如くにして既に消毒法の條下に於て論述したる方法により常に嚴重なる消毒を行なひたる後ち用ゆべし

- 一、爪鋏及び爪剪刀、各一個
- 二、石鹼 一個
- 三、刷毛 一個
- 四、液量計 一個
- 五、溶解石炭酸又はリゾール 一個
- 六、消毒盤、三個

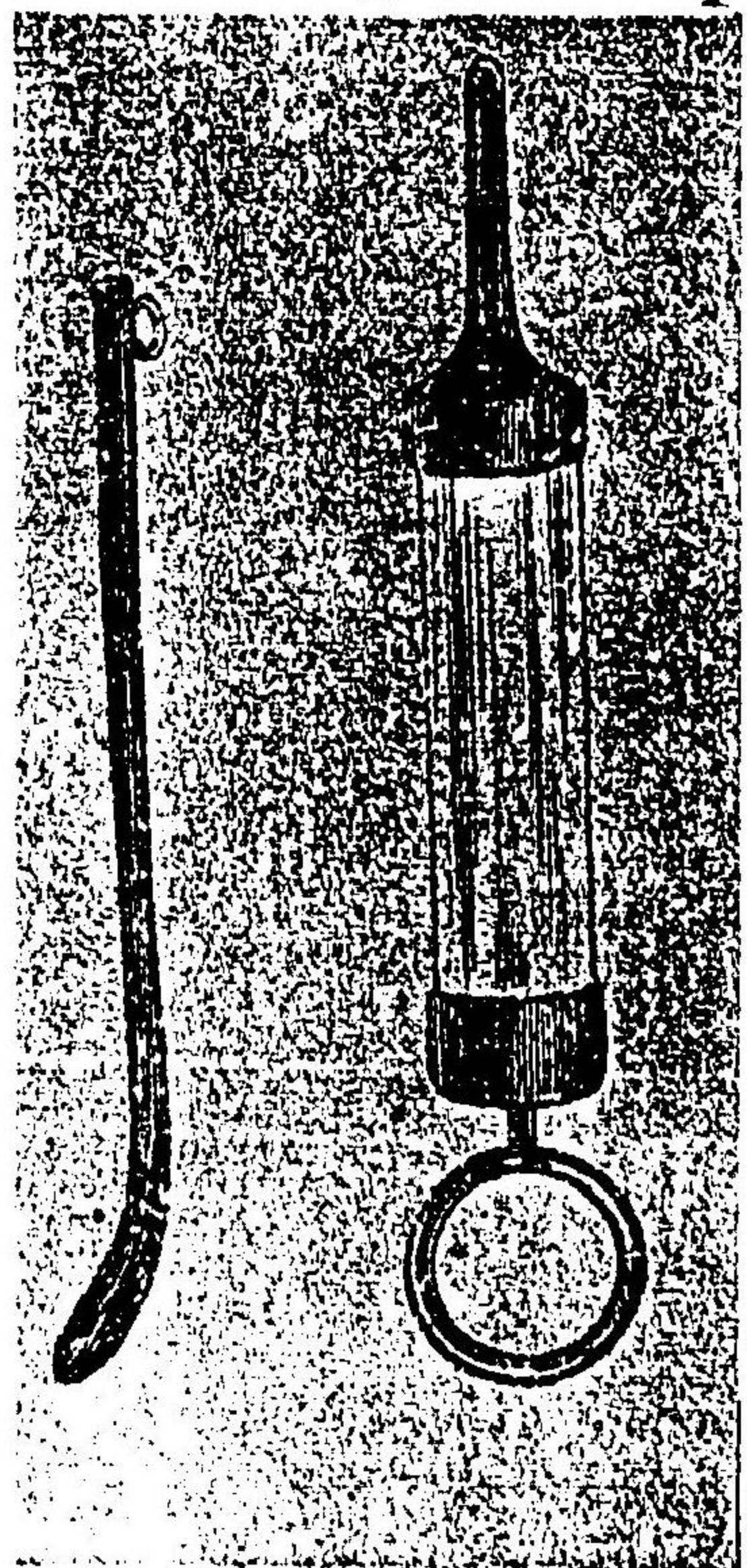
(一) 圖六十百第
 具器用帶携婆産



七、千瓦以上を容るべき洗水器、(イルリガートル) 一

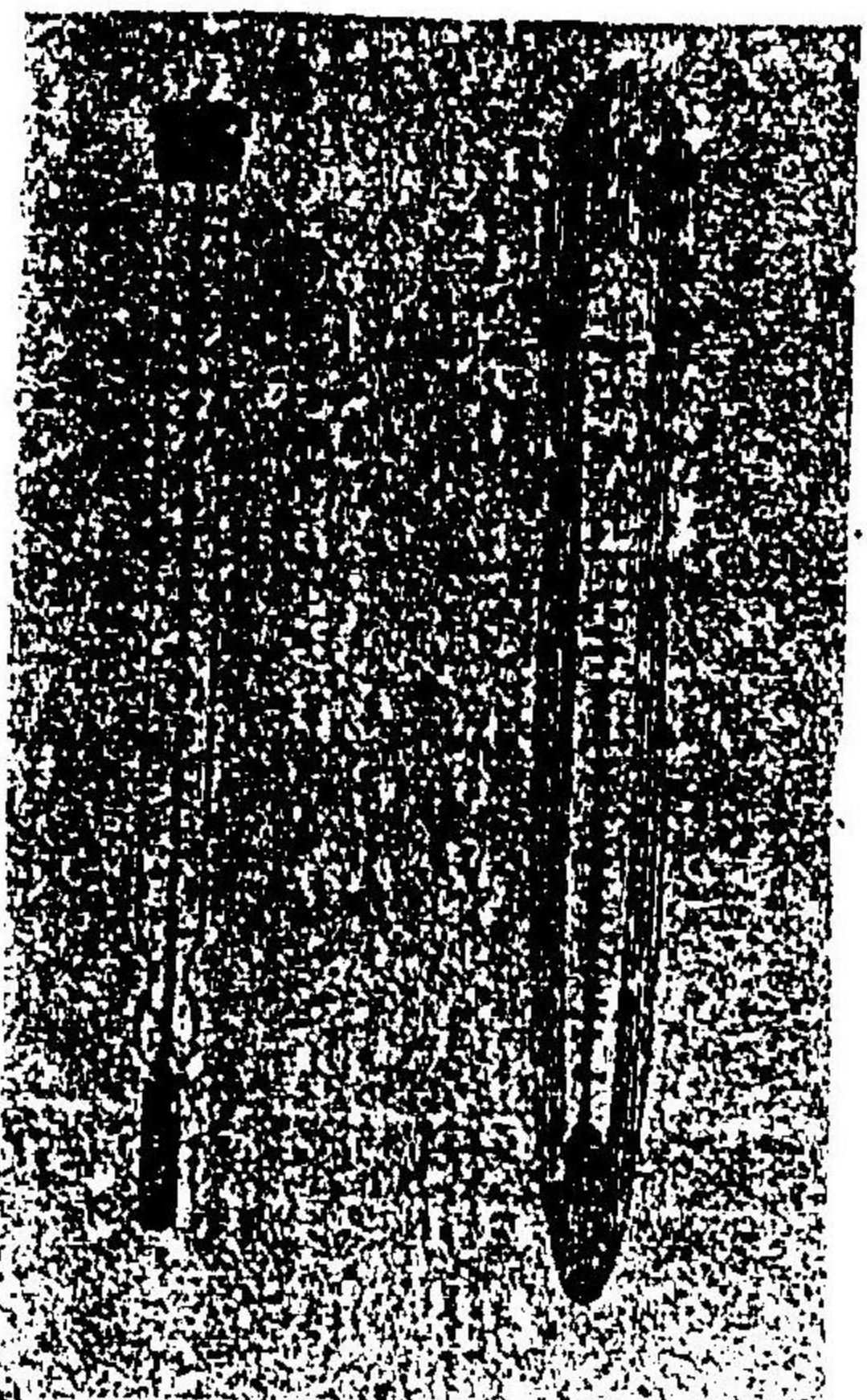
- 1 臍帯剪刀
- 2 洗水器
- 3 陰洗淋用噴管

(二) 圖六十百第
同



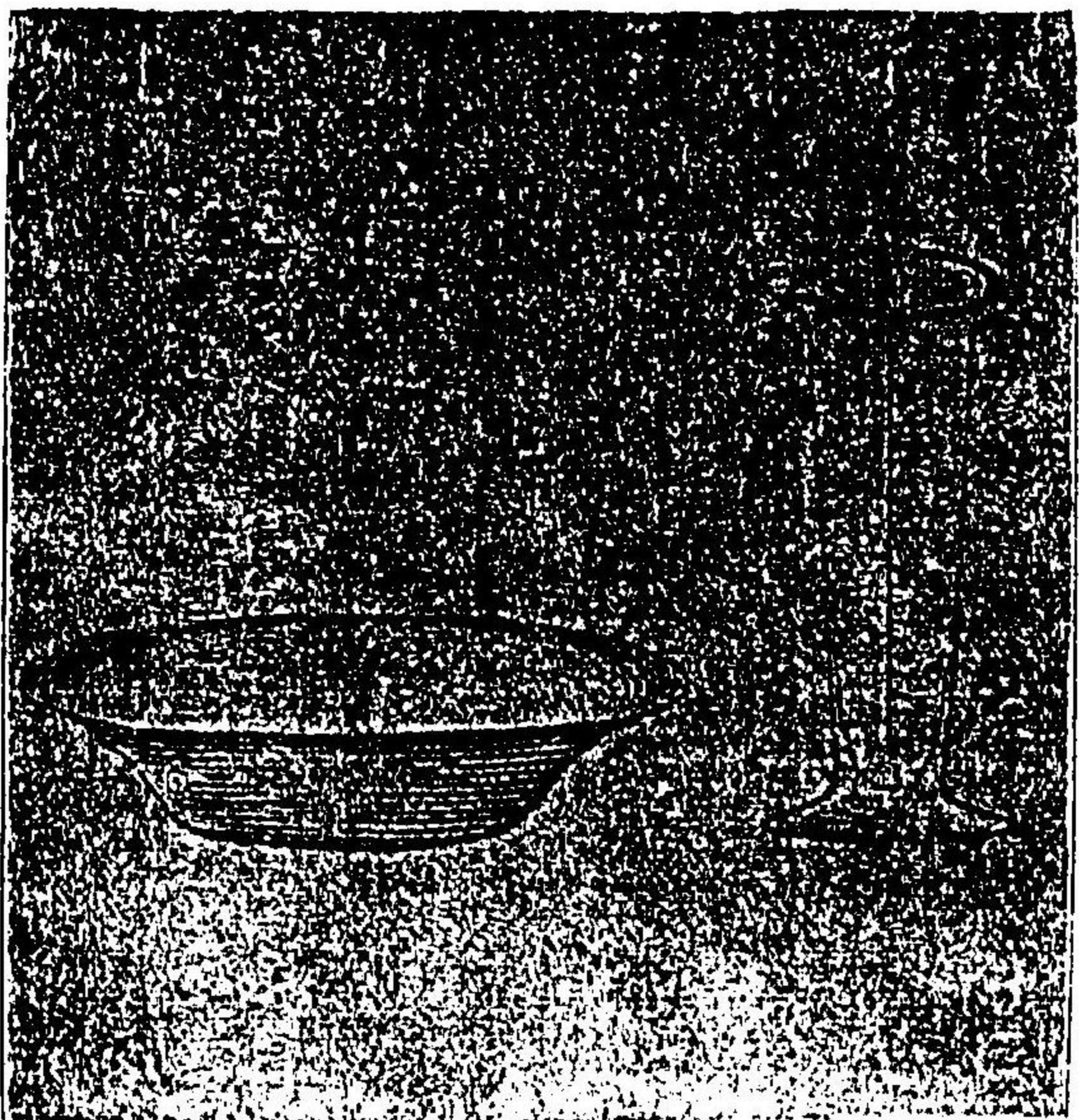
1 個量設林院
器
2 金屬製婦人
尿道カテー
テル

(三) 圖六十百第
同



1 浴用検温器
2 検温器

(四) 圖六十百第
同



1 液量計
2 手洗鉢

個凡そ三
尺位の護
謨管を附
し一端に
嘴管を附
着せしめ
洗滌或は
浣腸をな
すに用ゆ

洗滌の時と浣腸の時とは嘴管のみならず護謨管も共に交換するを良くし故に出来得べくんば護謨管は二本づつ携帯すべし

- 八、膈内洗滌用嘴管、 一個
- 九、浣腸用嘴管、 一個
- 十、尿道カテーテル、金屬製の婦人に適するもの一個こ、